明治四十一年十一月十五日増刊(毎月一回一日)　明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

# 女子文壇




定期增刊　第四年第十七號

本品は最も完全なる白毛赤毛染なり又本品を以て赤毛を染る時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店薬店に有り




本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

# 女子文壇臨時增刊

四十二年第一增刊

# 新美文

十二月二十五日發表

物に驚き易く事に感じ易き青春の人は今や讀むべく語るべく書くべきことの多きに苦しめり、之が大勢の赴く處を知らしむるものは其等若き人の手に成りし文集に如くはなし、殊に現代の隨筆とも稱すべき美文に至りては千變萬化、諸君の思想の自由なるが如く作ることも自由なり、今我社「女子文壇」の臨時增刊として『新美文』を出版し、紙數の大半を此に宛て、併せて一般の文藝作品を募り、例の如き大冊子を編纂して讀書界の空氣を淸新ならしめんとす、冀くは競ふて投稿せよ

## 懸賞贈品

○第壹種（凡て正金）

壹等賞　金貳拾圓
貳等賞　金拾圓
自三等至五等賞　各金五圓
自六等至十等賞　各金貳圓

○第二種（凡て呉服物）

壹等賞　價格七圓
貳等賞　價格四圓
三等賞　同貳圓

○第三種（凡て呉服物）

壹等賞　價格五圓
貳等賞　同三圓
三等賞　同壹圓

○別賞（凡て物品）

自一等至十等賞　價格貳圓以内

## 大懸賞募集

投稿締切　十二月廿五日限

## 新美文募集項目

▼第壹種▲

### 美文

《廿四字詰百行限》

感情を主としたる文
事實を主としたる文
天然を描寫したる文
家庭を書ける文
或る人を描ける文
その日〱の日記文
旅行して得たる紀行文
對話を主としたる文
地方的特色のある文

投稿諸君は必ず此分類に據るの要なけれども、題を考ふる便宜上假に分類したるのみ、要するに實用的のものを除いて、一般の文章は殆んど美文の系統に屬す。

▼第二種▲

○小説　總假名付一行廿四字百行
○新體詩　總假名付二十行限
○論文　一行二十四字三十行限
○書簡文　一行二十四字三十行限

▼第三種▲

○和歌　一首限
○俳句　一句限
○短文　總假名付一行廿四字五行限

○別賞　圖畫　縱横隨意二寸五分の三寸

▲投稿心得摘要

○題と文體とは各自の隨意なり。
○投稿紙は半紙又は原稿紙に限る
○投稿は課題を異にする毎に必ず別の用紙に認むべし。
○投稿は句點を施すべし。
○圏點は附すべからず。
○投稿の封筒は東京京橋女子文壇編輯局宛新美文原稿の文字を傍書すべし。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽竊の疑あるものは入賞すとも無効とす。
○入賞の通知を受けたる者は最近寫眞送付あれ。
○投稿は一切返附せず、不足未納稅は謝絶す。
○入賞者へ懸賞品送付は發表一ケ月後たること。

發行所（投稿受付）　東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社

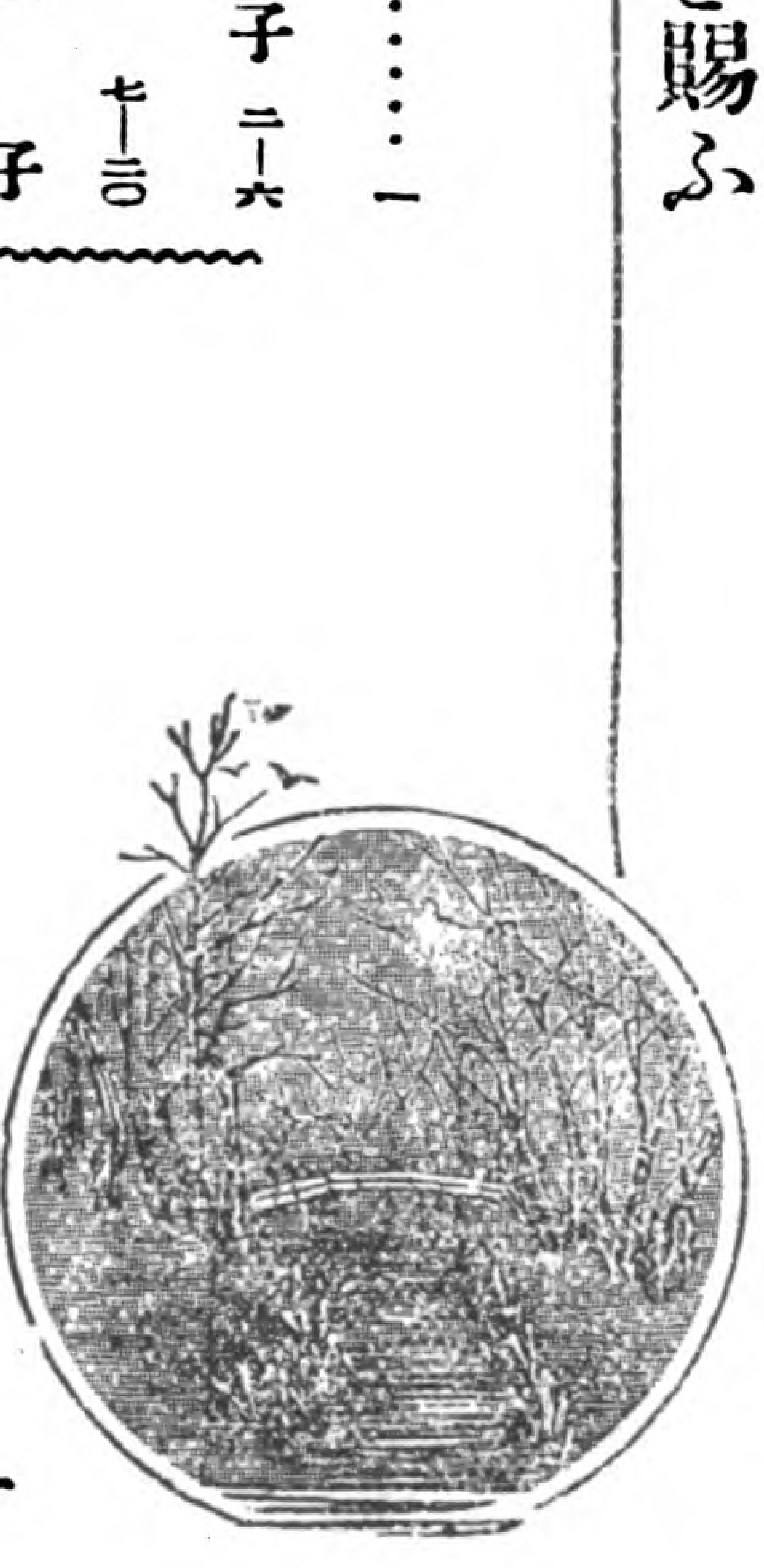
十一月十五日増刊

# 女子文壇

第四年
第拾七號

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ







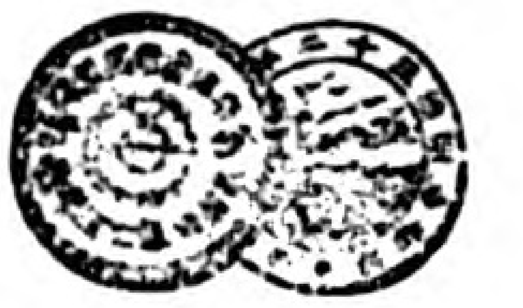
# 立田姫目次

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

# 壽美禮おしろい




五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい
ヴワイオレツト水製

| | | |
|---|---|---|
| ぬり製 | 大壜二十錢 | 小壜十二百 |
| 水製 | 大壜二十五錢 | 中壜十五錢 |
| | 小壜十錢 | |
| 玉製 | | |
| 粉製 | | |
| 肉色各種 | | |
| 錫栓附乳白硝子壜入 | | |

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及醫店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ漸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑壽美禮あらひ粉の特長

錫、壺、紅彩蝶番ひ罐詰入　錢
別製罐詰　五拾錢
大袋　二錢
小袋　一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及醫店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舖
東京東兩國元町(兩國橋際)
壽美禮堂謹製
(電話浪花二七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

微かな匂ひ



大江原色版部製版

（乙の四）

# 誌友面影（十九）



（美濃）日比野富美子



（上總）四ノ宮凌子

（越後）伊藤汀子





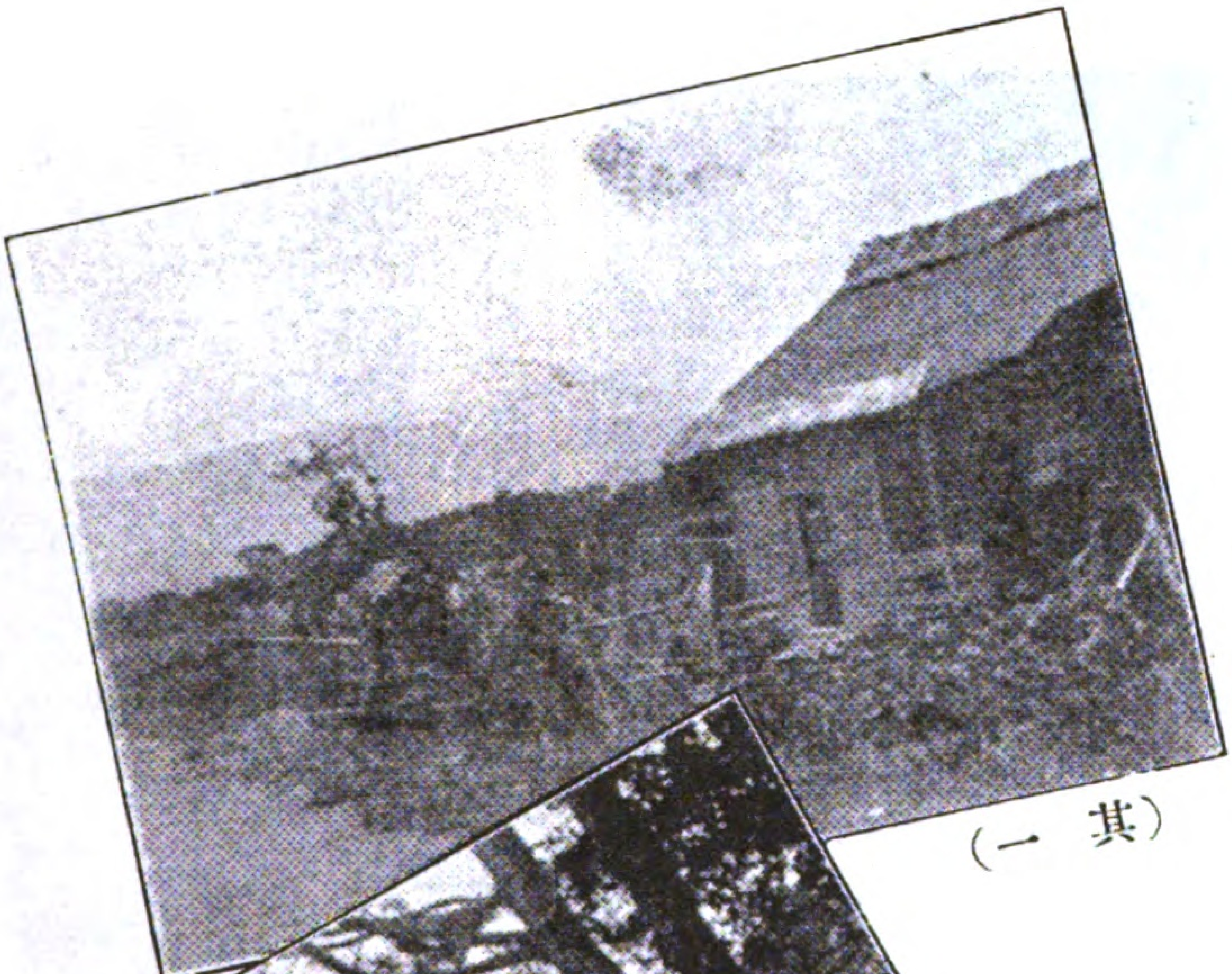
（岩代）松井ます子



（豐後）高橋さだ子

皆さんどし〳〵お寫眞を送つて下さい掲載濟の上返送します

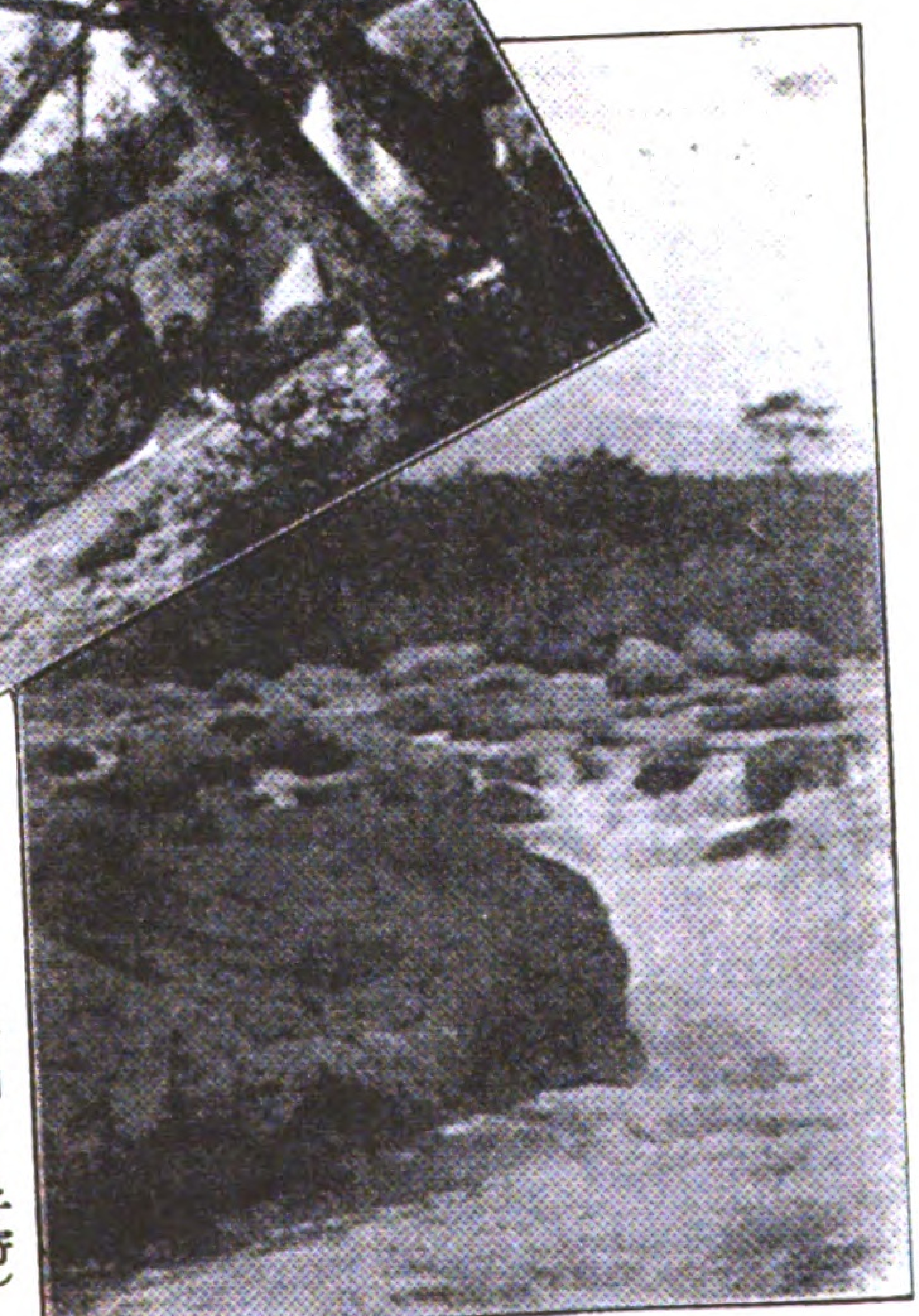
伊豆三島附近



(其　一)



(其　二)



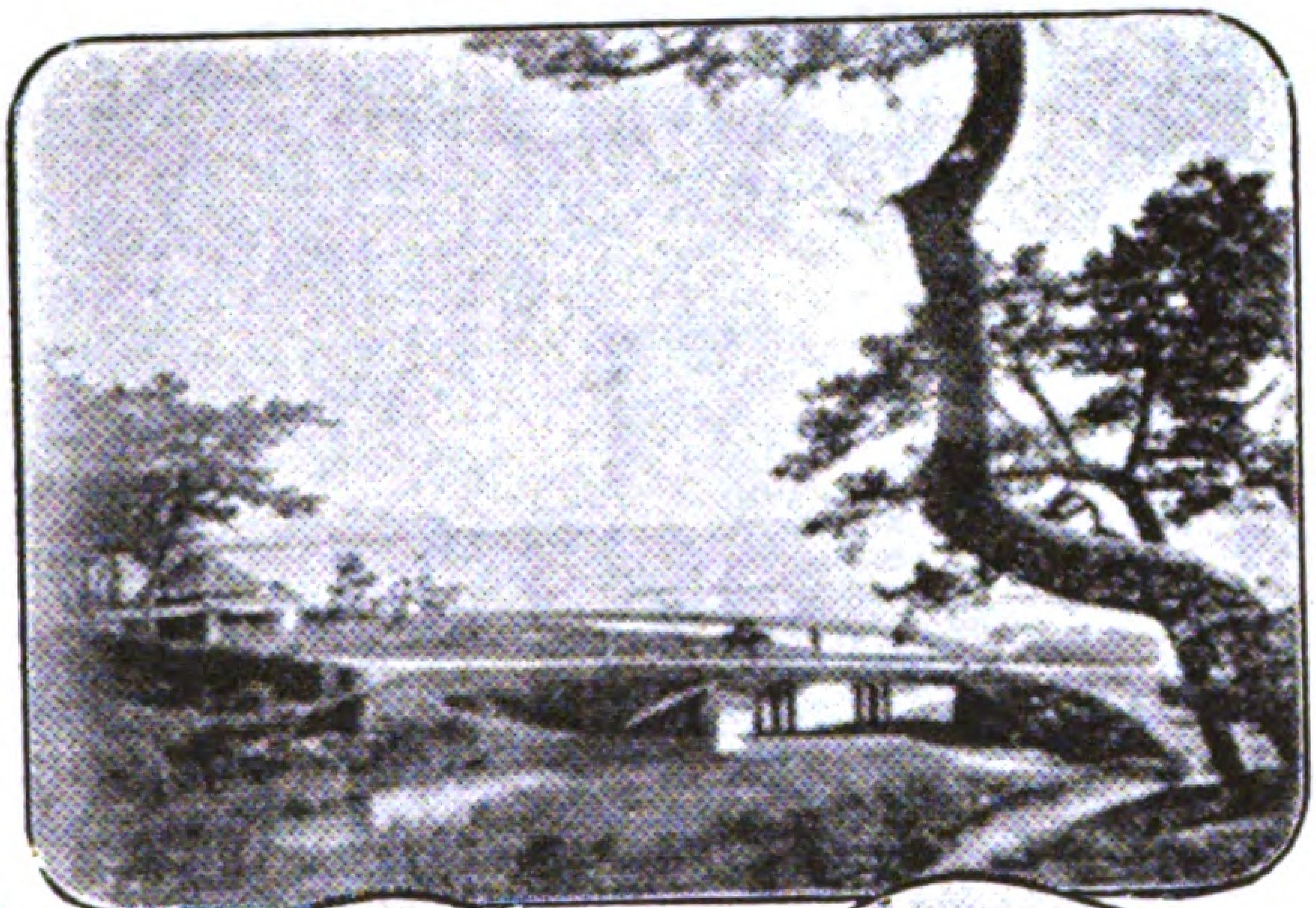
(吉田さく子寄)

(其　三)



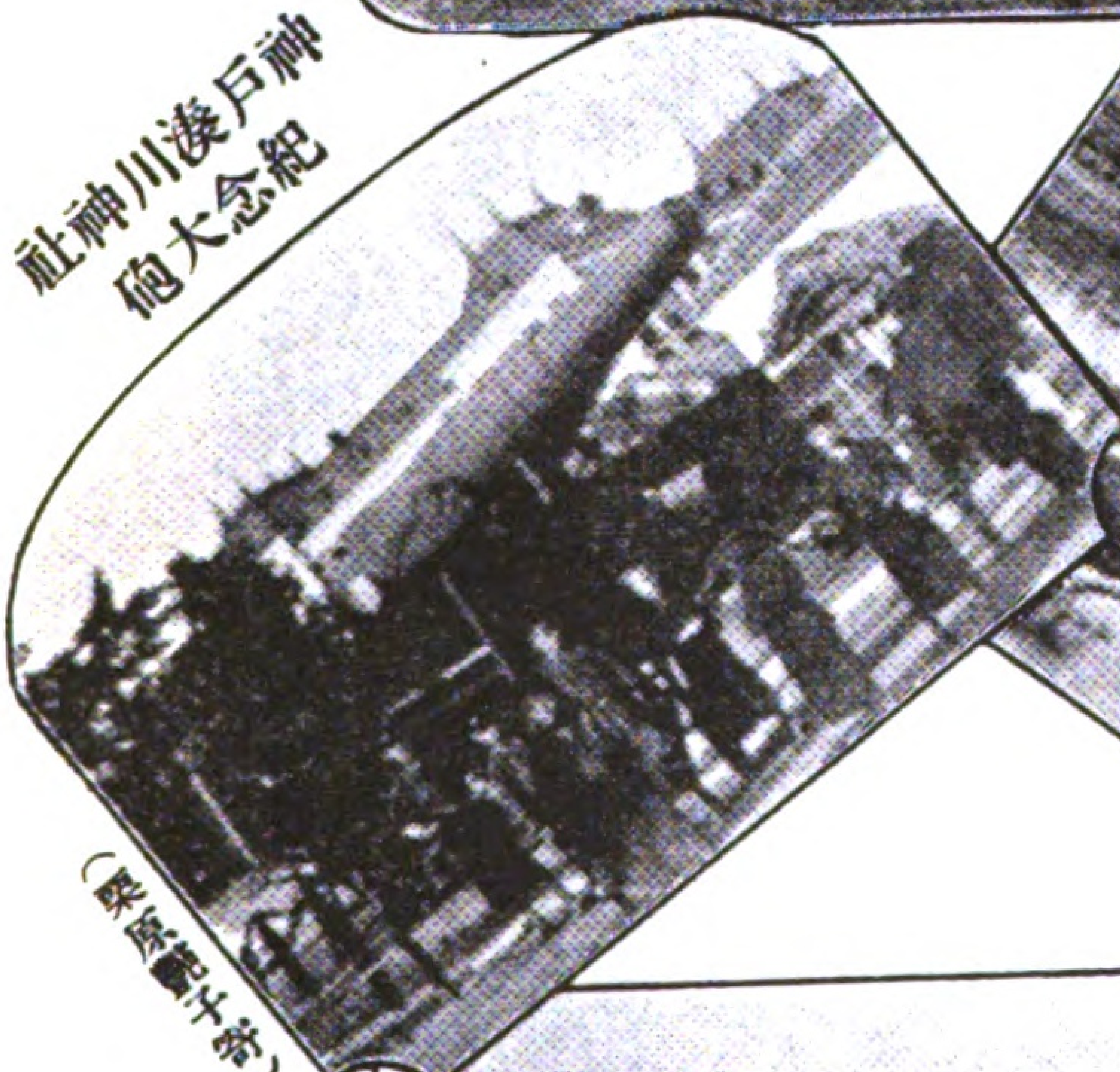
東京音樂院講習會紀念撮影

福岡縣名勝 天神橋



（山田改枝子寄）

神戸湊川神社紀念大砲



（栗原艶子寄）

熊本水前寺



（上野森子寄）



（小田千代子寄）

近江彦根城山より樂々園の眺望



# 女子文壇　立田姫　定期増刊

明治四十一年十一月十五日發行

## 十一月

稲の熟する頃となると、谷々の水田が黄んで來る、稲が刈り取られて、林の影が倒さに田面に映る頃となると、大根畑の盛で、大根がそろ〳〵抜かれて、彼方此處の水溜又は小さな流の潯で洗はれる樣になると、野は麥の新芽で青々となつて來る、或は麥畑の一端、野原のまゝで殘り、尾花野菊が風に吹かれて居る、萱原の一端が次第に高まつて、其はてが天際をかぎつて居て、そこへ爪先あがりに登つて見ると林の絕間を國境に連る秩父の諸嶺が黑く橫はつて居てあたかも地平線上を走つては又た地平線下に沒して居るやうにも見える。

獨歩

かくてまた漾らぎ翫る
日のひそみ、風のおとろへ
黄に默す公孫樹の、はたや
灰ばめる楊の落葉

有明

野もせの小草したれて
都はとりの白河女
花鋏いさびれを見るにつけて
み冬の女神白姫
わが世ひとりのすがれに
御門の柱にすゝり泣くや
高塔そよとかすれて
時雨ぞしのびに注ぎかゝる

泣菫

輕井澤高原は一望皆霜白、鶸茶色の西洋人の別墅のみ、枯芒の中に赤味を含みて何となく一味の暖氣を漂らす中に、痩せて小さき唐松の林は、黎檬黄に光り、高原の風に毛を擦り切らしたる萱の兀山の渦まく雲は、氷の如く固まり、雲と雲と相合ふや、氷と氷と相觸るゝ如く、鏗々然として鳴らむとすれど、さすがに昇る旭を包む能はず、離山の頂上先づ鯖色に青く光りぬ、木立がくれの古沼の銹にして見まほしの秘色や。

烏水

# 雨もり

服部貞子

「遂々降つて來やがつた！」

お繁はふつと目を開けた。襖を隔てた父の呟きが迫らず、重い聲であつたゞけに、靜寂の底深く沈んで行つて、それがやがて澱んだやう、家のうちは殊更に森閑となつた。種々な追懷の渦に巻かれて、いつとはなしに我を忘れかけて居たお繁の耳に、淋しい雨の音が屋根を打つて響いて來る。降るものとは今朝からの空模樣でも知れたが、庇に蔽さる柿の梢を吹いて、バラ〳〵と一際強く雨戸を叩く音を聞いて居ると、旅に出た夜のやうな、賴りない思が、靜かだ、寂しい、といふ情緒をそゝりたてる。目を据ゑて、雨の外の物音を聞かうとしたが、閉て合へた室の闇に吸ひ込まれるやうに、雨は增々強まる許り、無意識に兩手で確と抑へて居た乳の暖が軀に傳つて、どきり〳〵と胸の動悸の高いのが知れる。

未だ宵らしく、襖の隙間が、闇に細く光の線を劃いて居るが、爐傍の父は何を仕て居るのか、芋の莖の皮をむいて居た母の仕事も終へたのか、ことりとも、すうとも音がなく、氣味の惡るい程靜かなのにお繁の目は冴えて來た。身動げば括り枕のがさつくのも佗しい。

鎮守祭の時いつも招ばれて來る川下の伯父が、眞赤な顏をしてたわいもなくエヘ〳〵笑ひながら母に小言を言はれ〳〵くるまつて寢た、此家に一つの客薄團、それを母は出してくれたが、この夏も風に觸れなかつたか、長らく納戸の底に潜んで居た濕氣臭さは、動く度に鼻をついて、忘れてはつと引き披ぐ襟元が頰に冷たい。

お繁は一寸顏を顰めて仰向けになつて、足に力を入れて薄團を引くと、ひいやりとした氣が肩先に浸みるほうと、息を吹いて、目を据ゑて居るうちに、篠つくやうな雨の音は漸々頭腦に朧ろになつて來る。お繁は靜動として我と我がする鼻息を聞いて居た。

「つまらないな」

と軈て我知らず口の中に出る。たゞつひさう口に出たのだ。また横になつて枕をぐいと引き寄せて、そのつまらないと思ふやうなことを考へる。華やかな都の風物がパノラマのやうに頭の中にひらいて來た。一々そ

れを追つて見て行くうちに、都離れたお邸宅の四圍の寂靜が偲ばれてくる。松の多い庭園に洩れる奥の笑ひ聲が耳の底に響いて來た。氣の揉めるやうな胸を抱いて、お繁はまた寢返つた。

乘り出してからは、道に故郷懷かしさの念に充されて居たが、空合が怪しければ荷物も多し、只一輛殘つた車を雇つて二里を歸つて見ると、嘘言とは充分に悟りながらも、猪氣に掛らぬてもなかつた父が、けろりと爐邊に煙管を叩いて居たのが腹立たしかつた。奉公もいゝ位にして歸れ、の次は父が病氣今まで知らせずに置いたが餘り好い方でもないとの書簡、奥ではそれを眞實にして兎も角も歸國つて見よとお暇が出る。嘘だ、口實だとは思ひながら、歸つて見たくないこともなく、歸ることは歸つた今日、故郷はどこか懷かしいけれども、また東京は戀しい。

「郷！、汝あお午つから栗拾ひに行つて來うや、晩に栗飯焚くからな」

と母は、珍らしい姉の容子をじろ〳〵見て居る郷一に三杯目を盛つてやりながら言ひつけると、

「ん」

と茶椀を搔つ手繰つてかつ〳〵搔き込んで居る。

「東京ではねおつ母さん、栗はあるけれどもそれは高價いんですよ、一升三十錢も四十錢もするんだもの馬鹿々々しいつたらありませんよ、その代り綺麗だけれど、一粒選りて」

とお繁は箸のまゝ鬢の後れ毛を搔きあげる。

「ふーむ、なんてもさうなんだつぺてな、」

と母が感心する傍から、

「今年は駄目だ！」

と父がぽつりとした語をはさむ。

「外づれ年は甘味も薄いて、此二三年ははづれてばかり居るものな、追々樹も少くなんだつぺて」

と箸を置くと、

「私が若い頃なんぞ、朝早くさへ行けばかますに一つ位造作もなく拾ひたものだつけ」

と母は昔を語る。

「毎晩だつけねえー」

と栗の團欒の夜を思ひ出してお繁も、ふと爐を見ると、竹自在に眞黒く煤けて居る大鐵瓶の尻高く、燃えさしの木の根が、細い白い煙りをたてゝ燻つて居る。その圍に、眞つ黒に干乾びた茸が、串に刺されて植ゑ並べられてあるのを見ると、肩曲りの二升焚き鍋が沸

くゝと煮えたつて、時々其白い泡が流れてはちぶーんと火が消えてしまふ。それを涙の目をこすりながらふう〳〵吹いて、其火影で讀本の復習もした、昔の自分のそゝけ髪が懐かしく床しく思はれて來る。默り込んで箸を置くと、

「それつきりか、東京さ行つて少食になつたとな」

と傍から母が笑つて言つたが、

「あ、郷一！序てにな、時兄ちや家さ寄つて東京の姉ちや今日歸つたぞいつてさう言つてげや――」

と、藁草履をつつかけて、すた〳〵裏口からはけごをさげて出て行く郷一に大聲をかける。

時、といふ語にふと胸を打たれて、お繁は瞥と母の顏を見た時、

「おや時さ――」

と筒抜けた聲を出されたので、吃驚して振り向くとそこには山仕度の時三が、それも不意を打たれた形でつつたつて居る。

「今、何、郷にさう言つてげつて言つてやつたところだつた、お繁が今少時前歸つたでない――まあ上らつせ、時さ」

母は大きな聲を出して莞爾ついて居る。

「時さんどうも久濶、あの伯母さんはどうして？」

お膳を片づけるとて袂を帯留にはさんだまゝ、もの馴れた口調でお辭義をすると、

「はゝ何に――」

と時三は氣の毒な程眞つ赤になつて、正直らしく疊に手をついた。

「あんまり快い方でも無えてな――困つたものよ」

と父が重い口で代ると、

「年中だアから――」

と瞥とお繁を見やつて瞥と目を外らす。

お繁はふと、矜らしい胸を張つて、立ち上りざま

「困るわねえ――こちらは滅切寒いのね」

と就かぬことを言ひ乍ら、

「まあ上つたらいゝでせう」

と弟を待遇ふやうな氣持ちになつて言つた。

その心持ちがある。二三年前から見えて居た、時三を婿にといふ親達の心と、今度こそはあり〳〵と讀み得たが、それを思ひ出すと、情ないやうな、笑つてやりたいやうな、擽つたいやうな感じがする。

「ほんにちつともすれない、堅い奴だて――感心に」

と、逃げるやうに歸つて行く時三の後見送つて、お繁

を振り向いて莞爾した、先刻母親の顔がふと泛んで來た。馬鹿々々しい、と腹立たしげにそれを拂ひ退けようとしたが、ふと自分に丸髷を結はせて時三を假に家の人にして見る。袖のある着物を着たところが、いかにも田舍じみて、手片きがひよろながくつて、黒くつて、そして顔はどこまても子供じみて居る

「誰れが！」

と口に出して言つてお繁は布團を冠つた。とまた凝乎として、丸髷に手拭を冠つて、赤い襷をかけて、裾を端折つてと出來るだけ自分の姿を美しく想像いて見ようとした。するうちに、稻刈りやら、豆擲ちやら、秋繼ひの忙しい有様が、まざ〳〵と目にうかんで



來る。母が笑つて居る。大きな聲を出して呶鳴つて居る。かと思ふと、郷一が青い洟汁をすゝりながら、じろ〳〵と土産品の風呂敷包を解く、自分の手許を視て居る、赤い顔をして、逡巡して居る時三が居る。夕方井戸端で初めて見た、隣家の豆腐屋の嫁が、反齒の、大きな顔をふいと出す。お繁は寐苦しさに幾度か枕をかへした。

種々な物象が四邊に朦々して居るうちに、ふと襖越しの話し聲が耳に入つて來た。首を擡げて、聞耳をたてゝ居ると、今度は何處ともなく、バタリ〳〵と淋しい響が耳に入る。

「座敷だつぺいか――？」

と襖の外では耳をすます氣勢ひ、響きは一定の間を置いて、憚かるやうに淋しさを呟いて居る。

「座敷だ〳〵」

唐紙は間もなくさつと開かれた。眞暗をわけた洋燈の光りがつと目を射ると、お繁は何の故ともなく、枕をつけて熟睡を粧つた。

「はアてな」

「何處だ――――?」

すうと光りが顔を撫てゝ走つたので、細目に瞼をあけて見ると、眞黒い大きな父の姿がまづ目に入る。裏板のない勝手が開けられたので、雨の音は稍々近く強く流れ込んで來る。

「此處だ〳〵」

大きな影法師は徐ろに動いて、狩獵仕度の掛つて居る隅の方に踞つた。

「大屋根から廻つて來るだな――ほうれあんなに浸み出した」

持ちあげられた三分心の洋燈は、動かされる度にほつ〳〵と油煙をあげて居る。長押の上の漆喰に畫かれた線を見上げて居る二人の姿を、お繁はまたなく淋しく眺めやつた。

「なんにも濡れたものあ無えか」

「――無えやうだね」

そこらに置いたぬぎ捨てを、母はどさりと蒲團の裾の方にあげて行つた。

「其處だけだつぺな、外にやあるまい」

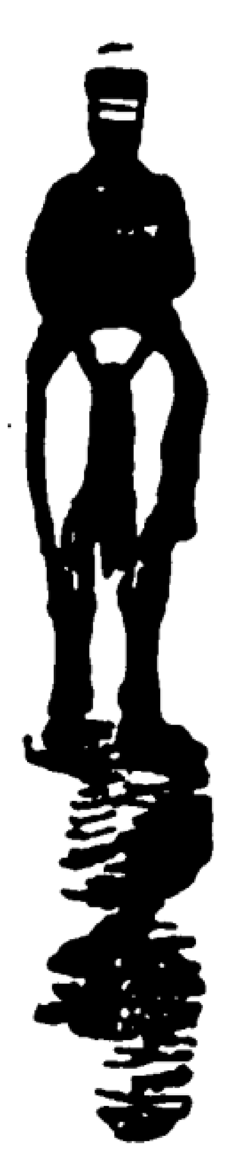
入口に立つて、父は猶四邊を見廻して居る。母は默つて傍に寢て居る鄕一に枕を宛てがつて出て行つた。

「豪い雨だ!」

闇はまた迫つて、其聲は籠つて聞えた。

置いた金盥を打つ雫は、先よりも一層哀れな音をたてる。その響が耳についてならぬ。淋しい、寂しい、と思ふと遁らなく東京が戀しい。たゞ東京が戀しい。お繁は幾度か寢返つて長い息を吐いた。

いつまでも〳〵奉公して居て、行末はどうするといふ考へはないけれども、このまゝ田舍に埋れてしまふのが惜しまれてならない。歸らう、歸らう、厭な緣談の起らぬうちに、明日にも東京に歸つてしまはふ。と思ふといくらか胸が落ち着いて、お繁は間もなく夢路に入つた。





# 美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は原稿紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

## 天　○影

名古屋　八重子

何處かで白菊の歌が聞えると、私の魂もフワ〱と其方に飛び去つて私の身體に居なくなつてしまつた。人は歌うて居るのだ、私は、私の默想を避けやうと、いくらあせつても矢張り駄目てした。仕方がないから默つと目を瞑つて何も思はず、何事かの起るのを待つて居ますと、いつか目はパッチリと明いて襖に寫つて居る私の影を見て居るのてす。

束髪の前髪の毛が亂れた儘、机に頬杖ついた姿がクッキリと濃く襖に畫かれてありました。斜に光線が來て頬が——頬が大變細いぢやありませんか。驚いて襖の方を向くと、唯隋圓形の者が現はれました。少しづゝ首を廻轉すると、横顔が寫ります。けれども——細い。腹が立つてこうてはなかつたがと思つてランプを明くしたり暗くしたり、身體をゆがめたりしても矢張り駄目てした、頬がこけた——と云ふと直ぐ野分に荒まれた枯野を連想するけれど、私は今其境遇に在るのでせう。

昔——少さい時てした母様の御膝に凭れて、お稚兒髷の目玉の様な影を珍らしさうに色々にして見て居た時そんなに首を振ると頬が落ちるよ、と云はれた其頬は到々落ちたのてせうか。

憔悴した影!! 思はず溜息洩らしました。未だ其年てもないのに——、噫!! 夜が更けたのでせう、冷い〱夜氣が流れて來て、痛める胸に犇々と感じるのです。

（評）中心をきびしく捉えて居るから、文に動かすことの出來ない強みがある頬の痩せたことに感じて、強く胸を刺戟すると云ふことも、女にありさうな情て、此等が所謂女子の隨筆文學として上乘なるものでせう

## 地　○不具の身

攝津　春乃子

熱がひいて、われに返つて、始めて私は！、と片腕切斷された不具となつたのを知つた時は、流石に悲しかつた、もう私は學校へもゆけない、人なかへも出られない、好きな手藝も習へない、と頓に絶頂から深い〱くらい冥府へ蹴落された心地がして、もう此儘につまらなく朽ち果てて終ふのかと口惜しさの吐息をついた見せまいとすれど、熱いあつい涙は頬に溢れて、幾度

か雪白の枕覆ひを汚した、あゝ私は何たる不孝の子であらう、かゝる大疾をやんで賜はつた肉體をそこねたさへあるに、なほ其上に父母のみ胸を痛めまゐらせてゐるのである、父母は朝夕枕邊に座つて樣々に私を慰め勵ましてくれた、私が癒ゆる迄は旅行もせぬ娯樂にも耽らぬと迄云はれた、私はつく〴〵と兩親の愛を感ずると共に、又古來不具て名を擧げた人も少くないと思ひ返して、自ら進んで服藥もし、手術もうけた、てさしもの難病も次第に々々に薄紙をへぐように快方に赴いて、三月めの末には遂に全く起つた、其時の父母の顏、わが胸、久し振りで髪を結つて糸織の着物に緋繻子の帶を占めた姿はよろこびに包まれて居たが、音樂も裁縫も割烹も私は其以後全く放棄したのである、否それ處か着物をかへるのも入浴するのも、甚しきは食事迄、時とすると人手を煩はすやうになつたのである、今私は病後一ヶ年間烈しく心身を勞する事をかたく醫師からとめられて、日々なす事もなくぶら〴〵して居る、頭の爽やかな時には聖書を手にして、氣分の勝れぬ時には草花などいぢつて暮して居る、父母をのぞいては慰めてくれるものはこればかり、淋しともさびしい、が私はもう涙は一滴も出さぬ、まつたく自分の運命とさとつて諦めたから、たゞ自分が果して將來、名をなす事ができるかどうかと思ふと甚だ心細い。

事實か何うかは選者の知る處ではないが、是を讀むと全く事實のやうな心持がする、氣の毒になつてくる(評)

## 【人】○祭の夜　本所　秋山欣子

我町の屋臺は今、一町先の小屋へ入らうとして、名殘の一時を華やかに囃し立てる、

私は、其、身に泌む樣に、細く澄み切つた笛の音を聞くと一種何ともいへぬ哀愁を覺えて、ソロリと表へ出た、軒先に立てた提灯棒へ脊を押しあてゝ、凝と默りこんでしまふ、

もうお向の呉服屋さんの人寄せの蓄音機にも二三人聞手がある計り、飾物の前には、横に渡した太い青竹が滅茶〴〵につぶれて、甞の雜沓を忍ばせて居る、

初秋の夜である、居待月は仄白く烟つて、水銀を溶かした樣な光の糸にくるまつて、物皆は微かに吐息でもついて居るかの樣、

すら〴〵と薄冷こい風がお白粉の襟を渡つて、一しきり太鼓の音が冴えかへる、囃が變つたのだ、三味線の細く美しい音も交じる、群集はドッとどよめいて「やあたちまーすー」なんて頓きんな叫も聞える、私は遙に片唾を吞んだ、

木の頭をキッカケに鳴物が一つ幽しう鳴ると、皷かついだ優麗しい姫が二人並んで、物靜かに舞ひ初める、どうも道成寺のやうだ、昔摸樣の振袖の友禪でもあらう、花ふいた軒の鬼灯提灯に映つてチラ〴〵と搖れか

ゝるのが遠目ながらまばゆい、白い顔、黒い髪、重さうな花かんざし!! 私は只もう恍惚となつて仕舞つた「鏡ちやん、夜露がさわるよ、」と母様のお聲に氣がつけば、雨の顆は何かしらしつとりと濕つて居た、

「母様、も少し、せめてあれがお仕舞になるまで見さしといて下さいな、ね、」と現なの様で訊く、「え、屋臺みてるの、」と母様も出て被入る。私はいつか姉様——去年のお祭後に失せた——の事を思つて居た、姉様もお踊が好き、私も好きなので、去年のお祭にはお師匠様のすゝめて、矢張あの舞臺で乗合をやつたつけあの夜はどんなに樂しかつたらう。今年は一人ぼつちの私もこんな病氣で苦んてるのだもの—ドン〳〵〳〵と打出しの太鼓の音が、思ひなしかいやに哀れつぽく響いて、人は右往左往に別れる、軒並にかけ並べた祭禮提灯も消えたのが数をまして、瓦屋根にはもう、夜露が白々と光つて見える、

「鏡ちやんお前も道成寺が十八番だつたねえ、」と母様が淋しさうに被仰る、私は向を見凝めたまんま、「もうこれでお祭もおしまいなんてせうかねえ、母様、來年は私、見られるでせうか、え？」いふなり、不思母様のお肩にすがつて、お背に顔を埋めて、忍びやかに聲を立てた。

華やかな中の淋しみと云ふことは興味のある題材だが今一息力を入れてほしい（評）



天賞　スケッチ　牛込　佐野良子

秀逸

## ○初秋のひと日

小野つかさ

今日はまあ不思議、相談した様に三人からお便りがあつた、それに、一番仲のよい、其のくせ日頃は一番お互に御不沙汰ばかりして居る瀧子様迄が下すつたんだもの、私はもう何だか無暗に嬉しくつて、さつきも蝶ちやんに『姉さんは今日はにこ〳〵して大變嬉しさうね、何？』てきかれて烏渡困つたけれど——緣のてすりに頬杖ついて、柿の葉をからかふ風の秋の聲をきゝ乍らふと、三人の御様子を眼の前へ浮べて見た、すると思はずも、

唇元が綻びて、眼元へしわがよるんだもの。弟の書齋の窓からハモニカの聲が面白く流れて來る、「夕空晴れて秋風吹き――」と小聲に合せて見た何となくあたりが寂しくなる樣な氣がする、突然、池の緋鯉がバシャンとはね上た。

今度は一緒に紫の包みをかゝへて、小學校に通た時分の心持になつて、私の目は、下げ髮のみたりの幻を、るり色に澄み渡た空に、消えてゆくのを何處迄もと追つて行つた。三人とも皆私よりは三つ四つの姉樣て、今桃われなのは私ばかり、しかも島子樣と龜子樣はもうお母樣なのだから妙だわ、瀧子樣の丸髷は二度拜見したばかしだけれど、ほんとに懷かしいお姿だつた。瀧子樣と語る時には、いつも夏の木影のベンチによつて、強い風に頰を吹かせながら居る樣に、心がすつきりして何となく嬉しい、島子樣は秋だな、どこかさつぱりと、厭味がなくて逢ふ度にいつも肅殺の氣肌にしむとても云ふ樣な感に打たれる、然し心は實にすがすがしい、龜子樣と居る時には、やんわりと暖かい春の心地、だけども其の中に何となく、朧月夜にぬかるみをゆくとても言つた樣な、はつきりしない、はがゆい心地を免がれない、丁度、夏目さんの『虞美人草』の小野さんとでも言つたらよからうか……から想像は想像を生んで、それからそれへと思ひつゞけた、はては、今日の御手紙の皆それ〴〵に、御性質の露はれて居る奥樣ぶりなのを思ふと、おかしくなつて、ついホ……とふき出して了つた。

弟は今『旅泊』を吹いて居る、空は高い、澄み渡つた秋の沈んで、靜かな蒼穹を仰いて、私は心から友の身安かれと祈つたのである。

才氣溢る、三人の品定も新式で取る人が出て居る（評）

## ○或夕

下野　白萩女

もうそこ此處の虫は愛らしい音を立てゝほろ〳〵と泣き初めた、何處の家からも夕げの煙が幾條となく上つて淡黑色の空へ消えて行くと、烏が五六羽低うなきながら己がねぐらに歸つて行く、ごく靜かな夕てした。私しは何心なく暮れ行く淋しげな庭の景色を眺めてゐると日毎にやつれ行く朝顏や色あせた夏菊の姿が目について、うらぶれの我身にくらべて、しみじみとあわれをおぼえました、露のひぬ間の短い命のあはれな朝顏明日はいくつ開くだらうと、一つ一つ葉を裏返して見てゐると、ふと酒の香がしてきました、驚いて顏を上げるといつの間にきたかお隣りの先生がお酒を召してか、目ぶちをほんのり染めて何か思はし氣にあらぬ方をぢつと見つめてゐるのてした、

先生は高等小學の校長てす、長々ぶら〳〵してゐた姐さんの病氣が惡くなつたので、三人の女の子を先生に預け、をばさんと下女まで連れて今入院してゐるので

す「先生姐さんの御病氣は如何ですの、少しは宜しい方にむきましたか」と云つてお顏をのぞきました、私しは先生のお内儀さんや、母さんを姐さんおばさんと呼んでゐるのです。

「エヽ彼ですか、イヤもうなほつたのですハヽヽヽと、わざとらしい笑ひをもらした、まあ何と云ふ人を冷遇した言葉だらう私しは何とはなしに涙ぐみました、おば樣まで附切つてゐる大病人をなほつたと云ふ、日頃の眞面目な方に似合はぬ返辭、先生は私を輕蔑してゐらつしやる、それ程私しの言葉はそらぐしいのであらうかと思ふと、淺ましくも口惜しくて、此上聞く勇氣がない、口をつぐんでしまいました、がふと胸に浮ぶ、先生がいつぞや父に向つて「姑や妻の我儘には愛想がつきてしまつた、此度歸つたら離緣して、私しは家へ歸つてしまふ」と、云つたさうな然し四人も子供のある中でいかに妻母の仕打が惡いとて、其樣な事はよもやあるまい、まして子煩惱の先生だものと思つてゐたが、心に無い事を云ふ樣な人ではない果してそれが事實であつたら……先生は今まさに來らんとする悲慘の有樣を思ふて、憂をかくさん爲の笑ひてあらうかと、暮れ行く空をぢつと眺めてゐるお顏を見て其心をよもうとしました、あゝ其こけた頰、ほろ醉の異樣に光る目にまだ靑い桐の葉が映つて何となう物凄く覺えるのでしか。

情味が深い（評）

## ○野邊送り

三重縣 荒木千代子

もう黃昏の闇が迫つて、今にも降り出しさうなドンヨリとした空、昨夜亡くなられた叔父の亡骸は、白い布て掩ふた柩に入れられて、ギシぐ淋しい音を立てゝ今三昧の入口の細い坂道を上つてゆく、今は夏蠶の忙しい最中と云ふので、ほんの形許りの假埋葬、天童寺の若い和尙さんが先に立つて親類や極懇意の人が十五六人其後から從ふてゆく、私は從妹の正枝さんと並んて步いた、正枝さんはまだ十六、此春學校を出た許り平常お母さんよりもお父さんを便りにしてゐただけに私は餘計に氣の毒に思ふた、幾夜も夜を徹しての看護の疲勞と新らしい悲しみに胸を痛めて、蒼ざめた顏に眼瞼を泣きはらして悄々と白い衣物を着て首垂れてゐる姿を見ては私は堪らない程悲しくなる、墓地は小さい丘の頂き、ヒヨロ高い松が五六本立つて、四囲は皆一面の草ばかりてである、もう日はトップリと暮れて鮮やかな松明の火と幾つかの提灯の灯が四邊を照らしてゐる、とある松の根方に柩は下ろされた、靜かに和尙の讀經が始まる、燒香の煙がゆらぐと夢の樣に立ち昇る、正枝さんは兄さんも姉さんも燒香を濟ませたのに呆然と立つてゐる「正枝さんお燒香を」と私が云

ふと「え」と吃驚した樣に云つて柩に近づいて、昵つと見詰めて其儘前に、くづをれて了つた、微かに忍び泣きの聲が聞える、私は顏を袖に掩ふた、柩は葬らる可く再び持ち上げられた、さうして深く掘つた美しい赤土の底に永久安らかに眠るべく下ろされた、續いて土を埋める音がする、松明は大方燃え盡くした、暗い草原の中からスイッチョが鳴き出した「あー もうこんなに薄の穂が出ましたのね」と正枝さんは淋しげに云つたが、またうなだれて了つた、雨がシト〱降り出して、虫の音が一しきり高くなつた。

餘り樂に書きすぎて、却つて眞情が乏しい(評)

## ○鬼灯畑　　信濃　太田きし子

これごらん、一イ二ウ三イ四ーこんな小さなのにまでこの木にや七ッもついて居るのね、あれあんなに色が付いて、これでもうぢきに甘くなるんでせう、姉さん鬼灯は皮が紅くても中が虫に喰はれて、おからすッぽのがあるね、それで紅くても當にならない、けれど嬉しいなこんなに澤山あるだもの——姉さんにも上げるんね、大勢に約束もしてあるし——と目を光らせてまた熱心な、葎の廣葉の影、露草の藍色の花配合りよく雜ざつて居る一面の小畑を吾が領として滿足のありさまが見える、妾はたゞエ、エ、と返事だけ仕て居た。もの足らぬらしい顏が妾の目に映つた時はもう笑つて居た、キラ〱と蜘蛛の巣がいく筋か上の葡萄棚に光つて居る、つぶらな青い葡萄は——さぞ酢からう——と思ふと口には水が堪つた。

姉さん、ハイ何ね、あゝ奇麗だなア何と云はう、たゞ思つた、

姉さん、ハーイ、このほゝづきいつ紅くなるんでせうネ、今五六日もたゝばいゝでせう、あゝ何とか云ひたいな、美しいな、たゞ思つた

日は合歡木の葉もれて池の水にはうろこ形の波紋がゆるやかに光つて居る、おはぐろとんぼが目の先の杙に止まつた、何のわけか青光りのする黒い羽をつぼめたり開いたりつぼめたりひらいたりして居る、

ピッピッ、小さな音にふと見ると、妹はもう堪えきれなくなつて、そつとまだ黄味色の皮をさばいて見て居る、あゝ妾もあゝいふことをしたことがあつた、艶の好い頭を一寸見せておかつぱの髮は襟にたゝまつて居る。

もう少し叙寫の筆が伸びたらと思ふ少し獨斷的の筆法がある(評)

## ○女魚賣　　駿河　泉とし子

今日は——今日は奥さん、鰯の乾物に鯵の強いとこですが、いかゞさんて——。と何時も極り文句で朝と夕方と二回、必ず來る女の魚賣がある。もう四十を二つ三つ越した女で、顏が赤く爛れたしよぼ〱し

た眼、口は小さく顴骨は高く、楯目の見えない髮は何時も無造作に茶澁て染めた樣な手拭て包まれ、處々継ぎの當つた着物を、腰の邊まで捲り上げて、大概跣足か、てなければ、尻切れの草履をはいて居る。そして背中には乾度四つ位の穢い男の子を背負つてゐる。其の子が又八釜しい子で、何時も騒し〳〵來る。それて息のつまりさうな哀れな聲て、まづ始めに、今日は——と低い耳を澄まさないと聞えない聲て云つて改めて稍高く、今日は奥さん——と續ける、何時も決つてゐる。て此の女が持つて來る物も大抵極つて居て、鮭の盛に捕れる時ても、まづ鮭に乾物、鯵、鯛、鯉の樣な小魚類てある。



佳賞　晩餐　　水戸市　北川うめ子

兄は此魚屋が大嫌ひて、その、今日は——といふ哀れな聲を聞くと、耐らなく氣がくしや〳〵して無暗に反抗したくなるといふ。而して氣持も悪いから買ふなと何時も云ふ。私も好きては無い。私の事迄も奥さんと呼ぶ可厭な魚屋だと思ふ。けれど兄と反對に、其哀れな聲を聞くと、買つてやらずには居られなくなる。碌な魚は無く氣味の悪い人のだけれど、來る度大概買つてやつて、後て兄に叱られる。だから隣家へは寄らなくても、私の家へは必ず寄る。稀に斷ると、あ左様てと素直に出て行く、私は何時も其の後姿を見送つて哀れな思に胸を打たれる。

あゝ、外に稼ぎ手は無いのてあらうか？　あんな年

をして、あんな風をして、一日に二人が食べるだけも儲けられまいに！あゝ、あんなに泣しても生きて居たいのであらうか？して見ると——生——といふ物の力は偉大なものだ！私等はうか／＼して居るが、若しあんな風に爲つたら、矢張りあんな事をして生きて居なきやならないのかしら？と思ひ到る時、何時もついほろりと爲る。

稱賛の寫生は能く出て居る（評）

## ○土用よもぎ

中津町　やま川

今日から土用である、盛暑とは言へ東風は絶えず凉を送つて、早我庭には萩の花が一つ二つ咲き初めた、北向の窓に倚つて秋めいた庭の面を眺めてをると、隣の小母樣が澤山蓬を摘んで歸るので、夫は何にするのと問へば、土用の丑の日に摘んだ蓬を陰干にして下痢をした時に煎じて飲むと奇妙に治る相な、よし夫では自分も採つて來ようと、思ひつくとじつとして居れぬ性分、直に日傘かたにして野へと出たのである蓬を摘むべく。

行義よく植られた田の畔を幾まがりして金谷の堤に出た、玆が採集の目的地である。流石は盛暑日光は赫々と強いが、風は家の中に居るよりもあつて稻葉をさや／＼となびかす前は中學校の裏、後は山國川、日光の工合て流れの上と下と色が變つてゐる。豐筑の連山は遠く脈をなして雲の峰は雷を封じて聳へてをる。垂水村の方へと行く馬子の笠は次第に遠ざかる。自分は夏草まじりの蓬を摘み初めたが、老いてをるので莖はかたく、葉は小さく、彌生の空に紅の袂翻へして少女に摘まれし時のやうな香は少しもない。摘んでは風呂敷に入れ、入れては摘むのであるが外に語るべき友もなゐので、自分は歷史地理を考へたのである。元此堤はなく、水は中學の裏から萱津寺町の下から勵瀨の方に流れてゐたのを、秋の城主細川公が玆に堤を築いて廣津の樣に水路をつけかへたとか、金鞍銀馬數多の卒を叱咤した時、金の采配が旭に輝いた夫から金谷の堤と名けたとか、其時人柱に立つたのが八人の人夫、今八所神社として祠られてあるが、玆を越して垂水村へと行く旅人はそんな故事は知るまい。昔の名殘は只一本の椋の大樹、欝蒼と青葉を廣げて其幹をめぐる朝の日、其枝にかゝる夕月、川や流れや今につきねど淵瀨と變るに早き世の中、細川氏逝きてより玆に四百餘年、廣津あたりに咽ぶ水の聲は榮枯盛衰、今に詩人の袂を沾すてはないか。と自分は深き瞑想の中にも手は別々の働きをなしてゐて風呂敷は一ぱい身は鈴木の下の小川の畔に來てゐたのである。こんなに澤山持つて歸つたら家の人が驚くだらうと思ひ／＼柳に腰ををろして川に足をつけた、熱い身體は其心地よさ冷たさ、幾層々の皺をたゝんで流れ來る水は花藻を浮

かべてをるので、足に絡ましてはとり絡してはとる、自分の足も透きとほるように美しい。

約二年間、没書つゞけにしたが、選者と根比べをした君は、遂に勝つた、此呼吸で進みたまへ、今までのわるい處はよほど除かれた（評）

## ○魚取り

後志　伊勢いつ子

臺所の用事を皆すまして、これから新聞を讀まうと思つて居りますと、弟が來て魚取りに行うといふので、弟はかごを持つ、私は網を持つて二人で出掛ましたが、馴れてゐる道とてまもなく、目指す處につきました。こゝは私等が度々來る處です、前方を見ますとはてしもないりんご畑には、多くの男女ほふかむり樣々、聲をそろへて歌を唱ひながら、紅い林檎が枝もさけんばかりになつてゐるのを、一生懸命にもいで居ります、後方は廣々たる野原に、秋の七草が今をさかりと、野原一面に咲きみだれて居ります、あまりの美くしさに、しばしうつとりして居りましたが、此景をながめ、涼風に吹れながら七草を取つて居りました、やがて網をかけて見ましたが、鮒の小さいのが、二疋に、エビが、五疋何日もの半分も入りません、このようにして一時間斗りたちましたら、かごの三分の一位になりました時、どうしたはづみか弟が、川のそばにあつたかごにつまづいて、折角の苦心も水の泡ときえてしまひましたが、又しばらくかけてから、先の七草を妹のお土産と持つてかへりかごからあけて見ますと鮒が七疋にエビが、三十七疋

景色もよし、文章もよし（評）



耕作　（深山鷺子寄）

## ○祈禱會

王子　山脇　數子

『…死は何故恐ろしいのでせう…一體恐れとは何です、君子は聞かざる處を恐懼す、恐怖とは畢竟不明といふとです、分らないから恐ろしい。若し吾々に確固たる信仰があつて、自分は斯くなり往くべきものであると知れてゐたらんには、世の中に一も恐ろしいといふことのあるべき筈がないのであります…』。

戀とにはあらねど山下樣は妾が最も敬愛する好青年平素溫厚なる故にや、今宵壇上に立ちての談話は何となう人を引きつけて、言々句々、愼重、熱心、堂內幾

多の兄弟姉妹は荒き息をもせて熱心に聞いてゐた。

軈がてそれが終ると讃美歌を唱ふて各自の祈禱に入る。常に人に先立ちて祈る二三の兄弟もいつになう聲が振へてゐた。後ろの方で聞きなれぬ聲が……アラ阪東さんだ、泣いてゐらつしやるのだ……ア丶既う自分の胸は一ぱいになつてお祈りの聲も出なくなつた。

今迄永い間耻かしとにや、只の一度もお祈りをしなかつた阪東さん、あの情に激して強く微かに途切れる言葉は解らねど、今宵こそ心からお感じなすつたのであらう……『神さま、どうかこの淸き乙女が祈りを聞こし給ひて幸多き御國へ導きたまへ』と心の內に神を祈つた。

今晩は實に生命あるよき集りで御座いましたと牧師の君の言葉に續いて、閉會の讃美歌も平日になう樂しく耳に響き、華やかな瓦斯の光りに送られて思ひ〳〵の家路をたどつたのは午後の九時。

家へ歸つてからも臥床の中で幾度となく今宵の有様を回想しながら、嬉しい日であつたと思ひつ丶夢に入る。

### ○磯けしき

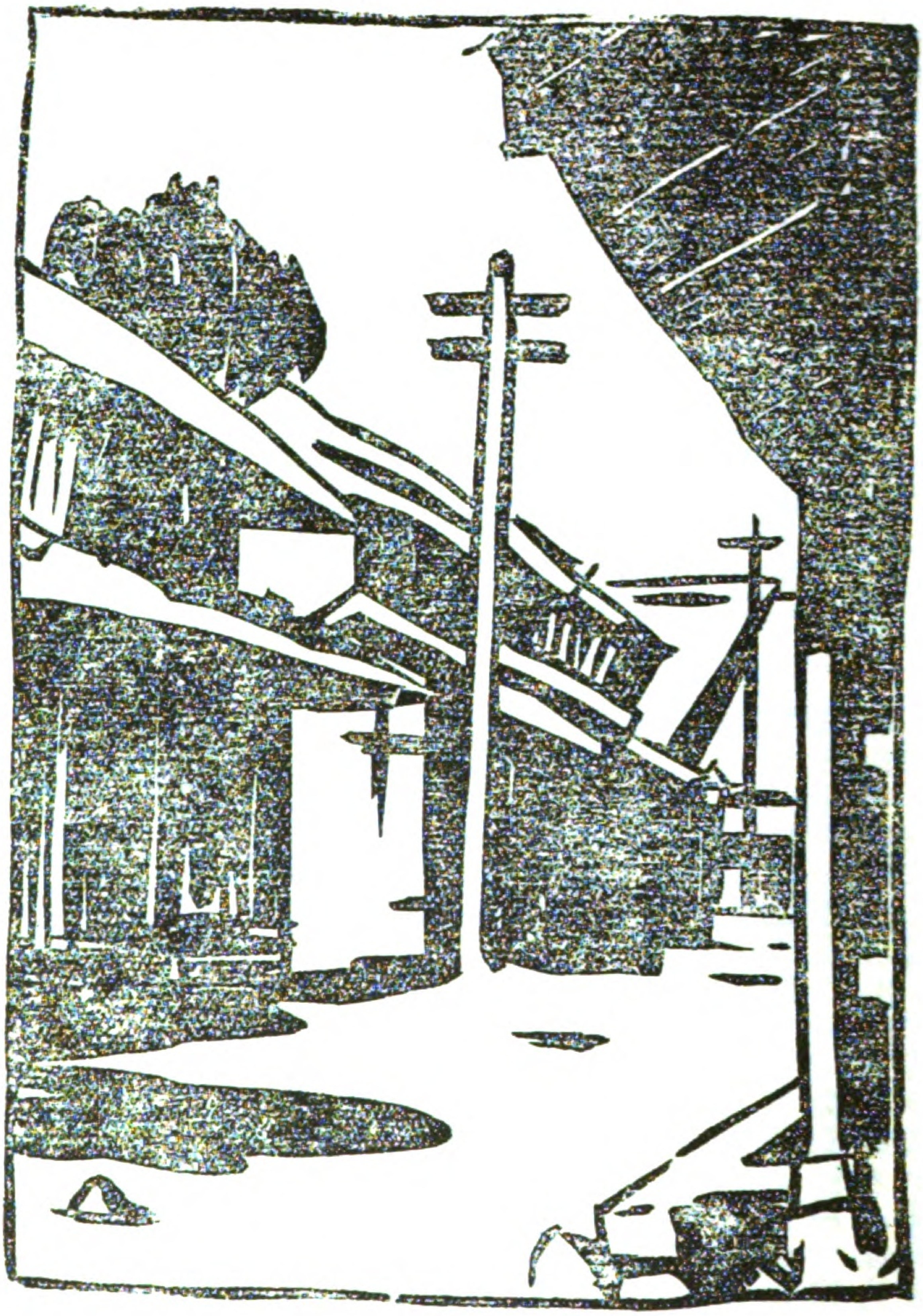
布哇　上土井定子

立ち騷ぐ沖の荒波を關止めて横へ流れし島の圍ひに瑠璃色の延びては縮む水面にまひるに近き日光のさん爛と輝きゆらぐ美しさに浴てもみたし磯邊に寄する小波はさら〳〵と岩礁を撫でる興に乘じてや奇しき岩根を這ひ出てしカナカ蟹の我足音に驚きてかあわて丶苔の凹に隱れぬ妾等は日曜の隙に友と手をひいてこの面白き磯邊を傳ひて鬱を散ぜんと曳汐の織出せし白砂の縞を踏んで思ふがま丶に歩を進むれば奇なる石珍なる貝の妾等を迎へてゐるかの如に覺ゆ細き衣の片袖をかたみにとてか眞砂の上に殘しける媛貝のあはれ昔はこの磯に生にし媛貝よ永刧に眠れと云ひつ丶拾ひてはハンカチーフに包みつ丶稍々重くなる程に暫し憩はんとて風波の自然にきざまれしとある岩ヶ根を攀ぢて木蔭に至ればいとも涼しく靑く繁む芝生の上に座して彼方此方を眺むれば半島の光景一瞬の中に現れたり海を隔て丶向ひの島には赤白靑と色々のハウスの深き森の中より肩をいからして見ゆるは白人の別荘……その汀に小さき舟の三つ四つ浮いてゐるズット左に風雨に晒されて炭色と化したる汚色のハウスは土人や支那人の住家……ハウスのほとりは綠滴る二番稲の孕んでそゞろ故國の秋を偲ばしむ稲田の上より一面に甘蔗畑の斜形に餘色を交へず見上る限り靑々と榮ゆる葉色の盡る所に連山の頂が西より東へ鋸の齒の如に並んで熱帶地を表示してゐる靜に延る白雲は峯より峯へ雨宮を移すにやあらん黑雲の一團に近づいたそも暫し風さつと吹いて雲河斜に流れて雲宮は何處に運び去りけん跡は星の見へさうに澄る靑い〳〵空の色そが地に映じて野も山も

簇立つ緑畑の間の白いハウスはゆるぐ甘蔗の葉波の上を走る白帆かとみゆるあれは日本安甘蔗人のハウス折柄風につれ遙かに聞ゆる俗謠「主は日本よ妾は布哇灘を隔てゝ身を焦がす」それが妾の胸には鐵槌の如に響いた刹那後の森蔭よりあらはれし四五人の娘連各々異樣の容姿て目の大きく色の黑い髮は赤く亂れて背の高い衣は汚なく脂肪泌たる土人の娘と支那人の娘奇なる器を携へて此方へ近つきホワッタイムと問ふて何をあさるにや大き岩蔭に隱れ行くオヽ三時半歸りませうと妾等は甘蔗畑の方へ歸りぬ

立田姫

美文



入賞　陸の家　攝津とよ子

## ○病院通ひ

府下　寺尾しづ

手術した時は暑い日中て、母の肩にすがつてやつと内へ歸つたが、今朝はそれから五度目なので餘ほど元氣がよい。大時計のかゝつた病院の門を這入ると眞正面なので、相變らず澤山の人が待ちわびてゐるのがすぐ見える、自分はよい時に來た、と得意で中へ這入つて見ると、もう始まつてゐる。鼻の友達が「もうあなたの名をよんでよ」といふ、私は實にがつかりした、それは呼ぶ時にゐないと後まはしにされてしまふからで

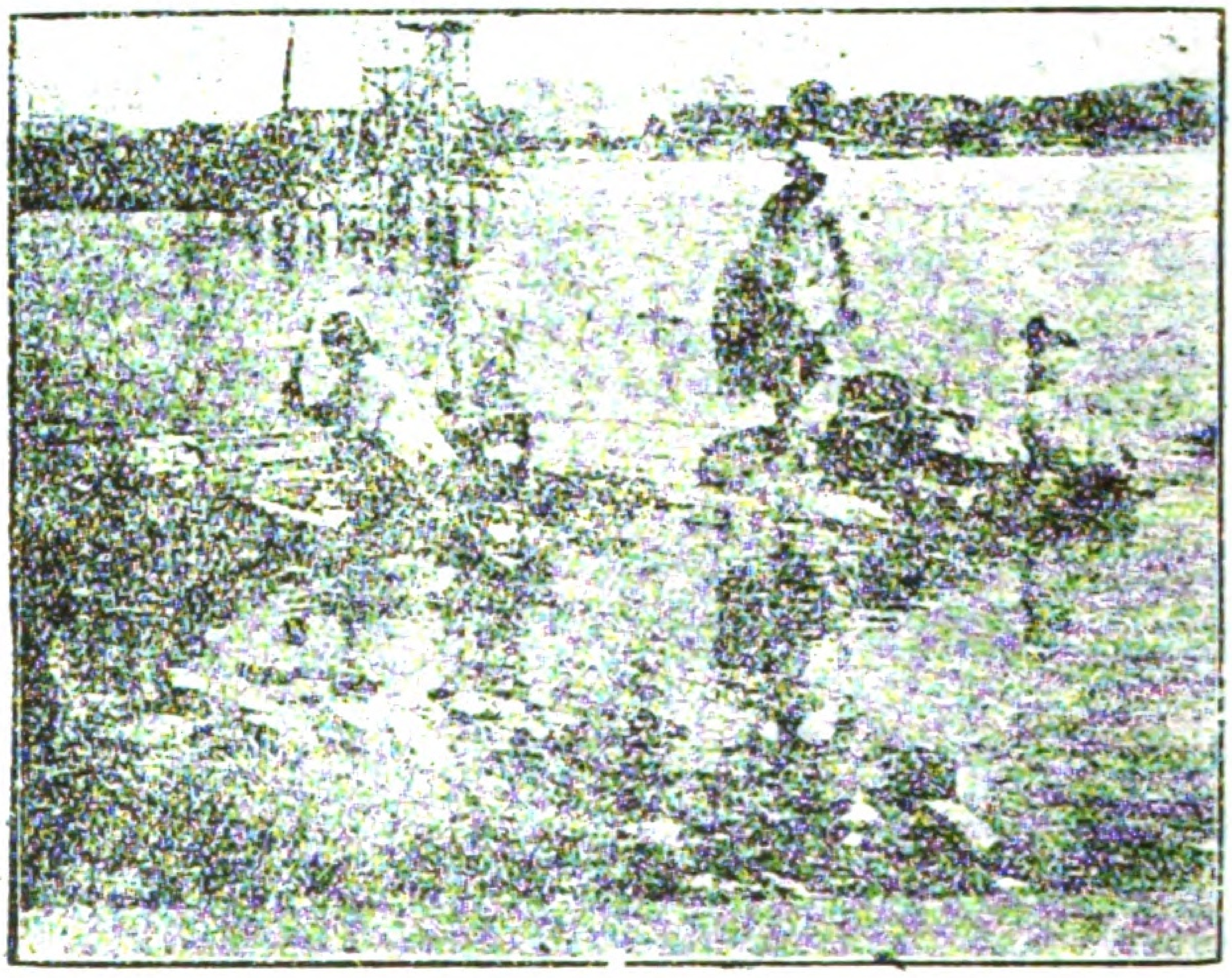
ある。しかしこの二百人もある中で誰か一人は最後の番である、今日は自分番だとあきらめればそれまでと思つてゐると、隣りの人がよばれたので腰掛があいたからそれへ腰を下した、こんな時には本をよむ事も、詩を作ることも出來ない、たゞぼんやり人を見てゐる許りである、然し時々「あの方の帶の形がいゝな、あれは形は惡いが結び方がいゝ、あゝなんて可愛らしい人だらう、あの人はきれいだけど愛がない」など目に止まらんてもないが、何しろ土用ではあるし人込みで暑くてたまらない、それでも今日はいゝ風が吹いて來ると思ふと急に雨がシブキを上げて降つて來た。早くすんだ人は歸り兼ねてゐる、自分もあの時すんでると今頃は困つてゐるだらうと、だん／＼滿足が出來る。暫らくして自分は呼ばれた、意想外なのでうれしかつたが、やつぱり自分の先生の中の終りであつた。然し診察室は涼しい、そして看護婦がしてゐるのを見てゐると實に面白い、細い棒の先へ綿をくる／＼とまいては藥をつけてさし出す、すんだのは綿でこいて煮え湯の中へつけ又綿をまく、つかつた道具は一々湯で洗つてガーゼでふく、二人の醫者を一人で引受けて手はまるで機械の動くやう、やがてその看護婦が自分の名を呼んだ。先生は藥を鼻の中へさしながら「もうよくなつたから來なくともいゝ」つて、私は夢中で立ちあがつた、「まあもう一つ」と先生のお顏もうれしさう。今月一ぱいかゝるだらうと思つてゐたのが、今日きりだもの二十日助かつた、だけど先生にはもうこれでさよならするのか大學病院も鼻では見納めかと思ふと、も少し居たいやうな氣がして、そして汗を流しながら診察してゐらつしやる先生をあふひで上げたいと心から思つた。けれども早く歸つて父母をよろこばせやうの一念は中々強い、止み間なしに降つてる雨の中を駒下駄のまゝザンブ／＼と電車道迄かけだした。

### ○緣日

麴町　泉　幾子

「旦那、口開けてさあ、そんなけちをつけずに買つて下さいよ」と木綿の鯉口を、着た草鞋ばきの、五十男赤ら顏をカンテラの光に照して、しきりに進めて居る、お客はと見れば肥滿した、小作りの一寸蠣殼町邊の相場師とも、云ひ相な白縮緬の兵古帶をダラリと下げて辨慶縞の浴衣を、着流した、四十格好の親分株である。柄にない秋草に價を、つけて居るのは、大方、江一格子に華障子の華奢な住居に朝晩樂しむ意で、あらう。キユーキユーと、若い男がならす酸漿屋の前には、娘等が海酸漿よ千成よ、と、袂を引き合うて居る。隣は一錢五厘均一の玩具屋、葡萄餅屋、繪葉書屋向側は瀬戸物屋に、簪屋涼しい音は風りん屋に、金魚屋と、ずつと軒を並べて居る。其の狹い往來を、歩む事も出來ず立止つて、居れば、壓されてしまう。ピーと何處かで護謨風船をふくらす音「正ちやん！」と友を呼聲がす

る、道はいよ〳〵混雑すると思ふと、此處は左手がせり賣場で今丁度タヲルの半ダースを、手にして居る、どうにもかうにも行かぬ中央に、立つたまゝで居ると白服の巡査が右手に警察の、赤筋の二本入つた、提燈を差上げたので、やつとの事で、通り越した。前の人の後を尾いて行くと細い道を右に曲り、早や、出世地藏尊何々、家内安全何々としてある暗い行燈が兩側に掛けてある。つき當つて左側が御本尊樣で今迄のドヤ〳〵も此處はひつそりして、小坊主がうつ鐘の音がカンカン〳〵といやに、さえ渡る。漸く、何事か念じて居た、年增が、闇に消え去ると、入れかはりに、廿一二の女が華美な、浴衣に黑繻子と何かの腹合帶しめてふと懷中から銅貨投げて「御蠟！」と凉しい聲。合掌して居る、大方商賣繁昌を祈るのであらう。自分は踵を、元の道へと、かへした、遠く服部の大時計が十時をうつ、人は皆急足になつて自働電話の下の虫屋の螢のみがねむたげに光つて居る。


隣人の洗濯　（牧田しづ子寄）

○孤島の兄上を憶ふ　横濱　鈴木さち子

暫は姫島の海風濤の裡に、浮世も夏も忘れ居たる身の今猶の殘炎と與塵と、更に傷ましく懷かしき追憶とに惱まされて、いたくも疲れたるよ。

ア、孤島の空を何處にか當れる、さても思出さるゝ兄君の御上や。

金波銀波の靜かに寄する稻積の阜頭、別離の時の愈迫りて、豐後水道を昇る月に背けし涙の顏を押覗かれ『ぢや幸ちやん僕歸るよ、隨分氣を附けてネ』優しう云はれしみ言葉の姿には一しほの悲哀を覺え、ものも得云はず延べられしみ手に縋り、他の手前も打忘れて唯だ譯もなく咽び入りしを、慌だしき滊笛と迎への者とに促がされて燈臺の光りの見ゆる限り甲板の上に泣き濡せしは一と月前の雲脚緩き夜なりしか。縱し孤獨に馴れたる御身とは云へ、其後の兄上の如何に寂しくて在はすらん、朝夕の事の俄かに御煩はしきこととなるべし、好ませ給ふ釣の漁ありとも自らみ手を下さざれば食膳には上るまじ、夏の日なれば洗ひ濯ぎのわきてもつらく思召さん。共に丹精せし朝顏の花も一人眺め

て興ぞうすかるべし、二人涼むとて漸くに出來せし涼臺の上も嘸なさびしからん、嗚呼傷ましくも亦懷かしき兄上や。

今宵月暗く風稍かなり、周防灘の海默して靑光永く曳く一島角に、寂寥が友の兄上はせめてもの慰藉にと、妾が强いて殘し來しバイオリンをば、覺束なき弓もて佗しうも奏で居らるゝにや‥‥　否や。

## ○虫の音

堺市　岡野千枝

お母さんの亡くなりましたのは私が六つの時でした、その頃お母さんの病氣は餘程惡かつたので私はお母さんのお傍へ行くことをお父さんから止められて居りましたがお顔を見たくて〳〵たまらなかつたものですからそつとお母さんのお部屋へ忍んで行きました、それが丁度今晩のやうな晩で廣い内庭には虫が時雨のやうに鳴いて居ります、何となう物凄い月が窓からお母さんの蒼い顔を照して居ります、「母ちやん」と小聲で申しますと「おゝ芳ちやん」とお母さんがいきなり胸に私を抱きしめて心行くばかり泣いて居ります、それから苦しさうなお聲でお母さんが亡くなつた後でもおとなしくしてお父さんを大切にせねばならぬ事、政ちやん(妹)と仲よくせねばならぬ事などかへす〳〵も仰しやいまして終いにさも思に堪へぬ樣子で私の頰を冷たい唇でしかし熱い情でキッスして下さいました、私は悲しくつてたゞ泣いて居るばかりでございます、その晩寢床へ入つてから私はどんなに小さい胸をいためましたらう、これまでいろんな惡戯をしてお母さんに御心配かけたのは濟まなかつた、これからはおとなしくしてお母さんの云ふ事なら何でもきかうと決心しました、翌朝お父さんに呼ばれましてお母さんのお部屋へ行きますともう〳〵お母さんが優しい言葉をかけて下さいませんでした、何といふ悲しい事でしよう、その時の有樣はとても申し上げる事が出來ません、前晩のお母さんのキッスは最後のキッスでございました、私はどうしてお母さんのこの最後のキッスを忘れる事が出來ましよう、人は誰でも虫の音を聽くと悲しい思をするさうですが私は今晩十年以前の當時を憶ひ出て人よりも二倍三倍悲しい思で虫の音を聽いて泣いて居ります、どうぞお察し下さいまし。

## ○入日月

下之關　島田豊子

入日の月は今冴々と巖流島を照してゐます。靜な島際の波は銀のうろこの樣に廣がる程黑味を帶びて、其銀波の上に小な帆かけ舟が二艘動くでもなく動かぬでもなく淡く白う見えます。あゝあの舟の主はなんて風流な人だらう、きつと歌でも詠めたらなアーと思つて居るであらうそれともそんな風流な人が漕ぎ出したのかしら、あゝ私も乘せてもらひたい、そしてあの好な「我をば君が」の歌を歌つて見たい。

# 短篇小説

小栗風葉先生選



▲規定 純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰入十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

## 地

## ○いやな家

羽後酒田寺町　菊池りう子

七月の半である、私は白絽の襟を汗ばませながらひしひしと痛む右の頬ををさへて屋並のそろつた町をせつせと歩んで山王森に入つた、スーと風が來る、森を出ると平い岡て月山や羽黒山がボーと霞んで見える、私は眼もくれずに石段を降りて某町へ出た、と町の角に水影館と仰々しく看板のある田舎にしては一寸人の眼をひく寫眞屋があつた、あゝこゝから七軒目が池野歯科醫だなど數へながら行と二階だちの小造な家があるこゝだらうかと名札をみたら「歯科醫池野觀藏」あゝこゝだ、然しと又念ををして讀んでみていよ〳〵相違ないので私は洋傘をすぼめてつと入つた、四十恰合のおかみさんが汗を流して雑巾がけをして居る、そして私をみるとすぐ愛嬌よく「さああがらはんせ」と云ふ。私は何となしに一寸ためらつた、と又すぐ「二階にあがらはんしよ」と云ふ、成程土間から直梯子つゞきで二階だ、土間には竹張の指趾が五ッくつきりついてる女足駄が一足きちんと揃へてあつて後は鼻緒のゆるんだ表附の男下駄がだらしなくころんでゐる、梯子の一段目には花ざしにした雑巾が一枚しかれてある、私はとん〳〵昇つて行くと藥の香がぷんと鼻をついた、六疊ばかりの疊といへば赤くはげて商賣道具やら雑誌やらが所せまく置かれてあつて隅の所に竹張足駄の主であらう、いてふがへしを上にてつてり結んだ十八九の娘がうつむいてかしこまつてる、さすがにテーブルが窓際にすゑられて之もはげかゝつた椅子が三つ四つならんで居る、私は何もいはずに頭をさげた、と口髭のある五十許の氣輕相な主人が「おかけなさい」といふ、「有難う」と云つてたち上るとたん直左側にフロックコートを來た主人の三十代許の奇麗な油繪がかけてあるのに氣がついた、私は其はげた椅子に腰を降して三十八九年頃の新潮をみてるとさあ貴女と云ふのでふり

むいたら前の娘をよんだのだつた、カチ〳〵金物の音がする、私はぼんやり窓からうき出た樣な山の姿に見入つた、とホーホケキヨと遂近くから聞えた、オヤと思ふともうそれつきり聞えないてトン〳〵米つきの音が隣から聞える、又後て頻にカチャ〳〵と音をさして「何ともありません?」と云ふ「否何でもかんすない」とのろりとした答。私は何がなし吐息をついた、と吾妻獅子が半から突然起つた、三味と琴とだ、よく合ふ、聞ほれてると『朝つぱらからお客があると見えるな」とにぶい聲てい丶ながらミシ〳〵と荒く梯子を昇つて來た三十八九の顏の長



い目の鋭い男が無遠慮に私と向合に腰をかけて團扇をはら〳〵とつかふ、主人は手をやすめて「やあ今日は如何だおかみさんは」と云ふと其男は眉を蹙めて「如何にもかうにも又青ざめさめてぶら〳〵寢てるのさ」「そりや惡いねして齒はまだやむのか」「やむ物かどうか、見られた樣ぢやないのさ」「君來る時つれて來るとよかつたのに」「何眞平だ第一恥辱しくつて己の嬶なの町へ出されるもんぢやない大厄介さ、半病人だからな、いつも今年の春に病つた時に死ぬかと思へば又ケロッと生きるしな」「おや〳〵そんな事があつたのか」「あんな嬶なんかあつてもなくつても同じさハ丶、女は若い時に限るな」とギロ

リと光る目で私をみた、私は妙に不快になつてつと眼をそらした、そして女を侮辱せられた樣な自分が恥を受けた樣ないま／＼しい反抗心がむら／＼と起るのを禁じ得ない、ひし／＼と奥歯が痛み出した、と折よく「今度は貴女」と云はれるので古ぼけた寢臺に身を横たへた、前に使つたまゝ消毒もしない金器でカッ／＼ほじくる、齒はしん／＼と痛をます、私はたまらなく不快になつて「もう宜しうございます」とそこ／＼に梯子を降りておかみさんの左樣ならを後に今度は裏町に出た、二三丁下をむいてさつさと歩んで來た私はふと顔をあげた、と直二三軒向のひつこんだ家の門際に四十一二の淺黄縞の着物に細紐一本をしめた顔のどんより曇つた青い樣な黒い樣な眼のくぼんだ死の影がたゞよふて居る樣な女が立つて自分を見て居た、私は思はずゾッとして急ぎ足に五六軒通りぬけてふりむいたが其時はもう居なかつた、私は何となしに先の男の妻だと思ひ定めてしまつた、そして自分は恐ろしい惡魔にみいられた樣に恐怖におのゝいた。

それから三日經て私は又池野醫師からの歸恐い者見たさのたとへて裏町を通つたら其ひつこんだ陰氣な家には新らしい忌札が立つて居つた、私はまざ／＼と家庭の波瀾の有樣が眼に浮んでそして唯の死ぢやない！と樣に思はれた、と又新らしく自分が何物にか襲はれる樣な氣がして眼をつぶつてにげる樣に歸つた。

（評）筆は蕪雜だが、陰鬱なる全篇のトーンが能く出てゐる。小說と云ふのには如何かと思はれるが、一種此の妙な感じを印象的に現した筆致は捨て難い。恐く作者の實驗であらう。

## 〔人〕 ○二人

草村瑩子

光代は默つて着換をして、だまつて義雄につゞいて出た。秋晴れの日曜日であつた。

けふも亦、前の日曜日のやうに暮らすのかと思ひながら、俯向いて歩いた。前の日曜には團子坂まで菊を見に行つた。全くの菊見であつた。默つて菊を見て、默つて汁粉など食べて、そして晩く歸つて來て。何の樂しみもなく、つまらなく一日を遊んで暮らした。あんなことなら家内に居て寢る方がいくら好いか知れぬと思つた。けれどやはり今日も、そのつまらなく遊びに出てゆくのであつた。

光代はそれでも少し白粉などもつけてゐた。出來るだけ若かく化粧らうと云ふ氣はいつもあつた。光代は義雄よりも年上て、そして再婚であつた。前の良人に死なれて、實家へ歸つたが、まだ若かくも

あるからと云ふので義雄のところへ來た、義雄は初婚てあつた。義雄はそれは／＼光代を可愛がつた。會社てもよく同僚に冷評されてゐた。

光代はさう愛せられるのが非常に辛かつた。愛せられることがうれしくはあつた。けれど自分がその愛に酬ゆるだけの愛を義雄に濺ぐことの出來ないのが、甚しく心を咎めた。光代はどうしても我を忘れることが出來なかつた。不安つ思がいつもつきまとふてゐた。前の良人、今の良人、この念がどうしても去らなかつたのである。

殊に、義雄が自分よりも年下であると云ふことが非常に苦になつた。そして義雄が愛して呉れるのが、氣の毒なやうな、勿體ないやうな、また空恐ろしいやうな氣もした。光代はいつも苦しい笑顏をしてゐた。

義雄は愉快さうに煙草の煙を吐いて、ステッキを振り回し乍らあるいた。光代は默つて、つゝましげに後に從うた。埃の立つ日だ。電車に乘つた。

二人は隣り合つて默つて腰をかけてゐた。みんなに顏を見られる度、光代は心配さうにオド／＼してゐた恥しくもあつた。そしてその恥しさは不安をまじへたそれてあつた。光代は俯向いてゐた、義雄は晴れやかな窓外の人々や家屋に眼を放つてゐた。

雷門で電車を下りた。

日曜なので人出は多い。義雄は繪艸紙やの前にも立つた。射的場も覗いた。魚釣をも見て笑つた。光代はその間じつと一緒に立つてゐるのが非常にいやだつたみんなに顏を見られるやうて、何か嘲笑されてゐるやうて、意味ある視線を濺がれるやうで堪らなかつた。自分だけでゞも。二人が夫婦であることを忘れやうと力めた。二人は只二人であると考へやうと無理に力めた。只、二人と云ふことだけでも苦痛であつた。

活動寫眞も見に入つた。吹き立てる樂隊の圖拔けた喇叭の聲がはげしく頭をかきみだした。只、中が暗くつて、二人が一緒にゐるのを人に見られぬと云ふことは大に心を安めた。隱れ家でも得たやうに感じた、がやはり不安の念は絕えなかつた。

姦通の男が捕まへられる滑稽なのがあつた。見物はドッと笑つた。光代は堪らず眼を閉いてゐたが、やがてやう／＼義雄と連れ立つて外へ出た。外は明るい、また不安の念が增して來た。埃がはげしく飛ぶ。珍世界も玉乘も、義雄がすゝめるのを無理に斷はつて見なかつた。頭痛を名にしたので、義雄は池畔のベンチて休

まうと云つたが、二人で一緒に腰をかけねばならぬのを思ひついて、それも斷はつた。

それでも夕飯をすまして歸りかけたのは燈ともし頃であつた。光代は、二人の前を樂しさうによりそつて語りながらゆく若い夫婦づれを見つけた。

その樂しさうに話す妻君を、光代は羨やんだ。どうしてあんな風が出來るだらうと思つた。けれど自分も前の良人と新婚の當時はと思つたが、ハツとして、あの樣を義雄が見ねば好いがと思ひながら義雄を見た。

若夫婦は馬道の方へ外れたので、ほつとした。

冷々しい夜である。空には星が澤山散らばつて、電車の往來が遠く聞える。



二人は互に異つた事を考へながら、默つて襟をかき合せながら、早く歸らうと云ふことばかりは、同じく電車道路の方へ足を急がした。

新聞賞　茨城　坂野米子

（評）再婚の婦人が、愛の無い二度目の夫に對する不安の胸裏は、成

程こんなてあらうと頷かれる。文章もキビ〳〵して居て粋撰だが、全篇總て過去止めになつてゐるのは工夫が足らぬ。前のと云ひ是と云ひ、若い女性の作とは思はれぬまで鋭い觀察が出てゐて、何れも有りふれた應募小說とは違ふ。

## 秀逸

### ○夕

金澤市　芝野さだ

夕映が、森の青葉を華やかに照らして、窓に長い影がさす迄になつた。二人は何時迄も夢の樣な話に醉つては居られない。雪子は窓を開けて心細さうに外を見た。

山峽から見える海の樣に、このさゝやかなる庭の上、森の枝のすき間から、すかして見える空には涼しく晴やかに露を含んだ夕の色が流れて居る。森の奥には鴉の目が光りさうに夕闇が心細くも包んで來る。風も吹かぬ此の少時、寂寞の感が人の胸に迫つて來る樣だ。

二人は顏を見合せた。雪子は思ひ付いた樣に笑ひ掛けたが急に立つて衣服をなほして信雄の膝近く坐つたあらためて信雄の顏を懷しさうに見るので、信雄は、

「雪さん、おやほんとに歸るの」

と心定まらぬ樣な目付をして曰つた。雪子は、

「てないとおそく成りますもの」

と云わけがましく曰つて、

「また來ますわ」

と晴やかな目付をしたが、思はず頰を赤くした。

「それでは、其邊まで一所に行かう」

と信雄も思い切つて帽子と取つた。

二人は一所に森の道に入つて行つた。夕を誇る木下闇は、人の身を包んで重り合つて居る綠葉は、まるで胸がはりさける程思つて居る事を曰ふとして苦んで居る樣に、ざわ〳〵とする葉づれの音が、ものゝ氣を籠めて、人の心を深くうなづかせる樣である。

「淋しいのね」

と信雄の袂につかまつて、雪子は何となく恐ろしさが迫つて來る樣な心がしながら立止まつた。振り返つて見ると今通つて來た小さい門も、信雄の部屋の窓も見えて、來た道が洞の樣になつて居る。雪子は何となくあらためて信雄が懷かしく思はれた。何處からとも知れない聲がたへず二人に向つて呼びかけて居る樣に感じながら、涙ぐまれるので、信雄の手をとつてそのまゝ身じろぎもせぬ。

「どうしたの雪さん」

と云ふと、雪子は歩き出したが、人懐しい思いの涙が頰に流れるので顏をそむけて居た。その中、道は森を出てしまつた。空はにはかに廣く明るくなつた。雪子は晴やかに心強く、うれしくなつて、今泣いたのが恥しく思はれた。信雄はふり返つて、美しい雪子を見ると、

「どうしたの、泣いたのかい、雪さん」

と云つたが

「うそよ」

と云つたが、自分でも何故泣いたらうと思つた。

道は右に折れて、森を離れた。向いの丘は繁つた樹で覆はれてその裾にこの道がつゞいて居る。夕日は今もえる樣な色をして、空をそめ、丘の梢に映つて居る。胸をはつて呼吸してる樣な、雄々しい、丘の青葉はどことなく薄絹をかけた樣に、濕氣を帶びて、光をうけた一むらは虹が立つて居る樣に、きら〳〵とかゞやいて居る。何處にもこゝにも晝一ぱいの暑い日光から逃れて蘇生したのを喜んて、いそ〳〵した姿が滿てる樣に、思はれる。其時鳥が一羽、夕日の方に飛んで行つた、勇ましく羽を廣げて、夕燒して居る雲の下を行く姿は、黄金の穹窿に映る影の樣だ。其靜かな道を二人は肩をよせて、人目の無い自由を誇る樣に步いて居たが雪子は初めての道だから覺束なく思つて、



雅致の田舍　（悅子寄）

「この道は何處に出ますの」

ときくと、信雄は小供をだます樣な笑ひを見せて、

「雪さんを、何處か人の居ない處に連れてつてしまをゝと思つて」

と云つた、雪子は此の言葉に目をみはつたが、蜜をなめた樣な微笑を見せて、

「いゝわ」

と云つた。

二人の道は靜かな藪かげに來た。烟の樣な烏瓜の花は夕闇の中に競つて咲いて居る。空にも、地にも、露の

を含んだ風が吹いて二人の袂をそよがせて行く。

　雪子がこういつた。

「静かね」

その聲が信雄には更らに静かな思ひを増させる様だつた。

「雪さん、何時迄も此様な静かな生涯で居たいね。僕は何時でも、この景色の様な靜かな心で居たいと思ふよ。試探に遇はせず悪より救い出したまへ。その通りだね」

と低い力のある聲でいつて。雪子は引き入れられて、幼児の様に信雄の胸に顔をしあてうなづいた。

　やがて夕映は次第に光が薄くなり、暗は丘を包んで來た二人は其處を立ち立つて、裏町を行きながら、宵の燈火にぎやかな角で別れた。

　信雄も雪子も知らぬ人であつた昔は、二人今日を思ふ事は出來なかつたらう。だが今日は二人とも明日を思ふ事は出來ないのだ。夢を築いて、懐しい其のかげに眠をむさぼつて居る二人はやがて戀の犧牲となつて、苦しい涙の味に泣かねばならぬ。と、溶けて行く様な二人の眸のその後に冷やかなものゝうかゞつて居る事を二人は思はぬのだ。

　森に住む葉守の神も、夕咲く夏花の中の宮からも、二人の戀を賛する賛美の歌が聞えた様だ。二人の戀の幸を、この静かな空も、祈つたらう。けれど、この情ぶかい祈の聲はやがて、騒がしい響に消されてしまふ。都は華やかな巧みな花の咲く處、かゞやく燈火に飾られて、装をこらして居る處、そしてその装ひは多くの人の涙と血とを犧牲にして築いたものである。常に誇から梟は闇の中からすかし見て二人をあざ笑つた。

その淋しい單調な聲は森にひゞいて居る。

二人は永久に安らかな靜かな心が得られるだらうか。

夢のやうな物語である。優しい美しい純な味はあるが、要するに淡い物だ。然し、二人が夕暮の丘に立つて、男が「雪さんを何所か人の居ない所に連れてつて了はうと思つて、」と云ふと、雪子は可愛く目を瞠つたが、微笑んで「いゝわ」と云ふ。此の「いゝわ」が無上に利いて居る。（評）

## ○暗愁

愛知縣　成田いし子

「お千賀さんは、今頃どうしてるんでしよう」言ふなと禁じられて居るのを、ふと聞いて見たくなつたので、かう言つて、つと顔を上げると、

「どうしてるのか、そんな事、己公の知らう筈がないぢやあないか」「でも、」とは言つたが夫が餘り、苦い顔をして居るので、妾はその儘默つて了つた。

腦布を縫つて、おくびを付けやうとしたが、何だか氣に懸つてならぬ。

『お千賀さんは必然、妾を恨んで居るてしようね、』

といふと『何を馬鹿な、』聲計りは大きくて目は相變らず書物の上に置きながら、

『言ふな、と言つて有るぢやあないかもう止せつ、』險しい目付て、ちらと此方を御覽なすつた、こんなにされると餘計いつて見たくなるし、亦妙に氣が廻る、それも其筈、昨宵彼んな手紙を見たのだもの。

『本當に實家へ歸つたんでしようか、それとも、ひよつとしたらまだ名古屋の何處かに居るのかも知れないのね、』いつといて、そつと顏を覗くと、夫はいかにもはつとしたらしく、



畫室　振津とよ子

『そ、そんな事が有るもんか』と妙にどぎまぎして、「いつ迄もこんな處にぶらつかして置くものか、己公が承知しやしないよ』『そう、それならいゝけれど、』妾は默つて了つた。

お千賀——といふは夫の圍者で、妾が嫁る少し前迄は此家で夫と同棲して居たとやら、けれどそんな事は兩親も知らねば妾も知らう筈がない、只女中だらうと思つて居たので:::妾との緣談が極まる夫は直ぐ、お千賀に、前津の何處やらに宅を持たして秘密て通つて居たのを實家の父が知つてやかましく騒ぎだしたので夫も堪へられなかつたのだらう、幾金かの手切金を遣つてお千賀を伊勢の實家へ歸したのが恰度今から半年前——妾は無論里へ歸つたのだらうと安心して、其後

など夜夫の歸りがおそくつても、お友達とのお交際だらうなんて呑氣かは知らぬが妾は餘り氣にも懸けなかつたのに、ふと思懸ない昨夕の手紙――夫が會社の總會に行かれたあとで妾はひとり奥の六疊で編物をして居ると。

『旦那樣は何處かへお出掛になりまして御座いますか』と婆やが前掛で手を拭き〳〵入つて來た。

『あゝ今宵は會社の總會でね、』といふと『左樣で御座いますか、』といつて出て行かうとするので。

『お前、何か用なの？』『いえ、』とためらつて居たが

『あの只今、何處の使か分りませんけれど、何ともいわずにこれを旦那樣に秘密で渡して呉れつて置いて行きましたので、』と何だか手紙らしい物をだす。

『そう、何に、』手に取つて見ると矢張り封書で宛名は正しく夫の名だが、差出人は――と見ると書いてない誰れだらう――止せばいゝのに妾はそつと開封して見た。（少々お話し申度事之有候まゝ今宵は是非お出下され度候。）只是丈、名はない、誰れだらう手跡は男らしく書いて有るが……よく見ると何處やらに女の影が潜んで居るやうに思はれる。もしや、もしや、妾の胸は異樣におのゝいた。其夜夫は十時半頃歸つて來た、珍らしく早い。和服と着変へて火鉢の傍へ來るのを待つて、彼の怪しい手紙の事を話すと、夫はぎよつとしたらしく。『開封たか』と鋭く仰しやる『いゝえ』と遂虚言をいふと、さも安心したらしく、『高田の野郎、時々妙な事をやるから困る』いゝわけがましく言つてつと寢てお了ひなすつた、手紙はそつと袂へ入れたまゝ。何故御覧なさらないのだらう――いよ〳〵お可笑い、妾は何だか氣に懸つて、とう〳〵昨夜はまんじりともしなかつた。『所夫、昨宵の手紙は矢張り高田さんで御座いましたの？』虚と知りつゝ聞いて見る。『むゝ少し話しが有るつてことだつたから歸がけに一寸寄て來たが、何に何んでもないことさ、』『でもお可笑いぢやあ有りませんかといつたがもう此上妾は言はなかつた。夫は何故こんなに秘密が多いのだらう、夫は私を欺して居る、妾は欺されて居たのだ、かう思ふといかにも口惜しい、ふるう口唇をぢつとかみ占めそつと夫を見上げると夫は案外平氣で、森田思軒のクラウドを默讀て居る。妾は堪らなくなつた、すべり落ちる涙をそつと仰へて室外へ出た。

恁うした暗愁は始めて人の妻になつて切實に人生といふものに觸れた時、必ず女の弱い胸を襲ふに違無い。事件は同じ事件で可いから、最少し部分々々の心理描寫が欲しかつた。（評）

# 新作脚本　佐野天聲先生選

二等入選　**新光**（一幕）

下野節子

登場人物

| | | | |
|---|---|---|---|
| 子爵夫人 | 芝関千賀子 | 四十四才 | 知事令孃　和波珠子　拾九才 |
| 知事夫人 | 和波桂子 | 參拾八才 | 仝　同　律子　拾八才 |
| 仝　令息 | 仝　浩 | 九才 | 其他　女中　書生等 |

場面、某縣（關東地方）知事邸後園

上手は居間、下手庭、花道より一面に秋の草花の咲亂れたるを置き其間に二三の樹木をあしらひ籐椅子一脚を配置す、居間正面左方床の間、右方押入、上手襖にて他室との出入をなす、下手障子、前に狹き椽あり此れは床の間の後の廊下より通ず、さて椽の前には沓脱石を置き、床の間には袋入の琴を立てかけ、其前に黑地蒔繪の手文庫、床柱に背きて紫檀の机（支那純子の覆ひをなす）机の上には硯函、書籍、卷物などを載せ、よき處に大姿見あり、其れと相對して花瓶（時の花卉を挿す）化粧具、針函などよろしく總て令孃珠子居間の道具

午後四時頃仲働お花掃除の體にて幕明く。

お花箒を投げ出し姿見の前に立ち己が姿を前より後より見ながら

お花「この姿見は大きいから全體身體中が映るよ（腰の邊を撫でながら）當邸へ上つてからお芋なんかもあんまり戴かないので何だか細くなつた樣だよ（今度は髮を櫛にて掻き始め）お勝手で小さな鏡で見るのと異つて明るいからようく見えるよ。先年來た東京の腰元さんが結てた樣に私も結たいがお蔦さんには出來ないか知ら（自然に前髮を前へ引張る。此時仲働お秋密に入り來り後に見て居て笑を忍ぶ科）お孃樣何時も此處から白粧を出てお化粧なさるんだよ。私も大お孃樣の樣に美しくなりたいわ（鏡臺の引出しを明け瓶を出して鼻の先へ塗ける、お秋笑ひを耐へる體）何て好い香だらう。矢張私だつて捨てたものぢやないんだよ。こんな處を村の人に見せたら嘸驚くだらうね。寫眞にても撮て置きたいよ。どんなにして寫さうかしら（襷を外し立ちて寫眞を寫す態度をなして澄し込むお秋堪らず笑ひ出す、お花飛上りて驚く）まあ……お秋さん人が惡いよ

（怒りながら瓶を入ひ襷をかけて箒を執る）

お秋「まあもないよ、お花さん。眞箇に別嬪さんに爲て丁度大お孃樣のやうだよ。今の樣にして寫眞に撮て置くと好いのにオホヽヽオホヽヽ。

お花「知らないよ

とさつさと掃き出す、

お秋「其樣に怒つた處は又格別だよオホ……………

お花「いゝんですよ、しとを馬鹿にして知らないよ。

お秋眞面目になり、

お秋「ちよいと／＼、お花さん話があるのよ。まあそんなに怒つてさ、いゝぢやないかねえ。ぢや話さないばつかりよ。

お花まだ怫然して、

お花「そんなに勿體付けないてお話しね。

お秋「あの……そら東京の華族樣の奥樣ね。あのお方が今日お出てになるんだつて。

お花「え……まあ今日……其樣お話もなかつたにねえ。

お秋「今電報がきたので何時のお着か不明けれど留吉さんが停車迄お迎に上つたのよ、急にお出てになるところを見るに乾度何か御用が出來たに違ひないわ。

お花「御用つて。

お秋「そりやあ、解りはしないがねえ、いくら大お孃樣の前でお強い奥樣でも先方樣はお義姉樣だから御遠慮遊ばすと見えて御心配なすつていらつしやるわ。

お花「そりや左樣てしやうともさ。

お秋「それて私二階を掃除して置くやうに仰付つたのだがね、大お孃樣はお稽古なの。

お花「えゝ、ヴアイオリンの……………もうお歸宅の頃よ

お秋「大お孃樣お不憫だね、彼樣にも里子に遣つたお子は憎いものかね、もう／＼小さくなつて、本當にお優しくつて……お前さんは幸福よ。私の方の小孃樣と來たら僅お一つ違ひだけれど我儘ばかり仰しやるから本當に嫌になるわ、お顔立も似ておいてぢやなし、奥樣のお仕向けもあんなだから此間來たお竹さんは私に大お孃樣繼子かいつて聞たよ全然私も裁縫女さんも一時は左樣思つたからねえ。

お花「私もお前さんに聞く迄はさう思つてたのよ、どうして又其樣に大きくなんなさる迄里に遣つてお置きになつたのだらうね。

お秋「それがね、私も前の大お孃樣付のお春さんに聞たんだがね、何でもお孃樣がお生れの頃はまだお役も低くつて九州とかにお出だつたつてお初産てはあり、お乳がないのてお困りの時に、在方に外には出られないがおあづかりするならといふ人があつたので遂其處へお頼みになると直に小孃樣がお生になると轉任はなさるおまけに先方で何の角のと手離さないものだから遂々其乳母さんが亡る迄七八年の間田舎てお生長になつたので奥樣は御自分のお子の樣な心がなさらないんだ

ッさ……おや〳〵あんまりお饒舌して遲くなつちまつたよ。

お秋行かうとする。

珠子（束髮）銘仙の袷を着し手にヴアイオリンを持ち小腋に本包を抱へ上手より登場、門人慌て出迎ふ。

門人「お歸り遊ばせ

お秋退場、お花珠子よりヴアイオリンを受取りて、

お花「お復習遊ばしますか。

珠子「さうね……今日は止すわ。

お花樂器を床の手文庫の上に置く

珠子「お掃除をしてお呉だつたの……？。

お花「ハイ。

お花己が顔に氣付き俯向きながら言ふ。

お花「御用が御座いましたらお呼び遊ばして。

珠子「あゝ。

珠子包みを解き樂譜を開き、默誦する、

珠子「今日は東京の伯母樣がお出て遊ばすと律ちやんが今お言ひだつたけど、急にお出來とのお報ては何か御用でもおありなのかしら、懷しい伯母樣。お母樣の思召にさへかなはぬ私の樣な不束者を每時優しう仰有て下さる御厚意。勿體ない程身に沁みてたゞ蔭ながらお縋り申すばつかり。交際社會の女王と唱はれる伯母樣には地方者の私、お目に懸るもお恥しい……お早うお逢ひ申し度い。

椽側より律子登場、容顏も珠子より少しく劣りて年には幼稚らしき態度、お召袷小袖に緋朱珍の帶を結め束髮に華やかなるリボンを挿す、（衣服は演者の適宜たるべし）

律子「姉樣今ねお琴の先生がゐらしつてよ。

珠子、律子の衣類に目を注け、其には答へず、

珠子「まあ律ちやん。何處へかゐらつしやるの！

律子「いゝえお母さまがね伯母樣がゐらつしやるから衣更てなくてはいけないッて仰しやるから其れで衣更へたのよ。……あの姉さま琴のお稽古ね、今日は二人でして居ては遲くなるつてお母樣仰有るんですが何うしませう。

珠子「おやあ、律ちやん、和女なさいな。

律子「さう？私過日の病氣でお姉樣にずつと後れて前のも忘れたのよ。でも今日は伯母樣がゐらつしやると思ふと沈着て出來やしないから私お復習丈にして置くわ、デモお姉樣御都合でなさるといゝわ。

珠子「私何だか氣分も惡いから却てお休みにした方がいゝの。

律子「では先生待てらつしやるから私行てよ。

律子退場珠子歎者。手巾を出して目を拭ふ。幾間か隔りたる室より琴の音(菊水の曲)聞ゆ

珠子「あの着物も帶もお父樣が去年地方長官の會議にお出京の時、兩人へのお土產。お父樣は等しく着よとの思召であらう……がお母樣が何とも仰有らぬに着ては反つて、お抗ひ申やうなものと手も通さずに仕舞つてあるが、無意識い織物も其持主に依て世にも出る、あゝ思へば私の所有になつた物は嘸不遇を恨むであらう(又淚を拭ふ)おゝあの菊水の曲、親子心を一つにして親が敎ふればこそ正行も高き勳。たとへ亂れたる世に生れても親の情を味ふ事が出來たなら甚麽に〳〵

(と言ひさして泣き沈む)

浩、水兵服、活潑なる姿にて下手より登場

浩「姉さん泣いてたの？又何か考へてるの、僕、お池の處で蝶のお墓を拵へてお花を上げてあるよ、お姉さん僕と行て見やう。

珠子和こり笑つて、

珠子「浩さんは優しいのねえ。蝶は甚麽に嬉しがるでしやう、では行きましやうね。

珠子姿見に向ひ姿容を正す。

浩「お姉さん早く行からよ。

浩、珠子の袖を引きて下手の椽側に出て、花闌越しに夕映を眺めながら

浩「あんなに向ふが眞紅くなつて綺麗だよね、お姉さん。

珠子「まあ、夕日ですね、美しいこと、(獨語の樣に)でも沈み行く光だわ。新しい光！何處に求められやう

(恍りする)

「さ、お姉さん行きましやう。

兩人退場、琴の音消く聞えて曲終る。花道より夫人桂子、丸髷姿ヒステリーらしき顏容、お花を従へて花道中途より草花に目を付けアレヨ、コレヨと切り取らせながら正面に來る。

桂子「この四季薔薇は美しいがまだ蕾だから採らないで置からよ、まあ其位てよいからお前はそれを花瓶へ挿て應接間の卓子にお置き。私は今行くから。

お花「ハイ畏りました。

お花退場。

桂子「今日はお義姉樣がお出で遊ばすとの事、もう夕汽車てお出ならば間もなく御着。華族方の中でも評判のお義姉樣、律子も來年は女學校も卒ゆる事故、地方へおくよりはお手許へお願ひ申たいとは思ひながら珠子

を置て正面申上げられもせず。東京は御有福の子爵家加之等さんも外國からお歸朝になればお奥様をお迎へなさる筈（獨り笑みて）さうなれば何樣に嬉しいか知れない今度の御出を幸ひお内意をお誘さ申して見たいものだ

桂子退場。花道より浩花束を持て驅せ來り續て珠子も登場

珠子「浩さん、もう澤山にしましやうよ、あんまり折るといけないとよ。

浩「デモ西洋花が



入らないとハイカラに見えないや其れに僕伯母樣に上げる時笑はれるから忌だ。

珠子「花束は女が上げる方が好いのよ。

浩「伯母樣が女だから僕が上げたつて好いだらう、惡けりやや大姉樣と共同に上げやう小姉樣は僕を叱るからお仲間に入れない

珠子「そんな事いふものぢやありません三人て上ると伯母樣猶お喜びだわ

浩「デヤア三人の名を書いて僕が上げやう（傍の薔薇に目を注け）此處にいゝ薔薇があつた蕾てもすぐ開くから採てかうねえ、大姉樣。

珠子「不良ませんよそれはお母樣が大事にしてお置きの花だから取ると叱られますよ。

浩「デモこれがなきや不滿足もの。いゝよ僕が取たつて言ふから。

浩、突然折る珠子驚きて、

珠子「まあ浩さんとんだ事したわ毎朝母樣が樂しみにしてゐらつしやるのに、どんなにお叱りを受けるか知れないことよ如何しやうね。

浩「好いよ大姉樣僕が謝罪るから、心配しないでもいゝよ。

珠子當惑の顏色、夫人桂子、二重上手より出て珠子の不在ぬを不審かり庭を見て、

桂子「まあ兩人とも伯母樣がもうお着になるのに何をしてお出でだへ。

浩「僕はねお母樣、花束を伯母樣に上げるの。

花を見せる、夫人薔薇を見て顏色變る珠子はら〳〵する、

桂子「浩や、其薔薇を何故お採りだへ、お前が採たのかい。

と珠子を睨める

浩「僕……間違て採てしまつたのです、御免なさい、お母樣。

夫人「いゝえ、お前が取りたくつても大きい者が傍に居れば採らせる筈はないのです……私が毎朝此處へ來て開くのを樂しみにして居るのを知て態と採せたのでしやう珠さん。

珠子「私……そ、そんな。

浩「僕が惡いのですよお母樣、大姉樣、止めたのに、僕採てしまつたのですもの、大姉樣叱られる事はないのに。

桂子「お前は默てお出なさい。私が大事にしておくのを採らせるなんて、あんまり薄情過るぢやないか、花の趣味なんか畑の中で育つた和女にはわからないのだらう。折角樂しみにして居たのに何といふ酷い事をしておくれだらうね。

浩「お母樣〳〵大姉樣泣いてますよ。

桂子「其ても濟まないとお思ひの所がまだ殊勝らしいよそれに今日は伯母樣がお出でだといふのを知つて居ながら衣服も着更ないで和女位になれば人に世話をおやかせてなくとも自分て判斷がつく筈です、わざと其儘

て私が不注意の樣にするのてしやう。

珠子「アラお母樣‥‥。

桂子「いゝえ和女は私のことをお母樣と思はないから其樣母樣の恥になる樣な事ばかりするのてす、矢張和女には田舍のお百性が適當だらう、一縣の知事の令孃ともあるものがそんな根性ては困りますよ。

（珠子唇を嚙みホロ〳〵と泣く浩兩人の間をあちこち行き返りして困つて居る。書生上手より慌しく入り來り夫人に會釋して）

書生「奥樣、お客樣がお見えになりました。

桂子「あゝ左樣か、まあ兎に角應接間へ。

書生「ハ、御案内申上て置きました。

桂子「ぢやすぐ行きますよ。

（書生退場。）

桂子「浩さんもお出てなさい珠さん泣顔なんかお目に懸てお吳れてないよ。

（桂子退場、珠子籐椅子に身を投てワッと泣く浩寄添ふ。）

浩「僕‥‥僕惡かつたね、大姉樣お母樣、あんなに叱つて如何して大姉樣の事は彼あ叱るんだらう。僕等には優しいのに、さあ行かうよ大姉樣‥‥よ大姉樣

珠子「わ、私‥‥後て後て往きますから浩さんは‥‥早く行て頂戴。

浩「大姉樣も往かなきや‥‥‥‥。

珠子「浩さんど‥‥どうぞ早く行て頂戴よ。

浩「デハ僕行てるから大姉樣も屹度ゐらつしやいよ。

（浩花束を椅子に忘れて珠子を氣遣ひながら入る、珠子暫く歔きて椅子に腰を掛け又泣き沈む。）

歌「鮮けむる主從者の樂ある家に。花盛かしき乙女子と生れ來しも愛の柞の甘き露の惠みにうるほふ幸もなく（下座にて歌ふ讃美歌若しくは新體詩朗詠の節調）

珠子（涙を拭ひつゝ）「片山里に乳母と一所に七年の年月過した時が懷しい。乳母は死ぬ迄私を離さずに可愛がつて〳〵お吳だつた。あゝ位が何にならう。富が何にならう？何樣貧しい〳〵卑しい其日〳〵を過しても愛のある生活は何樣に樂しからう。私は〳〵將來どうなるのてあらう‥‥？。

（胸を抱いて眼を瞑る、お花二重に洋燈を持來り四邊を見廻し。心を細めて去る。）

歌「世の乙女子は眩く。現世の夢に醉ひしれて
愛戀の軟き香の影を追ひつゝ。互の瞳燃るなり

（子爵夫人千賀子履を穿きつゝ廊架傳ひに登場。束髮を若やかに結び、小作りの一體に目に立つ裝年よりは若々しく品格高き奥樣振り。椽に立ち珠子に注視る。）

歌「我は谷間の暗き花。頰は露みに濡れ日はなきを。

愛の雫に濕き〳〵て。此年月を戀は知らじな。
秋の日落ちて月微り出て蟲聲おこる。

珠子「伯母樣に御挨拶も申さずに一人てこんな處に居て又お母樣の御機嫌に……私はこの樣な月日を過して此行末運命の手はどう弄ぶのであらう？あゝ乳母の所へ行きたい。嘸乳母も幽界から私を心配してお呉だらう幼い時に別ても優しかつた面影は忘れはせぬ。乳母はお百性だつたけど眞箇に優しかつた。お墓も遠い〳〵ので詣る事も出來ないがいつかは苔蒸したお墓の前に泣て〳〵泣て見たい。あゝこの蟲てさへ親と子があつて樂しく啼つれるかと思へば本當に羨しい。私を、私を愛して下さる母樣は何處にお出てのてあらう（空を仰ぎて）おゝ月、月の都にお出て遊して私が此世を去らねば母樣の眞の愛に浴する事が出來ないのてあらうか、私の心の中を知るものは隈なく照す月ばかり若やあの世界に愛の母樣がお出てならどうぞ一日も早く伴れて行つて頂戴、よ、よ。

と伏し沈む。子爵夫人耐らず縁の笹庭に下り珠子の背を撫り

千賀子「珠さん其母樣は私がなる

珠子驚き、

珠子「まあ伯母樣お懐しう……（と縋り付く）

千賀子「珠さん貴女も隨分苦勞をしたが、これからは、私の娘もう〳〵決してお歎きてない。

珠子「エッ其は本當て御座いますか伯母樣如何云ふ譯て御ざいます。

千賀子「實は信道さんが先月お上京の時貴孃の事を種々と御心配てお頼があつたのてね。貴孃の事も私も始終氣にして居た矢先故早速珠さんを私が引き取るとに決定たのてす。デモ姉兄て取計らつた樣に思はれると又あのお母樣が氣を惡くするといけないといふので兎や角や思案の末、丁度お父樣のお留守を幸ひ私一人の心から出た樣にしてあなたを養女に貰ひたいと言ひ出して見るつもりて態うやつて突然一人て來たのてす。珠さんさへ承知なら何處迄も私の娘で育てたいのだが何うだらう。

珠子「まあ伯母樣、勿體ない。こんな地方者の私てもお母樣が許容て下さいますならどうぞあの、いつまでも

……………。

千賀子「いゝえ地方者だなんて、珠さん位の娘は東京にも澤山はありません、私が隨いて居れば今の交際社會を驚かすも瞬く間、決して心配をして無い。

珠子「私…私、もう全て夢、夢のやうてすは。新しい

希望と光明とを與へて下さる伯母様の御厚恩には私、どうしたら如何したら……。

珠子嬉し泣に泣く。浩椽側傳ひに出づ

浩「大姉様(夫人を見て)伯母様も其處なの。僕彼方から廻つて來ますよ。(去る)

下手より浩を先に桂子律子登場、千賀子と珠子の居るを見て桂子不快の體。

桂子「まあお義姉様此處にお出遊ばしましたか、御飯を差上げ樣と存じ先程からお待ち申して居りました。

千賀子「左樣でしたか、秋草が大變美事に咲てますから、遂浮々と上草履の儘此庭まで來て珠さんに逢つたのでそれで這樣に遲くなつたんですよ、濟みませんでしたね(律子を見て)律ちやん、一寸此處へ來て姉さまと並んで御覧。

律子「は(珠子とならぶ)

千賀子(桂子を見て)「桂子さん、此れが本當の桃櫻つていふのですね、此花の色には此花園の花の色香も色を失ふ趣が見えます、あなたは實にお幸福だ。

最前より樹など動かし居たる浩此時椅子の上の花束に心付き拾取りて千賀子の前に進み出て、

浩「伯母様此花ね僕、姉様と三人で伯母様 差上ます。

桂子「オー義姉様。三人が歡迎の積りて御座いましやう。どうぞお受あそばして。

千賀子「まあお三人とも嬉しいお厚志忝なく頂戴いたします。(夫人花束を受取り眺める)

桂子珠子を見て、

桂子「珠子や、和女そんな姿をして失禮ではありませんか、(千賀子に向ひ)お義姉様なにも辨へません田舎者て御座ますからどうぞあしからず。

千賀子「いゝえ、もう決して其樣御心配には及びません。牡丹の花の美しく着かざつたよりも白萩の一本淋しく露に濡れたしほらしい立姿の方が私は嬉しいと存ます(桂子律子を見る、律子もじ／＼する)就ては桂子さんあの珠さんを……私にお借し下さいませんか。

桂子「エッ、た、珠子を。

千賀子「はい、あまり突然のお願ひ故お愕きは御尤もですが等が居りませんので廣い邸に夫婦きり。芝園も淋しい／＼と始終申して居りますので、此方様はお三人故珠さんをお借り申してはと申しますと若、信道さん御夫婦が御承諾下さるなら其に越した事はないと大喜び私も知てお居ての通りの性急もう／＼少しも早くと遂電報なんかてお騷がせ致した次第。桂子さん貴女、お

可愛い孃御を（強く言ふ）お離しなさるのはお辛ふ御座いましやうが私等の心中をお察し下すつて御承知下さいませんか。

桂子此間口惜し氣に珠子を見、律子を見て思案の體

浩「伯母樣、大姉樣東京へ行てしまふの僕あ僕あ不滿いや。

と珠子の傍に行く、珠子無言、浩の手を握つて横を向く

桂子「まあお義姉樣それて態々のお出張。お連れに預る者は幸福て御座います、遲くも今夜の終列車には信道も歸りましやうから異存は御座いますまいが相談の上御挨拶致します、珠子を差上げましては律子がさぞ淋しがる事て御座いましやう。

律子「與にお姉樣が東京へゐらしつては私淋しくなりますわ、お母樣、私も伯母樣のお邸に伺ひたい事よ。

千賀子「兩人一緒に連れて行つてはお母樣がお淋しからうから若、珠さんが來られる樣ならば律さんも折々遊びに來て下さいな。

律子無邪氣に

律子「えゝえゝ、ねえお母樣私今度の冬休みに上てもよいこと。

桂子「…………

桂子心の苦しさを包む體下手よりお秋出る。

お秋「奥樣お汁が冷えますて御座いますが御都合は？。

桂子「今行くよ。冷めたら溫めておくがいゝぢやないか

お秋夫人の氣色惡しきに人々の樣子を見廻し一寸思入ありて會釋して退場、月冴ゆる。

桂子「デハお義姉樣。御飯を召しまして。

千賀子「ハイ有難う。浩さん、お父樣が承知して下すつたら大姉樣と同道に歸京たいと思ひます…て、折角の此花束お厚志は嬉しく頂きました程に、大姉樣好きの貴君の手から大姉樣に上て行末を祝つて下さい、幸ひこの中の蕾の薔薇を珠さんにたとへて清い月の前に大姉樣に捧げて下さい。

浩「伯母樣に上げたのを濟まないけど（躊躇する）ぢやあ戴いて僕と小姉樣とて上げましやう。

夫人より花束を受取る桂子じれつたさうに見て、

桂子「お義姉樣一足お先きへ參つてお待申して居ります（律子を見て）和女は？。

律子「私は浩さんとお姉樣に花束を上げるのよ。

桂子不愉快氣に珠子を見る。千賀子其樣を見る眼と合して急いて去る

律子「お姉樣は今度からは、まア子爵の令孃ですわね。

私お祝ひ申してよ。
珠子「有難うよデモ律ちやんや、浩さんにお袂別するのは嫌ねえ。もしか、私が行くやうに爲たなら浩さんも律ちやんも善く御兩親にお事へして頂戴よ(と優しく諭し
いふ兩人熱心に頷く)
千賀子「今すぐお別れする譯てはなし。さあ浩さん遲くなりますから。珠さん、又明日緩くりお話しなさいよ。
と花束を浩に渡す。律子簪のリボンを抜き
律子「浩さん此巾て結ひた方が美い事よ。
と花束をリボンにて結ぶ。
珠子「まあ綺麗になつたわ。
千賀子「花の香りと心の香りの籠る花束(と思入れ)
浩、律子、共に花束を持ち珠子の前に進む。
律子「お姉樣、お袂別とお祝ひの眞似事に永久迄も精神の紀念の爲めに曇りなき月の前に此花を差上ます。
浩「大姉樣萬歳。
律子が渡す尾につきて浩離す、珠子嬉し氣に花を左に。右に兩人の手を握り、
珠子「御兩人の贈物として嬉く／＼戴いてよ(熱心にいふ)
芝園夫人胸に手を載せ
千賀子「もう／＼こんな嬉しい事は(空を仰ぎ)あゝ月も冴えた。(幕)

今度の應募者は前回よりも多かつたが成績は却つて惡い、此作も前回入撰の「愛の程度」より劣ると數等、脚色も陳腐筆致も幼稚「桂子不愉快げに珠子を見る千賀子其さまを見る目と合して急いて去る」などゝいふ未熟な文句あちこちに轉がつてゐるので當りまへならば秀逸以下に貶すべきだが他に此れを凌駕する程の作が無いので不得已入撰作として發表することにした、此次には是非立派な作を得て他篇の撰者諸君と同じ様な喜びを喜びたいと思ひます (天聲)

## ▲官設展覽會審査發表▼

文部省美術展覽會審査の結果は左の如く發表せられたり

▲二等賞 名士弔喪(菊池契月)勝乎敗乎(木島櫻谷)(以上日本畫)△壞烟(和田三造)雨後の夕(吉田博)(以上西洋畫)△闇(朝倉文夫)(彫刻)▲三等賞 月かげ(上村松園)竹逕幽趣(川北霞峰)青山白雲(小室翠雲)鳴瀧(田中賴璋)轉迷開悟(西山翠嶂)同い年(島崎柳塢)踏神歡呼(都路華香)閑庭(上田萬秋)勿來關(津端道彥)秋郊(山田敬雲)彌生(榊原蕉園)深道(小坂芝田)罰(土田麥僊)牧場の朝霧、野村雪江・秋ばれ夕ざめ(阿部春峯)秋山游[illegible]、[illegible]田麟齋)出陣(荒井寛方)[illegible]島に夏草(村上華岳)黃昏(川村曼舟)達智門の圖(尾形月三)寒林[illegible]鴉(田近竹村)(以上日本畫)△北國の冬 中川八郎)中條君の肖像(フランク・ベレスフォード)曲浦(山本森之助)水のほとり(橋本邦助)少女の肖像(大森安仁子)夏の椽(高村眞夫)晚煙(跡見泰)雄鹿半島の一角(中澤弘光)漁夫の娘(岡吉枝)ものおもひ(石橋和訓)菊(石川寅治)藏(九里四郎)初冬(三宅克己)(以上西洋畫)△閑寂([illegible]島大夢)寒山子(米原雲海)大葉子(山崎朝雲)春秋(北村四海)文覺(荻原守衞)(以上彫刻)

# 和歌

與謝野晶子先生選



△規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は丙種に據る。

## 秀逸

○ 上毛　須藤あさ子
立ち上る淺間の煙ひろごりてひろ〳〵くるゝ信濃上野

○ 群馬　森下花子
わが胸よ千人いるゝに足るものをあはれ一人におもひわづらふ

○ 讃岐　香川育江
七日程わが日輪ははげしくぞ地を輝きぬ人知らざるか

○ 上總　山口いく子
白き衣萎えて小女のもの思ふさまして立てる枯葵かな

○ 千葉　今井なほ子
春姫は素足して來ぬわが胸の小草の花の色を見んとて

○ 若狭　津田汐汀女
蚊遣火は夕の軒に雲生みぬ葡萄畑もる山の一つ家

○ 下總　川奈部琴雨
ことなげに別れし後のまぼろしに悲しさおぼえ病となりぬ

○ 常陸　村野靜子
或は笑み或は嘆きて或は泣き或は死なむと君戀ふるかな

○ 北海道　安川みのり
天地をみどりに染めて夏しらず神は青葉の宮にこもりぬ

○ 長野　唐澤きえ子
歌かたり歌想ひつゝ寢し夜は幾歌人とまとひしにける

○ 三重縣　川島はつ子
そことなくかの天上の花の香のほのめく覺え君と語りぬ

○ 群馬　岩田千代子
春の風こひしき君の黑髮に似し青柳は靜にそよぐ

○ 駿河　天野ふじ子
烏瓜赤きまがきに霜見えてさびしき冬と世はなりにけり

○ 長野　山越悦子
秋雨は戀しき人の掌ろふれにし時のごとく冷たき

○ 下總　越川津根子
打ち並び頭べ眞白の翁たち居ますに似たり朝靄の山

○ 山口　酒匂としこ
おそれ〳〵ひめますもだえ聞かばやとそと眉ゆればたゞえみ給ふ

○河骨の花ゆるがして夕風は君がたもとにかくれけるかな　下野　茶鶴女

○鼓鳴く峯の御堂の夜の灯に古き帝をしのびてなきぬ　伊豫　曉子

○月高くみ空に照りぬ冷かに物のかげ澄む秋の夜の園　備中　青森紫風子

○五十鈴川雨ふる中の大杉の幹むらさきに夜あけぬる夏　津市　杉田まさ子

○六月や野べの朝あけわれ行くに涼しく風は髮ふきにけり　備中　大西好子

○天の世の葡萄のしづく滴るや山紫に村雨ふるも　茨城縣　山下麗子

○さや／＼と水うむ谷に鳥なきぬ青葉の奥に瀧の音して　大阪市　山内濱子

○おとゝひは濱に千鳥の浴衣しておばしまに見る夏川の月　宇都宮　玉野蘭枝

○雜草の中に咲きたる紫の菫の如く君を見るかな　福井縣　片山千里

○夕月夜きざはし登る乙女子の袖に散るなり山さくら花　靜岡市　根岸良子

○稻子追ふ子等の歎聲金色の波動かしぬ黄昏の秋　下野　下河邊なみ子

○古御堂み屋根も朽ちて心なき月は照らしぬ佛の影を　盛岡　四月節子



夏の夕　三河　近藤道江子

○青あらし籬に投む日は鐘の音のさはやかなりや若葉の御寺　千葉　石竹女史

○潮鳴をわれ追ふ聲とききゝまどひ心なみだし磯を歩みぬ　千葉縣　月沖すみ江子

○いともろきよろこびを盛るうつはもの碎けてさらに盛るよしのなき　千葉縣　野々宮蓉花子

○何となく人なつかしき夕かげに君によく似し人を見るかな　豊後　江口芙蓉子

○强く云ひて別れし人を思ふ夕小庭に白き夏の花散る　安藝　賀茂萩林

○御經よむ聲かすかなる山寺の燈火消えてほとゝぎす啼く　薩摩　山下勇子

○夕ぐれをさびしく歩む人見れば十とせわが見ぬ兄の戀しき　和泉　藤原美代子

○星の姫夕にくだり花にれて歸らずなりぬ露白くおく　熊本縣　故里鳥子

○人知らぬ罪とは知れど己のが身を夜毎に責むる胸の鬼の子　信濃　安坂富美子

○紫の那須野は暮れぬ我はしも入相の森にしばしたたずむ　宇都宮　木村孤村女

○朝夕にわがゆく道の畦がやの庭に淋しう山茶花ぞ咲く　廣島市　山野井久子

○五步の庭萩の露散る夕風にあたり靜けくこほろぎなくも　茨城縣　宮本楓子

○　德島縣　西野ひさし
夕顔を青いろぎぬに染ぬきてわがおもふ子の帶となさばや
○　遠江　田口津多子
さし登る朝日の影に敢なくも消えて跡なし露の白玉
○　千葉　三森ゆき
六月の蒼なる海を白帆行く翼をはりし大鵬に似て
○　筑前　和田やちよ
金銀の扇を上げてわだつみに女神は舞へり月昇る時
○　廣島縣　岡信操子
初夏の山の額ま白なる霧たてゝ夜は明けにけり
○　肥後　桑本松子
わが胸のなみ高まりぬあな戀し逝きしわが妹梅雨に增すかわ
○　沼津　中村松月
麗き貞をつよしく人に誇りつゝひとり淋しく物思ふかな
○　日本橋　磯部松風女
罪とも知らで悦ぶ幼兒をながむるまゝに涙こぼしぬ
○　四谷　永田治子
あな清き御空の星と慕へども我は池に咲く野の花にして
○　土浦町　佐野常代子
もゆれどもかけは凉しき水の上に光り流してとぶほたるかな
○　茨城縣　飛田梅野
梅雨ちる川邊に立てば音もせて思ひにもゆる螢飛びかふ
○　茨城縣　中根きく子
朝ぎりのまだはれやらぬやまざとにあかつきつぐる鷄の聲
○　備中　菅森紫水子
君に似し花よゝ切りてひともとを瓶にかざしぬ梅雨はれの朝
○　神田　新村慕子
はりつめし胸の氷もとけ初めぬみ消息ありし其夕より
○　神戸　山本幽霞里
花かげに迎すぼめて紫一つ雨の夕をなやましげなる
○　愛知縣　成田いしよ

朧夜な桃畑みたびおまよひぬわがふく笛の音にほれつゝも
○　豐後　長松信子
そゞろにも泪こぼれて人戀し春さめ濺ぐ花の夕ぐれ
○　靜岡縣　竹田露子
あな一つ垣根の櫻こぼれけり古里しのぶ夕ぐれの窓
○　常陸　村野志津子
我が魂の君がかひなに抱れて語るに似たり朧夜の月
○　尾張　むらさぎ子
靜かにもほがら〳〵と夜はあけぬ太古に似たる野の清澄よ
○　駿河　澁谷あさじ
ぱたゝ神はためくたびにわが庭の白き牡丹の花のくづるゝ
○　北海道　矢萩池根子
あゝひと日君を見ぬ日はわが胸に生ふる木あまた風どよもしぬ
○　伊豆　靜枝式部
山の水しづくしたたる岩のかげ谷をへだてゝ白き百合見る
○　青森縣　西村みや
汝が庭に來ては遊びしそのかみの童を知るやこのはこ柳
○　成島　たつ子
去年の秋ちりし紅葉の色に似て岡の若葉に夕日のもゆる
○　岩代　笠岡松江
大麥を刈り取りなれば日陰にて日がらし鳴きぬ七月のひる
○　岩代　藤子女
飛ぶ蝶の双羽重げに見ゆる哉すゝ菜にそゝぐ雨の夕暮
○　安房　山吹子
降る雨にみかさまさりて山吹の散らぬ花さへうかぶ池かな
○　靜岡縣　中村あい子
なき通ふ鳥に夢は破られてたゞに戀しき古里なれや
○　下野　下河邊浜子
川添の堤に君と語らひぬ藤の花ちる艶なる夕
○　横濱　相樂きみ子
若き僧鐘つく手をばそと休め御堂に散りし紅葉ながめぬ

○　光　濱子
おぼしまの月をながめておのづからよせくる波の音きゝほれぬ
○　淺草　中谷暴世
天つ神番らせ給へる愛の糸われは手操りて行かましものを
○　埼玉縣　内野春枝
杜若今をさかりと咲く窓にひれもすれたりかほよき少女
○　長崎　永井きさ子
夢にだにわすれぬ君の文絶えて思ひぞまさる五月雨の夕
○　大阪　新家順子
我一人行くによろしき富漕道燕横ぎる花すれ〳〵に
○　印播郡　高木きく子
散る蝶は如何なる夢か結ぶらんうすくれなゐの常夏の花
○　日本橋　泉家房子
森々のたよわの夢もこもるらむ涼しかりける若麥の風
○　浦潮斯徳　富島楓子
少女子は花の開くを夢に見て嬉しかりける二月の園
○　静岡市　杉山じゆん
灯をつけむ少女のこゝろ戀ひまさるかはたれ時の靜けさに
○　熊本　山崎くに子
都より訪ひ來し友と白いしの多き河原になでしこをつむ
○　今川ひさし
うなゐ子に摘み捨られしすみれ草哀れ大野に親なしにして
○　鳥取　一色二葉
美くしき君きますべき人待に妊きてありけり心の香爐
○　紀伊　文子
かゝるときかくもせよとの御教へに背きて子らは世にぞさすらふ
○　京都　吉田しづ枝
夏の海波は沈默しぬ血のごとも沖に落ち行く大日輪よ
○　京都　木戸蘭葉
くさむらになく虫いづこ分け行けば分け行くまゝに遠くなりつゝ
○　三浦梅香
朧もやの中に妙なる鈴の音ひゞきて出づる天津日の影
○　伊勢　大原しづ子
美くしの詩歌の影も捉へ得てかなしき戀に泣きぬれてあり
○　常陸　小吹醉子
峠路やふときこえくる瀧の音に若葉楓の奥遊かし見ぬ
○　佐賀市　田中美枝子
杜鵑鳴く音いとし静よ杉の高きこずえに月かゝる宵
○　神戸市　露木雅子
この日ごろ胸の諸聲はゆるめども枝ととなふる子なし歌なし
○　三河　宮野賀那子
天地の神秘とくべき人の子の思へば吾よあまりに小さき
○　横濱　服部花子
天の宮園に百千の花さきて女神まふやと夕べ居見る
○　大阪　若宮やえ子
百人の乙女等つどひ一つ家に笑めるさまして紅薔薇さく
○　大阪市　龍子
青の原十六匹の白駒のたてがみ吹きぬ初夏の風
○　京都市　山口愛華
その果は何地行くらん春の水浜華入百入橋流れて
○　晴子
秋高き大野をかける馬のこと想ふがまゝに謳ひてゆかん
○　北越　青雲子
うれしさに若葉をつゝむ夏の路百合はやさしき君の名にして
○　讃岐　俊子
海のはじめ陸のおはりに我れ立てば白き帆過ぎぬ黒き帆過ぎぬ
○　上毛　素女子
湖あらば沈まんとして折々は寛神の領もさ迷ひて見し
○　矢名
今日もまた降りくらすなるさみだれの小窓によりて君をし想ふ
○　愛知縣　内山ふみ子
豊年の農人はみなよろこびぬ深く幸ある夏のくろ土

○　伊賀　稲森すへ
逢ひし日の君をうたがひあはぬ日の君なつかしとほゝえみて居ぬ
○　紀伊　岸みどり
かきつばた深き心も紫にゆかりにさけり川添ひの家
○　攝津　小百合
君の来し宵にも似たり今しばし小雨はらゝな萩ちらずあれ
○　下野　栗原くに子
月朧に白き野茨の花咲く道を君と行くかな
○　土佐　梶原翠美子
淋しうて春の近方を思ふ時静かに散りし白椿かな
○　桐本悦子
別れあり戀あり此世まゝならず秋にまた添ふ我なみだかな
○　伊賀　關本梁子
まぼろしはうすき煙のかたちして君とわれとをつゝみけるかな
○　近江國　千代子
夕月の影もうかびて朧夜の苗代水に蛙鳴くなり
○　下谷　細谷けふ子
亡き母のうつしゑ胸にいだきつゝまどにもたれぬたそがれの空
○　和歌山　加藤重子
三條や紅屋が門を訪ひよれる日傘のをとめうつくしと見し
○　日本橋　松岡千代子
螢逐ふ足はつかれてせゝらぎの丸木の橋をわたり兼ねけり
○　福島縣　松本眞子
君見ます前に玉琴かなづればいつの日に似ず我手亂るゝ
○　佐渡國　なみ子
夏潮の遠音に耳を傾けて人を思ふにせまる胸かな
○　芝　廣瀬たみ子
蛙なく里の小川にきて見れば月もらさずわかみどりせり
○　下谷　英子
みすゑさす青葉にうつるひかりはへ夏の恋の見へそめにけり
○　伊勢　かすみ

よべの夢君わが胸に紫の勿忘草を挿せしと見き
○　筑前　和田八千代
柔らかに皐月若葉の微風は我が嬉びの胸も吹くなり
○　名古屋　鵜飼菫子
麗しの人影消へておばしまに静けく殘る夏の夜の月
○　伊豫　睦子
五年を花にそむきて草に寝て魂の住家は未だ求め得ず
○　茨城縣　石川とよの
芋の葉にやどる露もて墨すりて天の川かく七夕の朝
○　埼玉縣　鈴木多賀子
もえそめし妹が門辺の糸柳何にみだれて人まねくらん
○　長崎　平田すみれ子
裏庭の闇き小屋もてあかつきを告げし鶏聲勇ましき
○　相模　鍋田美代子
三日月は底を水ゆく千丈の谷の岩なる白百合にてる
○　遠江　原木きせ子
夏の鐘夕草原になり渡り螢に似たる露こぼれけり
○　伊豆　高木喜代子
我が戀は夕の雲に似たりけり暫しもへつゝ色やがてけぬ
○　神奈川　飯田榮子
里の子はむぎの穂つみて笛にして馬おひながらかへる夕ぐれ
○　秋田縣　園女
白鳥のあまた群れ居て物あさる様にも見ゆる山間の百合
○　徳島縣　吉田紫花
うす暗を白百合の花折れてうつむくゆゑをそと問ひて見し
○　熊本市　近野春子
朝な夕な仰ぎなれにし大阿蘇の今日はひとしほけだかくも見ゆ
○　京都　赤尾恭子
闇い夜に惡き事多く胸に秘めて小窓に寄れば郭公鳴く
○　和歌山　室谷忠子
眞砂路に一條つきし幼な子の足跡消えぬ[illegible]顔の下

○

神まつるたいこの音もひゞくなり赤らみ渡る稻の田の面に

○　安房　福原ゆみ子

しづが家に露はあきのやどかりてつくれるまゆの露の白玉

○　金澤市　高村やすゑ

春の日は衣桁すべりし舞衣の銀絲の繡にさときらめきぬ

○　伊賀岡　花子

名も知らぬ街に名知らぬ人を見て双頰ぞ染めぬ少女子なれば

○　伊賀　山村　龍子

あゝ世てふ大なるものに捕はるゝ身は君戀ふるすべなきぞ憂き

○　沼津町　齋藤　千花

夏の夜の夢も見はてぬはかなさを惜しめとばかり月ぞさし來る

○　安房　しま子

常磐なる松の影にも春みせて紅にさく岩つゝじ哉

○　長野縣　伊藤　藹子

下歩にしてまた見かへりぬ夕風は君を吹くなりひなげしの花

○　寺部　君子

わか背戸のいちごは赤く色つきぬよろこひし子を見ぬがかなしさ

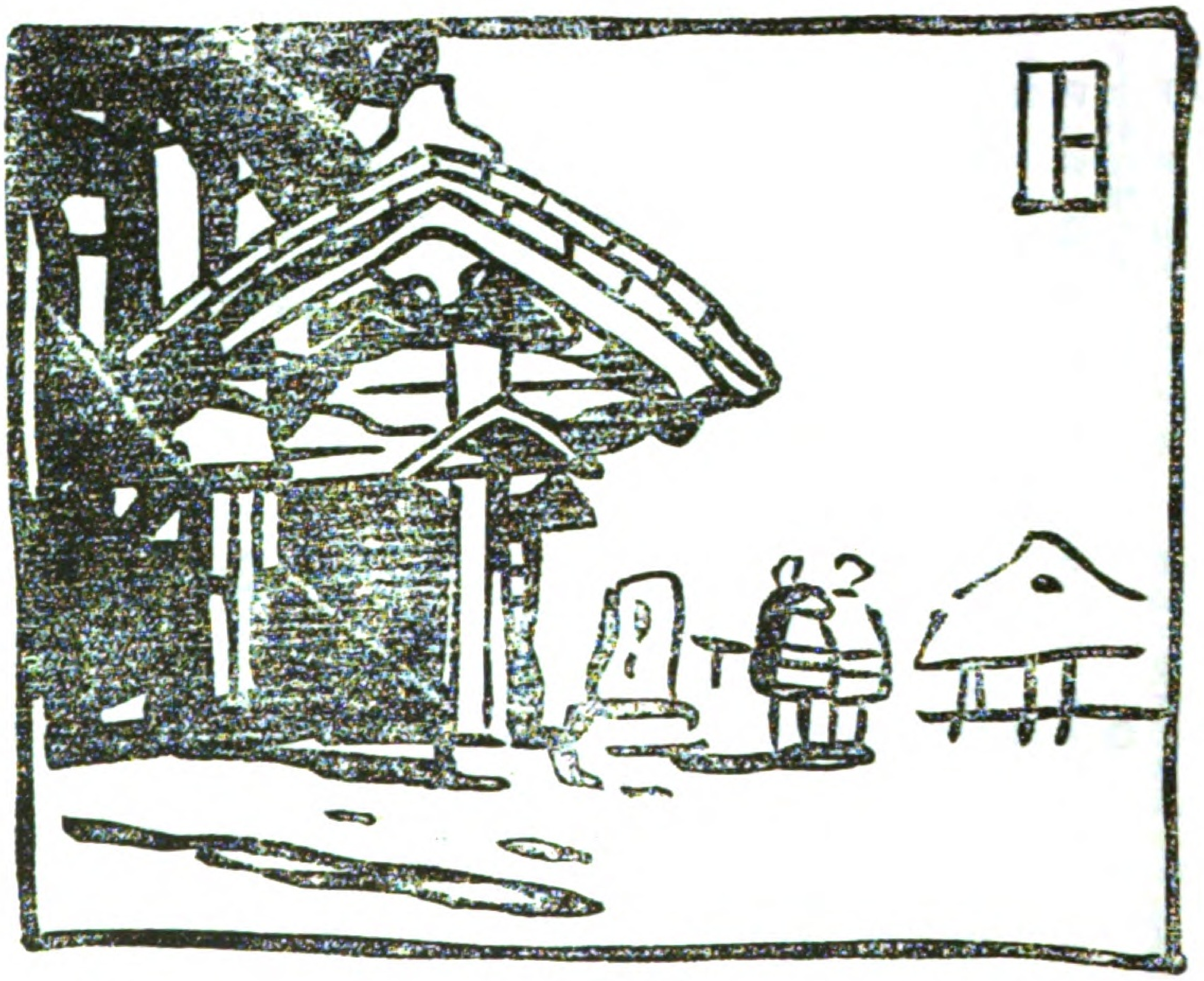
○　越後　はな子

忍ふれとおつる涙をいかにせむ母にわかれし初秋のそら

○　岩田江舟子

京都　村上ひさ子

門　青森　立花とも子



世の夏としもなし

君待てば二尺のびたる我宿の薔薇の枝に白花つきぬ

○　丹後　阪井峰子

濃き淡き緑りの山は五月雨し蛙なくなりとひきませかし

○　和泉　藤阪　幸枝

流れ行く淸水すくひて亡き姉の御髮捧てつる夢を見しかな

○　大阪市　花　子

なつかしき君はきまさずさびしき灯うつす小川の岸にたつかな

○　岩代　藤　華子

ぬるみ行水よりやがて淺澤の岸の若菜はもえ出にけり

○　岐阜縣　村井　かれ

われ一人旅にたちいて淋しくゝ淀川上る船をたよりに

○　岡山縣　廣江　壽子

思はじとちかふ心のあだなれや先づ偲ばるゝ君がうつし系

○　茨城縣　永井　誠子

山奥にかつら絡めどいとわずに淸くも匂ふ白百合の花

○　大阪市　中島　龍子

春の雨いさゝか酒に醉ひ給ふ君にかしづき鶯をきく

○　群馬縣　中里　東雲

朝霧を分けて少女の草刈の歌優にしもきくふるさとよ

○　香川縣　山地　君子

松が根の淸水がもとに君とわれ寄ればこの

熊本縣　田山艶子

春の日は海にかくれぬ根なし雲白衣の君の姿にも似て

○

上總　山口いく子

夕風や手ひき給ひしなき母を思ふ木立に棟の花ちる

○

月司とも

月なくばいかにしらまししづか家のかと田の水に花ちることを

○

神戸　田山はる

さしくたす舟の浜路のおしきかたさくらちりかふみよしの丶川

○

沼津　渡邊とよを

散る花をいかだはうけて下るなり春雨けぶる大井の川を

○

矢名

たをや女の戀の惱に似たるかな小雨に濡れし緋牡丹の花

○

四多摩　森田なか子

我が胸の扉とざして暗黒の若き闇へにたちなやむわは

○

上總　齋藤秀子

償つかぬわが故郷の夕暮やちぎれ雲飛ぶ初夏の空

○

相模　藤原下枝

漁濱や霧雨烟る曉を船にして聽く杜鵑かな

○

愛知　永田舞鶴

箏の音をうれしとばかりきゝし身のいつその人を戀ひそめにけん

○

下總　神田くれなゐ

皐月やみ杜鵑しば啼く命社の洞守が夢のさびしさ思ふ

○

青森縣　久保石子

山上の湖に出れ笛の音をきゝて人戀ふ夕ぐれの空

○

伊豫　櫻木英子

片手には釣たれながらとるかぢのあつかひやすき小舟樂しも

○

下總　山本きかと女

江のあたり花さく小村のどかにてかすみながらに日はくれにけり

○

下野　大塚幸枝

蜻蛉のおはする方ぞなつかしき小草つみぬる初夏の野よ

安房　池田文子

春の色のあらはれそめて淺みどりかすみに匂ふ四方の山山

○

岩代　波流子

棟の花しきりに落つる梅雨ばれの黄昏がたを啼くほとゝぎす

○

小笠原　秋波子

五月雨るゝ卯の花垣にわれひとり君をしおもふ夕間暮かな

○

若狭　田中貞子

夕闇にうすてる月の光受けものおもひ居る黒髮の子よ

○

長野縣　野中やす子

もろもろのゆめと夢とをつなぎつゝきえゆくらしき朝がすみかな

○

函館　ゆう

あさきりのはるゝ彼方に漁舟ふなうた高くかへりくる見ゆ

○

函館　藤本鳥羽子

閑寂の枕に通ふ春雨はいかに淋しく人の戀しき

○

神戸　みなしご

茂りあふ森の下風吹く每に野薔薇こぼれぬ清き香のして

○

三河　天野清子

春日和まるまど近く青やぎのうつる木影につばくらめ飛ぶ

○

羽前　白蓮子

月に讀む文の小窓に春風の姿をうつす青柳なれや

○

安房　[illegible]原とよ子

わが山の松にまじりて咲く花を麓の人やうらやみて見む

○

千葉縣　吉田やす子

磯松の木影を通ふ朝風に夏を忘れぬ君とわれらと

○

筑後　梧桐知登子

そゞろにも人なつかしき夕まぐれ君が紀念の笛とり出てぬ

○

長崎　石山涼風

冬枯れの大野が原を行くがごと君と相見ぬ日のさびしさよ

○

常陸　立花青香

金翼をつけし胡蝶の飛び來ては胸なる花をはぐゝむと見ぬ

○

攝津　赤松久子

亡き母の今はもそゞろ夜は更けて春雨蕭々窓打ちそぼつ

○

小牡鹿の妻呼ぶ聲に桐一葉もろくも散りぬ秋や來ぬらむ　大阪市　豐田業子

○

いつになく庭の櫻の咲きにけり心して吹け春の山風　新潟縣　山崎しん子

○

靈つむうなゐのうたの聲たえて野つらさびしく春雨のふる　直江子

○

我れながら己が心をかへりみて如何でかくぞと泪こぼるゝ　日本橋　磯部松鳳

○

わかれても思ひ〳〵に生立ちて千草に匂へ大和撫子　鶴町　牧野嵐水

○

杜鵑鳴く一聲に古へを忍ぶ若葉のみ吉野の里　金澤市　松井翠馨

○

初夏の青葉若葉に現れたる「思」捨てゝは空の色見る　岐阜縣　早川はる子

○

網ほせる磯が屋見えて松一里濱に人なし舟二つあり　横須賀　藤野百々子

○

君は吾が生命の鍵を奪ひ取りあゝさは何を求めんとする　京都　しづ枝

○

花は散り胡蝶も死して初夏のしるしをこゝに示しけるかな　熊本縣　狹貞子

○

春の月山より出てゝかへり來る路上の君をてらしぬ夕　北越　山崎富美子

○

詩集手に君を案じて佇めば若葉かすかに吟聲もるゝ　攝津　三代子

○

小雨ほれ野の音遠くわが家に聞ゐて涼し水無月の月　群馬縣　江澤古登子

○

きり〳〵す鳴く音あわれに小夜更けて文讀いまとも冷えまさりつゝ　三河　富田うめ子

○

太平の御に詣てゝ歸るさに白き雲飛ぶ筑波嶺を見し　下野　下河邊なみ子

○

京めぐり大和國路を杖拖いて牛の背に乘りさびしみに行く　常陸　初澤さく子

○

緋牡丹に書を思ふ歌よみぬ小さき窓うつ春の夜にして　函館　小野ゆき子

○

おぼろ夜の花散る里に影あわくてらすもさみし片われの月　丹波　美和たき子

○

涼しやと草むら毎に立寄れば何處もおなじ常夏の花　備後　後藤俊子

○

ひら〳〵と胡蝶あそべる花の野は天神宮居の庭とこそおもへ　遠江　松の家すみれ

○

夕庭にひとりイむ初夏の衣かろらやたちばなの花　　董野花子

○

山のかげはなさく小村のどかにてかすみながらに日はくれにけり　下總　山本みつ子

○

春の宵椽にともせる蠟燭の百に風ふく山ざくらふく　盛岡　四月節子

○

烏羽玉の洗ひ髮ふく秋風にひなげしの花またも零れぬ　群馬　泉花

○

ふたゝびは此の世に見じとたはむれしかの日をおもひ涙しながる　巣鴨　片岡昌子

○

桜の枝にさし懸かりたる其の月は亡き母います山にもてらむ　名古屋市　吉田たま

○

夕榮の雲の流に棹さして君渡らずや月の宮居に　越後　佐藤浜子

○

手をとればよゝと泣入る我が友のやつれし姿吹くか夜の風　仙臺市　三好まさる

○

小女子の胸にうつれる戀の影あはればかなき夢と消えざれ　下野　青木多加子

○

なでしこの蹈まれて折れし一枝は接がんすべなみ少女のなげき　日本橋　田代房尾

○

まんまんとみどりみなぎる千町田の稲葉を渡る夏の朝風　豐後　板井君子



# 文士と花

▲木村鷹太郎氏　花の紅白紫黄、皆夫れ〳〵美しく、花に對しては小生甚だ多情多恨、胡蝶のそれの如くにして。然し水盆の水草は好み申候。▲松井柏軒氏　花卉の内柘榴の花の外總て好む柘榴の花を好まざるは赤色濃きに過ぎ暑げなればなり。▲渡邊霞亭氏　花は白山女郎花、高野の深山時鳥（みやまほとゝぎす）、靈顏、都忘れず夏咲くものならましかば。▲塚原澁柿氏　夏期の花卉にて好むものは女郎花。▲山田美妙氏　烈日に平氣で居る松葉牡丹、月草、蛇苺などが一方ならず床しいのです。▲村上濁浪氏　夏の花にては、最も白き山百合を好み候。▲野中到氏夫人　富士の裾野に亂れ咲く今迄見しこともなき草花のいづれも〳〵可愛らしくあらん限り採集して花壇に仕立てばやと思ひ居り候。▲堀紫山氏　秋の七草は日本趣味の粹の極なり。▲紀星峰氏　色濃き花卉は夏の日光と空とに調和したる姿にて、何れも目を怡ばしめ候へ共、露より醒めたる眞白の山百合は、殊に一際の風情を覺え候。▲宮崎湖處子氏　花卉は一體に甚だ好愛し候、殊に百合、桔梗、萩、女郎花、牽牛花等を愛し候。▲高安月郊氏　花卉にては白百合第一に候。浴後詩を讀むに香爽くよりも似合しく候、撫子又可憐に候、睡蓮も趣有之候。▲德田秋江氏　緣日で買つて來た萩、桔梗、芙蓉などの蕾を愛でて秋の來るを待つ樂みは申すも愚に候。▲西村醉夢氏　花は撫子、果實は梨、他はあらずもがなである、と力味返ればそれ丈だが、實に花と言ふ花が皆好きだ、殊に眺めると言ふ許りではなく其に就いての科學的研究にも非常な趣味がある▲幸田露伴氏　花は菊類、ことに野ぎく、寒菊よろしくと思ふ。きらひのものはあまりなし。▲森無黃氏　花は花の風趣を賞するのみのものより香とか果とかを兼る者が上乘と存候、此見地より梅梨林檎等宜くと存候。又桐を澤山植えて紫匂ふ頃花見致し候はば美しかるべしと嘗て思ひ浮び候。花より香水を取り、幹は材に致候へば櫻を植ゆるより利益あるべくと存候。併し本問は夏季の花と果との義にや、夏とありては花香實を兼る者見當らず花と香を兼る百合の外は先づ朝顏夕顏芙蓉おしろい等涼味を愛する者宜しきか。▲江見水蔭氏　花卉、果物別に好みなし。▲谷本梨庵氏　花卉はすべて好候、近頃は庭前の夾竹桃の雨を帶びたる、海棠にも勝りて風情有之候。百日紅も一寸面白く候。▲岡田八千代氏　花ものは花びらのごた〳〵せたぬもの。▲川端玉章氏　花は白き色を最も好み候。▲小山内薰氏　夏の花はいゝいゝをどりこ草だの螢ごけだのうまごやしだの鳴子百合だの言ふ路傍に人知れず咲いてるのを注意して見るのが好きです。▲戸川殘花氏　花卉は東京ならば向島の百花園式がよし、植えごみは理屈がなくて面白い、室だの高山植物だのと科學的なものはいや〳〵。▲藤澤古雪氏　睡蓮、白色薔薇（しろさうすべり）、棕櫚竹、アダアンタムなど嬉れしく候。睡蓮は數種あるが中にもとりわけオドラタ、ジャイガンチアと申すが、何と言ふ事はなく見て居てい丶心持に御座候。▲前田曙山氏　夏の花卉は野生か一々指折り申上候時は、何やら通を衒ふやうに聞え候間、態と遠慮いたし候。▲森大狂氏　花は「あさむらさきの杜若」。▲宮崎三昧氏　花は手作のあさがほ。▲石井研堂氏　花ものには百合三四種、土用藤、雁來紅、姬しやが現の證據（牻牛兒）百日草、其他洋種花もの五六種。▲石川半山氏　花は又何種に限らず總べて愛し申候。▲正宗白鳥氏　花に對して特別の趣味なし。▲木下尙江氏　山野自然の草花は何れも皆高潔にして貴く嬉し▲草野柴二氏　花卉なんか何だつていゝぢやないか、庭木、植木いぢりしてる年ぢやないんだ候は。▲山路愛山氏　花は朝顏、丸咲に限る、かはり者は大嫌ひ、其外緣日の安物何でも美し。▲小川未明氏　梅は其豐艷にして俗ならざるを愛し、牡丹は其の熱烈なるを愛し、薔薇は其香と溫か味の籠るを愛し、石竹は其姿の優しくて哀れなるを愛します。▲高野斑山氏　薄と女郎花の外花卉は嫌に候。▲安藤和風氏　草花もす

き西洋花も結構といふヘイカフ。▲武田櫻桃氏　花卉にては撫子、石竹、鈎草。▲内ケ崎作三郎氏　花は大霊の微笑である、余は如何なる花をも好む。▲小栗風葉氏　花卉は秋草—秋草とは申すものゝ、何れも夏の中に咲き出て申候。▲馬場孤蝶氏　花卉はなにゝても見れば快よく。▲土井晩翠氏　花と果實、なんでも結構、▲島崎藤村氏夫人　花ものはよく田園の花屋やが呼んで廻りますので買ひますが手入れが届かぬ勝ちでお恥かしいながらよく枯して終ひます菖蒲などはすつきりとして心地の好い花だと存じます。▲佐々木信綱氏　花はなでしこの可憐なるを。▲幸田成友氏　花は何でも賞美いたし候へども手許には十數鉢の牽牛花おある位に候▲窪田秋聲氏　花はダリア、薔薇、百合等を好み候▲河井酔茗氏　花は日本の花も西洋の花も皆好きです、木の花よりは草の花が好きです、今年から花壇を設けて植込んで居ますが、所謂園藝家ならぬ小生には、細かしい世話をするのが面倒で、植て置けば自然に生長して、自然に花の咲くやうなのが一番好きです。西洋の草花は兎角培養を怠り勝の我が花壇に育ちにくいと見え能く枯らして了ひます、只今は月見草や、美人草や、矢車草日本の花ばかり能く咲いて居ます。▲與謝野寛氏　夏の花にては大輪の向日葵、西洋夕顔の二つを最も好み申し候。次には罌粟、虞美人草、あまりりす、白百合、鬼百合、桔梗朝顔、雁元、こすもす、雲顔、月見草、菖蒲、杜若、葉鷄頭、萩、沙羅、大霊是等の中には晩香又は秋に屬するものも有之候へども、夏咲くものとして小生の感覺に上り候分を記述致し候▲林田春潮氏　秋の野草、月下の萩、露の尾花。▲水口薇陽氏　花卉は花白きもの。▲須藤南翠氏　就中五月雨の霽にし朝寢好氣に咲ける紫陽花に心して手折得し百合晝夢の乙女姿を愛でつゝ櫻實、巴旦杏を賞する美感、花稀なる盛夏の天に炎帝と威を爭ふ石榴凌霄花の英姿を仰ぎて刀を揮つて西瓜を割く壯感、紫薇の花ほろ〳〵と落る夕合歡の花下に水蜜桃を味ふ快感。▲畔柳芥舟氏　今頃(六月五日)ならば山百合、月見草、いろ〳〵のスターフロックス、ダーリア、等花卉は季節〳〵に何んでも宜しく皆とり〴〵に面白く候。▲藤代素人氏　花卉の中にては朝顔の然も變種ならぬ大輪のものを嬉び候之は淡泊にて姿の優しく露を含みて涼し相なるが取得に候▲矢崎嵯峨屋舍氏　然し事情が許すなら白百合、白牡丹、芍薬、薔薇は培養して見たいと思ふです、殊に白百合は最も好きです、私が白百合を好くのは、其天然の美と芳香とにも因るのですが、其より尚、「野の百合は如何にして長つかを思へ」と言へる聖書の言葉に基く方多いと思ふのです、野に咲ける白百合を見ると、其芳香を通じて基督の生る教訓に接する樣な氣がして、何とも懷しさに堪ぬのです。▲田口掬汀氏　花は山百合に石榴の花、山に咲く白百合の香り高い小首を傾ける姿を見ると、獨に惱む美人を聯想する、石榴は如何にも暑さうに、所謂紅を吐くと云ふ夏らしい其威勢がよいからだ。▲上司小劍氏　夏の花では朝鮮葵の眞紅なのが好きです。要は朝顔を好みます。▲小泉迂外氏　百合紫陽花、さうぶ、杜若、蓮など、皆風情ありてよろしく、分けて好み候は、仲光が討て參りし牡丹餅　抱一。▲藤井紫影氏　朝顔、但しねぢくれたる變り種は大嫌、▲石橋思案氏　花卉は朝顔を好む、最も例の變り種の、咲いて居るのか枯れて居るのか分らぬやうなのは、大嫌ひ。野生的の瑠璃の大輪など、目醒むる心地して嬉し。▲片山正雄氏　花は皆好き。▲樋口二葉氏花卉は何んでも好みます、花物ならば何れかと言へば淡泊なものがよいのです。▲吉岡向陽氏　花卉では白百合。▲幸堂得知氏　花は秋草の野咲きに限るよ。▲橋本青雨氏　花は夫婦共に嫌はございません、中にも朝顔と薔薇は主人はよく世話いします、要は桔梗萩の類を緣日などで求めるのでございます。▲大谷繞石氏　夏の花卉にては箱根の朝顔野生の百合廣からぬ池の乏しき蓮などよきやう存じ候。▲小杉天外氏　花には是と指した物も無之候。▲饗庭篁村氏　花卉は皆好き朝は朝顔晝は晝顏夕かけては宵待草夜會草先年半井桃水氏が滿洲將來の黃花菜根を分けてやゝ茂り今を盛りに夕かけに咲き出て候はもつとも珍にて翌朝其花を採つてザツト鹽漬とし晩酌の膳を賑はすとは一擧兩得廢物利用こゝらは最も拙者等經濟家の得意とする所に候。▲杉山令道氏　花卉は石榴、蓮、蘭、竹の類を愛

す。▲南條文雄花氏　花卉果物に好み無之。▲山岸荷葉氏　園藝趣味は白状するところ滅茶苦茶なり、花はどれを見ても奇麗に、美しく、ゆかし。▲戸澤姑射氏　花卉は、それよりも寧ろ盆栽が好きです。▲笹川臨風氏　西洋花には可憐なるもの少からねど、色合しつッこし、寧ろ大和撫子の淡泊なる、いぢらしきを愛し候。但し實の所は花卉は何れをも撰ばず、多情に候へども、培養は面倒臭く候。▲伊原青々園氏　花卉はこれと言ふ好みなく、何にても皆取り〳〵に悦ばしく候。▲長谷川天溪氏　花などは、有つてもなくても宜しく候。但し竹籔の中をかさかさあるくは好きにて候。▲梅澤和軒氏　花は朝顔▲薄田泣菫氏　夏の花卉では西洋花の濃厚な色合と香氣とを有つて居るのが、寧ろ似つかはしいと思ひますが、それかと言つて山路で見付けた大和撫子の慎ましく、か弱げなのも、白百合のどこ迄も清々しいのも亦異つた風情があります夏の日盛り田舍家の背戸で見る南瓜や瓢の花も野趣を帶びて何處となく捨て難い趣きがあります。總じて自分は四季を通じて、何の花をも撰嫌なく愛すと言つた方なのでせう。▲佐野天聲氏　蘭草、葉は臭くて姿も悄げなれど花は美しと思ひ候、西洋草花の多くむらがり咲きたるは好きに候、但しコスモス、ヒヤシンスなど〻一つ〳〵取り立て〻はあまり感服致さず候、百合花は芳ひが好き。▲中村秋香氏　梨花一枝春帶雨とは楊妃のことを言へりとかや「世にたぐひなしとやいはん花は雨に實は叉夏のくだものとして。▲昇曙夢氏　花卉類にては花の純白なる點に於て、百合を好み、咲き方の微妙なる點に於ては夕顔を好む。▲兒玉花外氏　紅薔薇の妖婦の如く矜針を隱持つは詩味あり。▲樋口龍峽氏　草ばな皆よし、白のカーチーション、月見草など特に好きなり。▲杉浦重剛氏　秋海棠、雁來紅を好候。▲鹽井雨江氏　花卉にては草花に候中にても秋の野の野菊の花にて候。何故にと問はれむに、答ふる程の心あるには候はねど、若し強ひて申さば、いやしげなる姿の奧に、ほこらぬ氣品の薫り、淺い色香の底に、作らぬ優しさの匂ふと見るが、何となう限りなう床かしうてと申し候ふべきか。▲遲塚麗水氏　新竹、撫子花、百合の花。▲青柳有美氏　人間には趣味を持てど、草花などは何でもよし、若し強ひて言へば、桔梗と女郎花とが好きなり。▲澁川玄耳氏　花は柘榴、合歡花よし百合もよし夜會花最もよし、春といふ時候が嫌ゆゑ櫻も隨つて好まず候、躑躅の花、石蕗の花竹間に見るは極めて妙、草紅葉を想へば晩秋初冬の野邊にまさるものなしとも只今は存じ候。▲根本吐芳氏　花卉は總てを好み申し候、就中自ら培養して咲かせたるものを特別愛好仕候。▲渡邊省亭氏　花卉は紫陽花が一番すきにて殊に雨の日は別段に覺え申候。▲坂正臣氏　夏の花では梔子、水蓮。

「新小説」より

## 文士と花



### ▲口繪の説明▼

筆者はスコツトランドの王立アカデミーの會員たるイ、エ、ホルネル氏で、グラスゴーの美術展覽場に在る。地を鎖した大雪も解けて兒共は再び野遊びの樂に耽れるやうになつた春先きの景色で、林も森も木の葉が若芽を吹いて、ふくよかな、心持が畫面に滿ちてゐます。花は林地に特有なものばかりで、スノーヅロツプ（雪の花）といふ花が際立つて著しく、地面一體に微かな匂ひが浸みてゐるやうな極くデリケートな繪です。（香）

# 新進詩人短評

▲川路柳虹君　新進中の最新進とも云ふべき君の詩を『詩人』『文庫』『早稻田文學』などに發表されたもので見ると、凡て口語詩だ。口語詩ては先鞭を着けたことも認められて居る、内容の充實して居ることも、思ひ切つて大膽なことも、印象の明るいことも認められてゐる、此の詩壇の革命兒は何處まで踏習を破壞するだらうと見てゐるとなか／＼興味ある勇ましい働き振りに感ずるのであるが、危ういことも普通でない、何處までも戰ふ人だらうが、刄物が鋭過ぎて自分を傷けはすまいかと云ふ恐れがある兎に角若々しいと云ふ外に未だ評はない。

▲三木露風君　昨年あたりから俄然むく／＼と頭を擡げだして、今では天晴一方の詩人として其才氣に服さぬものはなからう、君の詩は明るい、透明だ、遲疑しない、男らしい殊に今は感情の波の最も高まる時だから、詩の情調も波のやうに動いてゐる、併し君は覺めた日に於て、情にばかり偏れなくなつた日に於て、何う云ふ風に變化するだらうか、君は柳虹等より一歩先んじただけに少し覺めかゝつてゐる、大いなる藝術家たるには實に今後の態度で分明するのだ。

▲北原白秋君　新進中では既う一家を成してゐる人だ、君の才は底が知れないだけに恐ろしい、言語が多くて、表白かたがゆつたりしてゐるから、若いに似ず眞面目な藝術的態度が看取される、象徴詩も好い、印象詩も好い、恐らく一番眞面目に詩を作つてゐる人だらう、今までの詩を集めると既う千頁近くになつてゐるさうだ、精力の點だけでも外の若い者は及ばない、重量のある作も少くはない、君は何うしても今まで作つたものを世に問ふ必要がある、然うして再び更に更に若返る必要がある、も少し感情を露骨にしたものが欲しい、批評と云ふものは作家に勝手な注文をするものだが此れも其一つだ。

▲以上三人の外に短歌から移つて來た相馬御風君、湖畔詩人の名ある澤村胡夷君など既に詩集の出て居る人は勿論、平野萬里、加藤介春、三谷蘆華、森川葵村等新進氣鋭の諸君もある、詩論家にして作もある服部嘉香君など我が新詩壇の前途に活躍を試みやうとする人は決して少くない素より一時から見ると詩から手を引いた青年は少數ではないが、之れ却つて自然淘汰の結果、眞の伎倆ある詩人を出すべき前提であつて、寧ろ賀すべき現象だ。

# 日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は乙種規定に據る。

秀逸

## ○温泉場の一日

越後　幽草女

七月廿九日温泉場の三日目となつた、今朝こそは早く起きて御母樣や御叔父樣を驚かさうと、そつと枕をもたげてほの暗い行燈ごしに御叔父樣の御床を伺ふと、もうもぬけのから母樣は能く眠つて被入る、寢衣の儘て外へ出る。夏の朝風殊に深山のは心地よい、つい目の前にごう〳〵と落ちる瀧の流も大小の石の間を激して流れる水をすくつて、顏を洗うて居ると、美いちやん今日は雨が降らねばよいがと、叔父樣は手拭片手に湯あがりの赤い顏をして被入る。月は何時の間にか落ちて、見るまに四邊は明くなる、靑い木蔭を透して日光が美しい、何處の宿ても雨戸をくる音がして温泉場の方も急に騷々しく、鶯時鳥其他名も知らぬ鳥まて、我劣らずと鳴き立てる。

盛夏の午後は深山ても暑い。御母樣は御晝寐、私は編物御叔父樣は雜誌を讀むで被入つたが、五目並の稽古をして上げるから碁盤を持つて來いとの仰せ、どうせ負けて許り居るて少しも面白くは無いが、退屈しのぎにと隣室へ借りに行く。

夕方三人して散歩する、右も左も山許り何んだか淋しくて家の事許り思ひ出される。夜は凉みの温泉客て外はおそくまでにぎはしい、隣室の老僧樣碁をうちに被入る、お上手のか今一番〳〵と、十一時過まで被入るので私も母樣を何度あくびをかみころしたか、御叔父樣ばつかりは大得意。

（評）温泉場の樣稍忍ばれたり。

## ○花日記

信濃　中村節子

六月七日。淡き星影を數へながら裏に出た、早朝のしつとりした空氣實に心地が良い。小褄かゝげて白い素足て靑き露を踏み碎きつゝ、繁つた綠の小隱の細道をさまよふた。あたりは爽かな草の香綠葉の匂ひに充ち滿ちて居る、全身の脈々は新しい血潮が泌み込む樣だ。潺湲たる小川のせゝらぎ、銀鈴を振るやう、實に淸い水底の小石があり〳〵と數へられる。何げ無く足を入れるとスーッと骨に迄透る其冷たさ。そろり〳〵と歩む。一足毎に新しい命を得る樣な氣がする。何かフワリとまつはつた。オ、白百合だ。何處の誰のすさみか床しい拾ひ上げて眠亂れ髮にソッと差して、淸い小川に其の

影を寫したのである●

六月十五日。美人草の白と赤とが一輪づつ咲いた●花の精を溶かして注ぐ春雨の其潤に、やう〳〵ほゝ笑んだのだと思ふと、此のまゝ散らすのも惜しくて、挿花にした。いつまでも色變らずあれなと祈りつゝ。

六月二十日。薄い帷に溷れた樣な曇つた日。爲す事も無く窓に倚つて詩集をひもといて居ると、懐かしい友よりのお便り、千々に思ひを巻き込めた綛りよりハラりと一片。薄き紙に包むだ忘れな草てあつた、キユーと細いトキ色のリボンで結むてある、色もない香も無いが其の御心が嬉しい――懐かしい――。すずろ歩きのおすさびなのだらうと思ふと堪へ難く懐しくなる、春の名殘りと題して丹塗の少さな管に秘めた。



尺入　麹町　前田たみ子

（評）才筆なれど少しく氣取過ぎたり●

## ○亡き君　（思ひ出の記より）

下谷　蕉雨子

別れてより二年の間、月に花に、只君が俤の慕はしうて、栞ならむ日はいつなるべき、蹈り來まさむ折は何時ならむと、只その時をのみ楽しみの栞りとはして、夜半の寢覺に指かゞなへしも幾度なりけむ。かくて朝な夕なに只君が御身に幸多かれかしと祈り上げしを、恨めしき無情の嵐、嗇の君を吹き散らして、幽明遠く隔て去りたるぞ、なか〳〵に口惜しけれ。君逝きませしよりは、只此世の事、あじきなうおぼえて、花に鳴く鶯、月に歌ふ雁が音さへも涙の種とはなりつ。喜こび樂しみ、皆夢と消えて、そゞろに人知れぬ涙に咽びしもいく度なりけむ。君あればこそ、妾が身も共に樂しとこそは誓ひしか、誓ひし人の逝きまし丶世の中に、何うれしき事のあらむやは、君と共に遊びしあたりの野邊に今年も若菜句へども、哀れ、誰と共にか摘まむ。霞の綾、花の色、徒らに愁ひを誘ふよすがとはなりて、折々思ひ出の琴の音色のそれすらもみだれ勝なるぞ、げにうたてきは世のさがなりけるよ。手箱の底の奥深く秘めたる亡き君がうつしゑ、たゞこれのみ、妾が頼みなき身の友なりけるよ。清き眼すゞしれたる眉、かたくとざせる唇に何をか言はむとすらむ。情溫かなりしその胸の邊りに挿せる一片の菫よ、あはれ、妾がつみて送りしそれなりしよ。生けるが如き俤

の語らまほしう覺ゆれど、玉の緒絶えしはかなの姿なることそ返す〳〵も口惜しけれ。あはれ今宵の如き月朧ろなる花影に、共に手なれの琴とり出てゝ、をかしき夜半の手すさびに、更くるも知らで浮かれしを、定めなき浮世の様ぞ悲しきや。共に調べし君はなくして、只思ひ出の種なるはその時の琴の音のみなるよ。思はずも涙に咽びつゝ頭を上ぐれば、夜やいたく更けけむ、十六夜の月櫻の梢に傾むきて、大空の上には、つまに遅れてや、親に先立たれてか、かりがねの影只一つ。

（評）叙述平凡なれど逸鋒。

## ○今日の日記の一節

京都　眞砂女

頓て一度は此悲しみに逢ふものとは覺悟せしが、今更となりては流石に亂るゝ思ひは靜めん樣もなくて、刻々にきざむ時計の音さへ、常にもなく響きて聞ゆるぞあやしき、程なく來りし一臺の車に打乘り、共に我家を後に、車はたゞ七條停車場に向つて馳けて行く、送る我等に送らるゝ姉菊野樣、互の心中はたして何れをかさまよひけむ、我等は再び此殘る車のあとゆく身なれど、又何日此都の地を踏むとも知れぬ姉が心中、流石に殘る思ひは胸に滿ちて涼しき姉が目には、たゞならぬうるみをさへ催されたり。程なく開札口の開きし知らせに、我等共に入る、迎ふる時の嬉しさに引かへて送る時の悲しさは、見る物事に心の引かるゝものにて「あゝ愈々になつたのね」と涙かくして云へば、姉樣は「もう其樣な事言ふのはいや」と苦しき笑を洩し給ふも見る目には一しほ悲しみのまして、共に顔をそむけぬ。滊車は今しも新橋より下關迄の急行にて、多くの人を送り迎ふる爲に、苦しき息を洩して我等が前に止りぬ。笑を以て迎はるゝ人、涙のうちに送らるゝ人、其往來のはげしき、あゝさても何れが常なるやと……稍々人々も靜まりて送る人のみ、おのがじゝ其窓によりそひて、語らふ中にも、我のみは何故にや言ふべき事のなきにしもあらざるに、絶えて言葉の續かざるぞうたてき、顔見ては涙催し、そむけては又思ひ返し、何日逢はるゝとも知れぬ身を、暫しなりとも側に居て話さんものと、近よれば、あやしき迄に出てず、兎角するうち滊笛と共に搖だす車は、姉樣を乘せて今や永き旅に出てんとす、あゝ此刹那、我は只、御機嫌よう！とのみ、殘る思ひは涙に物言せて、烟と共に消えゆく姿をおぼろげながら見送りぬ、姉樣又同じ御心にや、無言にて頭下げ給ふ、あゝ遂に姉樣は行きましぬ、幸に健全なれ……と祈る心の通へるにや、いかに？頓て影の消えはてければ、元の道を辿りて出づ、我等が心くみてや、今朝の程よりしと〳〵と降りにし春雨も、今は姉樣の旅路の幸あれとや、いとゞかすかになりけるぞ嬉しき、永田樣淸水樣等の、人々に別れをつげて末子氏と我家に急ぐ、午後四時四十分歸宅、人なき部

屋ど又なう淋し、夜は姉様今頃何處等てしようと、うわさとりぐ\に床につく五月十日

評、別離のかなしさおもはれたり。

---

## ○皐月日誌　神戸市　荻野通子

五月三日。日曜日。夜來の雨な猶止まず。

あゝ寂しき日かな。一しきりづゝ風いみじう吹き荒びて、雨の音騷々しく降り亂れ、天一しほ黑くかき曇し時、われ靜かに眼閉ぢて、彼の西の詩人の「雨の日」を思ひ浮べつゝ、終日小暗き部屋にたれ籠めてひとり緩物す。雨蕭々と降り頻くかゝる夜は別けて旅の身に思ふ事多し。

五月四日。月曜日。今日も雨。

朝の路にて、そかしき程美津様の後姿によく似たる人を見て、餘りの懷しさに正午過より筆とりて、細々とながき追懷の文認め、切手二枚はりて出す。

午前中隨分忙しかりし代りに、午後は割合に暇多かりき。此月の趣味の中に、故一葉女史の原稿「にごりえ」の一節見ゆ、いと〳〵床しくて、夜は久々にて一葉全集に親しみぬ。

五月五日。火曜日。昨日とは全くかはりて美しき日也。

波靜なる海の面に、日の光り華やかに照り輝き、果てしなきみ空はるり色に冴え渡りて浮雲の影も留めず。眼に映る物皆活き〳〵として、さながら美しき天國をさまよへる心地して、――淸き理想と若き努力にあこがれつゝ、いと淸和なる一日を過しぬ。

歸途日東館に立ちよりて、短歌評釋を求む。

五月六日。水曜日。晴れ。

今朝はいつもよりちと早く目醒めしかど、何となう胸苦しき樣に覺えたれば、暫し床中に在りて物想ひつ。

此頃は筆とりても別に誌す程の事もなく、又變りたる風信にも接せず、實に平凡なる起ふしを淚もなくて重ね行くのみ。夕食後ふと思ひ立ちて、滯り居し都の友への返し三通漸く書き了りて、十時半頃心易き夢路に入りぬ。

## ○いでゆ日記　越後　齋藤富子

六月三日。晴

竹法螺に目をさますと早や朝日が華やかに向ふの山の上五六寸の所で雨あがりの草木を照してゐる、谿川の水が寒い音を立てゝ座敷の下を下つて行く、竹は何やら働いて居るらしく雪ちやんとお母樣とは昨日三里の道を駕籠にゆられた疲れでか起きられぬ、私は何ともない、竹も變りないといふ、朝飯前に入浴する、割合に人が少ない雪ちやんも竹にそつと入れて貰つた晝のうちは、あまり靜かて、却つて寂しいくらゐ。川向ひの宿でも、退屈なものか、新聞を讀んでるのが、見える。老人だ。お母さんにかはつて、お家へ安着を知らせた後、吉子さまへも上げた。夕飯後、川べりを

歩む。川上は、霧か湯氣か、白いものが、濛として、宿屋の灯が見え初めた。

六月五日。雨

雨なれば外へも出られず生花のお稽古をする、宿屋などの常とて床間は荷物の置場ぐらいに思つてゐるのか瓶子はあつても花はいつもない……などゝ思つて小梅の花をいけた。

六月十日。晴

お母さんの御容體もよ程よくなつて此頃は二回入浴なさる、竹にばかり仕事をさせるのも氣がすまぬから二軒先きの小間物屋から石鹼を買つてきて川端て洗濯をした時々鳩の樣な鳥の聲がした、私は無理にても郭公であると定めたかつた、夜彼の小間物屋の二階とかに上手な淨瑠璃かたりがあるからとて隣室の叔母さんがお誘ひ下されたがお母さんも私も好かないのでお斷りして竹だけに行かせた、お母さんは按摩を呼んで肩をもませられた。下座敷では例の竹法螺ふく男が面白い事をいつて皆を笑はせて居るらしい、蚊も居ない。

◎魂の寂しみ　丹後　衣子

廿二日。近き山の青葉の梢に、蟬のなく聲幽にきこゆ。椽側の障子あけて羽織の衿を付く。柿の若葉枝さして凉しき影を水にうつす、やがて十日もたゝば小やかなる雪の下の、胡蝶亂れて飛びかふ如、夕闇に仄の白き笑をや漂はせむ。いつ根下したりけむ、ま白きさびしき山百合の花の年毎咲きいづるなりしが、それも今年はいたく延びて、花咲かむ日はいつとまたるゝ。自然に慰安せられて我は自然を愛し、自然に親しむにぞありける。あはれわが家の自然、そはあばら家に比してはすぎたるものなり、我は悲しき我が家よりもわが家の自然を愛す、あゝされど我とても人の情の暖きを知れど、其暖き情に浴し能はざる性なり。あゝ獨り！如何に淋しきぞ、花さけど春はいたまし、懷かしむ秋は更にいたましく寥し、あゝ我は人の情の冷たきに泣かむがために生れけむ身か、そは餘りに辛き運命ならずや、必らずしも我はかくばかり悲慘なる運命の下には生れざりしなるを、わが心、あゝわが心、暖きしたはしき同情に飢ゑたり、慰さめてたまはらむ人はあらず、あゝ悲し、ひとり！

廿三日。二時歸宅、暫らくして四邊暗くなるよとおぼゆる間に、鋭く閃めく稻妻、光りも消えぬに轟く雷、勢急なる雨を伴ひて、棟々震へとばかり近き空に鳴る我は思ひぬ、今此の雷落ちて我が家を燒かば如何に、我は瞬間の苦悶によりて、幽冥の境に入り安らけき眠りにつくを得むかと、されど事のあまりに恐しきに身寒うなりぬ。

雨は一度やみて又降りて、不快らしき晴れ際を見せぬ家の中は樋の飛沫にてひた濡れにぬれたり。我は今日何となく我が家を賴りなく思ひぬ、建築古びて力無げなれば、雨にも風にも怖じ恐れざるを得ず、一種の不

安の念潜みぬ、心强かるべきわが家にして。

○歸省日記

伊豆　加藤爲子

七月廿六日日曜日、晴。

心地あしければ、せんかたなく六時に起く。されどさしたる事もなき故、涼しき中にと、教科書の研究を始む。さる程に、甥の算術をしへてと來たれば、中途にして止む。午後興湧くまゝに原稿をかく。

日　御

今日は外に風呂をたつ、枝もたわゝに實れる柿の木の梢を洩れて、またゝく星の影美し、さても湯上りのすがすがしき事よ。

愛知　近藤八重子

七月二十七日月曜日、晴。

洗濯をなし居る折、名古屋の知人より御手紙屆く。

今日はいと暑し。さはれ先生に願ひし事なればと、學校に赴く。(第一尋常高等小學校) 山口先生より畫の御話承る。かへるさ、第二を訪ひしに矢田部校長、わがために御話しあり、大要は、夏季休業は如何にして送るべきか。意志の鍛錬と夏季休業。一家團欒のたのしみ。歸省の價。



七月廿八日火曜日、晴。

掃除に急しき時、郵便來たる。見れば葉書二枚、兵營なる高林先生、御殿場なる高階の君より。

蟬の聲喧しく日は午なり。清水に汗を拭ひ、畫筆をとる。畫きたる松の何とか見ゆる。高階の君への御返し文認む。夜、葉書を出す、遠江の小島よね子の君へ。

七月二十九日水曜日、晴。

髮を洗ふ。すがすがしうていと心地よし。木かげに椅子持ち出して漢文を讀む。

夜、隣家の信ちやん來る。ローレライの曲を略譜に直して居りし折とて唱歌を敎へてといふ。須磨の浦を敎ふ。好む故にや易く覺えよくうたふ。いと嬉し。

○病餘の記

大阪　千代子

七月十六日。妾の病氣も大方快くなつたしそれに試驗の成績も氣掛りだと謂ふので夫はまた上京する事になつた、さうてなくつてさへ朝からしとしと五月雨で何

だか泣きたいやうな寂しい日なのを強いて去りげ無く出立ちの茶を勸めたとこれもまた一向に氣のりのせぬ面もち、常ならば直ぐにも平げ、つくされる筈の菓子皿が今日は徒らに兩人の意中を汲みかねて悄然とひかへて居る其れに何處から來たか一疋の蠅がいかにも執着して去らうともせぬ。俥が來たとの取次ぎにさゝ大義らしく座を起つて羽織の紐を結び乍ら、それぢや身體を大事にね、と眉をしかめて庭に降り立つ夫を見送つて妾はまた床にかへつた

同十七日。雨に濡れた葉がくれに濃紫と淡紅の朝顔が二つ開いたそれに可憐な胡瓜の徒花が興添へて風情ありげな朝風が渡る、昨朝までは此の椽て夫が汲むで下さる手水をつかつたが今朝はもう下へ行く事にした、けれどもまだ下駄を穿くのがもどかしい。

同十八日。母樣にそつと髮を梳いて貰つて今日は床を上げた、郵便ときつい音がしたので我れ知らずつと起ち上つて馳け出すと足が縺れて倒れさう。オヽ嬉しい美人草と薬書が夫から、それにまあ！どうしよう母樣合格!!しかも優等?あゝ病後の胸はかくも弱いか、襟を叩く心臓のひゞきが指尖に傳ふて慄々と、身體はさながら浪に漂ふ……。

◎歌日記　　大津市　八千代

八月四日　朝とく起きいてゝ庭を見あぐるに、呉竹は尚よべの露を含みて、そよ吹く風に瑠璃の玉散る風情いとをかし。

　露ふくむ若葉を渡る涼風に
　　夏を忘るゝあかつきの空

午後、木の葉さはぐに目をやれば、やがて、かき曇りける空より音しげく雨降り出てゝ、はては雷さへはためきぬ。

夕立の後の月影又なく清し。

　夕立の名殘涼しくかげすみて
　　ふけゆく窓にやどる月かな

八月五日　曉より蓮池に露ふみわけぬ。道より吹き來る風もいみじう匂ひて、水面に立つ花はよき人にも似たり。

　月さへも入るをば惜しと思ふらむ
　　池のはちすに風かをるなり

日盛りになれば、蟬の聲かまびすう聞えぬ。たゞ露を命とたのむ其身のいとあはれにこそ。

　我宿の松のこずゑになく蟬は
　　露の命と覺えざりけり

夕方、端居して涼むに、一つの螢火青う前をあはれに流れすぎぬ。

　夕風にすむ月影をゆるう飛ぶ
　　螢火ながらうつす池水

# 實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は乙種規定に據る。

【地】

## ○病める妹の手紙にそへて

美作　杉山花枝

露子樣此れは妹の手紙です。始終貴女を慕つて居ました妹も夏の深く成るにつれ次第に衰ろへ行き昨日今日の樣子ては迚も秋迄は待つまいと醫師も申て居られます彼れが病の褥に就きましたのは梅の花見る頃てしたが、梅は早其實さえ梢に無い樣に成りましたのに妹の病は尙加はり、此頃ては身の自由も適はぬ樣に成りました、然し心の確かな事は驚く計り聲音すら平常と變らぬがかへつて皆の涙の種てす。此手紙も四五日前から心地のよき折々二三度にも認めた物鉛筆書て失禮てすが、表書をして出して下さいつて、申ますめ、自分の身の自由もきけ無いのに貴女の事計りは這麼に思つて居ます。只今は心地好いかすや〳〵と眠りに就いて居ますが夢は屹度〳〵貴女の許に參つてるてせう。露子樣此手紙は哀れな千代が最終の筆と成るかも知れません。されど決して其爲めみ心を惱まして下さいますな、妹もどうせ死なねば成らぬ身とは自分て知つて居ます其れ故絶筆とも思ふ此手紙にも貴女に御心配掛けまいと思つて、屹度嬉しい事のみ書いてるて御座いませう、思へば敢果無い妹、不治の病ながらせめて秋迄長らへて呉れますれば手向ける花も多く成りませうに、筆取ると思はず愚痴が先き立ちましてネ。何卒御暇がございましたら學校の樣御友人の樣など御知らせやり下さい。

病める身の何麼に嬉しく思ふてせう。かしこ

（評）文は心を以て瞭る此の文一種强ゝ力の人に迫るを覺ゆ所謂心を以て綴れるものなるべし實に皆肺腑より出てたる如く讀むもの墮ろに涙を催すべし。

【秀逸】

## ○姪の名を報ず

本郷　朝井松子

母樣お悅び下さい、愈々今日がお七夜なので赤ちやんの名が付きましたよ、其の名をつけるに就ては園村の家例ださうて、先づ名を三ッ撰びまして小さな紙へ書いて結んて、神樣へお供へ申すのてす、夫から一番年若の者が結び紙を一ッ取り升、と夫に書いて有る名が即其の子に神樣がお授け下さつたのだと云つて命じるのださうてす、デ伯母樣は「お裁縫を仕作うと〳〵居睡りをしたら、何處かは知らねど、ふらり〳〵と長閑やかな野原へ出るとそこに如何にも美しい姫白合が一

本咲いて居たので、見過し兼て手を觸れる、と見て夢が醒た、其晩生れたのだから百合子と仕やう」と被仰るのです、私は双手を上げて贊成しました、次に兄様は「僕の名を一字遣つて秀子」大方下字の方が優しいからだらうと思ひましたが、尚ほ念の爲伺ひましたら頭字は男の子に付けるのだから」と仰在るのですもの餘りですわね……其の癖舐る様に可愛がつて被入るのですよ、デ姉様は「宵の口に生れたから小夜子」サアそこで撰び手は私ときまりました、扨愈々衣服を改めてお三方の前に坐ると、若厭な名を付けては此の子に濟まないと想ひますと直に手が震へましたが「どうぞよき名を授け給へ」と祈願を籠て目をつぶつて取つて披く……と嬉しい百合子……、伯母様の御滿足は申に及ばず、姉様も「お前は百合ちやんかい、いゝ名をお祖母様に頂いたね」つて頰を擦り付けてお悦びなさるのです、兄様も「とう〳〵母様の夢に勝たれた」とさもお嬉し相てしたよ、ね母様何と優美な名ては御座いませんか全く園村の花と成るのてせうね、そこて名付け親と云ふので、伯母様と私がお正客て、兄様のお友人や近所の方々をお招き申して盛にお祝を致しました、デ只今漸くお客様がお歸り遊ばしたから、取いそぎ御報知申ます、

（評）平和のさま、悦びの色紙上に活躍せり、まして才にとむとにはからで極めて眞面目なるが却つて此の文に適へりと謂ふべし。

## ○美ちやんへ

芝　廣瀨たみ子

美ちやん許して下さいよ、ね、さぞ美ちやんは姉様を恨んてゝしようね本當に姉様が惡かつたの、だから何卒許して頂戴、姉様はね可愛い美ちやんがどんなにお歎きだらうと、それが辛くて美ちやんに何も話さずに東京へ來てしまつたのよ、今日姉様の母様から、私が發た夜常の様に御庭傳いに美ちやんが私のお部室に來て私が居ないので泣いて歸つたと書いて御手紙が來てよ美ちやん淋しいてしよう、けれど暫らく我慢して、ね淋しいのは美ちやん一人じやないのだから、姉様の今居る所は寄宿舍なのよ海がそれは〳〵よく見えて美ちやんの好きな御舟も見えるの姉様はその御舟を見る毎に美ちやんを思ひ出しては泣いてますよ、美ちやんをとなしくなさいよ裏の川に一人て螢など取りに行かないやうにね美ちやん姉様が今いゝものを送りますよあてゝ御らんなさいさよなら

（評）愛らしきが中にあはれふかし

## ○古里の從兄に

大坂　田中れん子

靑葉若葉のかげ殊になつかしうおぼへ申候、夕まぐれ湯あみしていつもの二階のそばしまに凭り、

消えやらぬ葉山のつゆにやどれる月光、さては銀砂子の如き南天を仰ぎていつとしもなく御あたり思ひ居れば、われを呼ぶ一聲に夢想より醒めし時、御手紙が來てよと、妹の聲わたしくれ候おなつかしき一葉、いつに變らぬ御情のほど涙にて拜しまつり候よ、よみもて行けば此日頃御用のまに〳〵あの清き美女池の堤この春わらひとりに伯母様とあなた様の三人にて一日をたのしく遊びくらせし楓の下今は青々としげれる夏草の上にざし玉ひ清き池中に釣たれ居たまふとか、彼の唐詩の何とやらんに似かよひし御上そゞろ床しう存ぜられ候、釣上げ玉ひしは何？願はくはその一尾味いたきものに候、日ごと近づく夏休の最早餘日もおはしまさず候へば、その願ひもかたき事にてはあらずとのみ。かしこ。末筆に相成候へども御母君さまへよろしく御傳言願ひ上候。

(評) 愉快。



赤毛布　名古屋　きよし

## ○歸國の友に

静田　杉本朝子

静子様昨日はお手紙ありがとう。明日お歸國だそうですね、やつぱりお母さんのお乳呑みたいの、貴孃はいつまでも小供ねえ、昨夜買つたお土産あてゝ見ましようか？お父さんとお母さんに浴衣と榮太樓の羊羹、雪子さんにリボンと人形、違つて？えゝあたつたでしようそれから俊雄さんにラッパと畫草紙、ア、さう〳〵刀劍、俊雄さんお好きだわねえ、そら去年の夏でしたか、私が貴孃の家に伺つた時俊雄さんが刀劍を腰にさして、ラッパを持つて陸軍大將然として、覺束ない大聲で何か歌ひながら刀劍を引拔いたので、私等が逃げ出すと「露西亞負けたやア……」と勝叫をあげてよろこびましたつけねえ、もう學校へ入つたそうですね、大きくなつたてしようね、雪子さんも今年は尋常科を卒業だ

そうだわねえ、どんなに大きくなつて美しくなつたでしようね、お國へお歸りなさるともう撫子や百合、桔梗女郎花などが澤山咲き亂れて居るわねえ、其の中を詩集をひもときながら、自然の景色に憧憬れる。妾つく〲貴孃のお身の上が羨しいが、妾は何も駄目よ昨夜もお母さんに叱られましたの、女學校へも通ひながら弟と喧嘩ばかしして居てはいけないつて、少しは靜子さんを見ならへなんて云ふのよ貴孃の弟さんはおとなしくていゝわねえ、どうして妾の弟はこんなでしよう。こないだもね裏の觀音樣をひつくり覆してお父樣に叱られたの、もう妾の所の水瓜は大きくなつてよ、妾昨日も弟と二人で大きなのを半分づゝ食べたの笑つてはいやよ。

歸つたら皆樣によろしく澤山お乳呑んでお身體を大切にね、早く歸つていらつしやい、あちらからもお手紙頂戴ね、妾また差上げてよ、さよなら。

（評）その樣見るが如し

## ○親しき友に　相模　中川もみじ

あらかねの地もさけなんばかりのお暑さ、いかに過ごし給ふにか、今年は御旅行のおもよほしもなく候や伺ひ上げ候、私事永き日をうかと過ごさんはと、學校にて習ひし割烹をそのまゝ同志の者三四人と、毎日曜日に相開き先日の日曜には、私方にていろ〲料理致し候其樣子の可笑と、母などは笑て居り候この次は春子樣方に開き候間、御料理通の御許樣其時には何卒入らせられたく今より伺がひ上參らせ候かしこ。

（評）趣味多き御集りかな。

## ○姉と呼ぶ人へ　常陸　はま子

姉樣！妾は何となく貴女にすまない樣な氣がして、悲しくて〲ならないの。

妾はいつまでも姉樣と運命を共にしやうと思つて居りましたが、終に境遇に打ち勝つ事が出來ないで、一ケ月ばかり前から妻と呼ばるゝ身となりました。

さぞ心なき女とお下げすみなさるのでせう、それは妾も姉樣の成功を祝はつてからとは思つて居りましたが兩親や兄樣に勸められて今日の身の上、お察し下さい。

身體こそ遠く離れて居りますけれど、心は常に姉樣に走せて、一時も忘れた事はないのよ、二三日前にはこんな夢を見ました。

一寸郷里へ歸らうと思つて、今着いた下り列車に乘り込み、ふと窓の外を見るとね、どこか見覺えのある人が睦ましさうに何か語合ながら、停車場の方へ來るのですよ、よく見るとそれは兄樣と姉樣、はつと思つてね、窓から頭を出し、大聲に呼び止めやうとするけれどもちつとも聲が立たないの、そのうちに汽車は動き出したので妾は地駄々ふんで泣きましたよ。

目がさめて見ると、それは皆古鄉を思ふなつかしい夢あゝそれが事實であつたなら妾はどんなに嬉しかつたでせう、けれども妾は兄様と姉様の目出たい御結婚を祝ふ日が近いうちにあらうと樂しんで居ます。

秀子さん、妾は貴女を永久に姉様と呼ぶ事が出來るならば、此上嬉しい事はないわ、こうして古鄉の空を眺めては、毎日成功を祈つて居るのよ。

(評) 情ふかし。

## ○音づれ絶えし友に

山口縣　吉田美代子

去年の雪に別れ候ひしより幾月、今はた月に花に怨みの數多く候哉、此頃御わたりには如何にすごさせ給ふらむ人目も草もとはかけては祈らざりしをさても御便りの遠々しさ空行く鳥の羽搔きなりともせめて、一筆賜ふべきを餘りの御情無さに只管怨み參らせ候、ましてや、昨今の空物かなしく降り續く雨に、一しほ御わたり案じられては陰乍ら、御恙なかれとのみ念じ暮し居候、御許様は常より御健とには在さぬ御身の遙々、都の空に物學び、ならはせ給はぬ御旅寢久しく、山里の露深く、空氣淸らけき所にのみ住みなれ給ひし御身の、いかばかりつらかり候はん、申すも愚かに候へ共日に增し暑さは加はりて堪へ難うなり申せば、一重に御身御大切になされ度必ず、些々の慾にかられて、夜更くるまで御勉强遊ばさるゝなどは、わざと病氣をまねく基に候へば、決して、遊さぬ様安らかに御身を保ち遊ばす様つとめ被下度願上候、此夜頃、幼き少女子の螢追ひ行く妾見侍りては、去年の夏の夜の樂しかりし事共思ひ出候、四ツの袂をひら〳〵と風に吹かせつゝ、阿武川の岸に月に螢にたはむれし様のまぼろに浮ばれ候ては、夢と消えし昔戀しうて、一人さびしう思ひ更り參らせ候、今宵やう〳〵雨はれて、十三夜の月くまのふ照り侍り、又々、御わたりなつかしうなり增候程に、月明りに拙き筆を走らせ候、妾が心を露ばかり汲ませ給はゞ、いかで、一片の御かへりをな惜ませ給ひそ、扨、此品不出來には候へ共、徒然の折、昔の繪筆の忘れ難う庭園の花寫し取り置き候もの取揃へて、十枚ばかり御あたりへと參らせ候、あはれはかなきものにもこもろふ、誠は淺からぬを、文机の御上にこそは難けれ、せめては、折ふしに昔の友思ひ出てんよすがにもなし被下度願上參らせ候、かしこ

(評) やさしき筆に情こもれり。

## ○都の友に

熊本　近野春子

五月雨上りの俄の暑さ。君には如何と思ふ折しも、懷かしき御筆の跡を拜し參らせて。こよなう嬉しく存じ候扨東京とは物にてこそ讀みたれ、未だ夢にも見ぬ都の様の數々、手に取る如きは御文の上、艸深き田舍に空しく朽ち果つる身の、扨々御身羨しくこそ候へ。さりとて、昨日は飛鳥今日は隅田と、榮華の夢に飽き

給ふ御身、むくつけき田舎の樣も、時には御慰みにもやと、拙さをも耻とせて、一筆物し參らせ候。

先つ日の事、時子樣の珍らしき御訪れ。色々のお話の末、いでや日を期して、思ふどち一堂に寄り集ひてはと、漫ろ語りの眞となりて、鳴滸がましくも、發起者てふ者の中に數へられ、昨日しも、例の山田屋にて催され候。吉田樣始め、洩なく御出席玉はりて、久々にて昔の物語も出て、惜しき袂を分かちしは、夕暮近くにて候ひき。信子樣は立派な奥樣振り、最早來月は臨月との事。お易うは物ものたまはず、たゞ始終つゝましう在しける樣、推察し給はる可く候。倘色々聞こへ上げ度く候へども、後程に。かしこ。

（評）通篇「倘ほいろ〳〵聞え上げ度」は惜しき事なり、力拔けたる思せらる。

## ○暫く途絶し友に

小石川　夏衣

御なつかしい貞子樣！私は三年と云ふもの、あなたの御住處を、知りたいばかりに、どんなに、苦勞したでせう、けれ共、どうしてもわからず、もう近頃はあきらめてをりましたの、處が、けふ、つれ〳〵のあまり、けさ着た某誌をよみもてゆくうち、我親友よし枝に、貞子、と云ふのをみて、よし枝とは我が名、貞子とはあなたとおなじ、何とはなしにひきつけられてよみましたら、私とおなじ思ひの君が筆の御すさび、と知つた時のうれしさ、……

手振りて相逢ふ事ができると思へばあなたは御病氣何といふことでせうあゝ、御地へは汽車で僅に一時間餘り、次の日曜には、例へ矢がふるとも火がふるとも必ず必ず御伺ひ致します、なぜ二人は目と鼻の間にゐて、相知る事ができなかつたのでせう、いや愚痴はよしませう、

萬事は御目もじの上、

どうぞ三日の後をおまち下さいませ、かつて御好物なりし北海道の櫻實をおみやにして、さらば、貞子樣

（評）懐しさに迫る心の筆もまたすら〳〵と走りぞ行く、おもしろし。

## ○都の友の許へ

横濱　清水ふみ子

時折、時鳥の音づれ候て、不如歸〳〵と啼く聲の、いと哀を告ぐる夕、病む宿の窓に身を寄せて、御情こめたるいみじき御文は、妾が手に繙かれて候、未だ降りしきる五月雨も止まず、ひろごれる芭蕉葉はしと〳〵と雨に打たれ居り候。さてこそ怪しき魔の神のみ手打ちてや興じまさむ、面白ろしとや、樂しますらむ、奇しき運命に捕えられたる、妾のひとり轉地の寂しさを見給ひて。おゝ妾が身はいかに、不幸なるにて候ふか。なつかしき君と別れて東に三十里、あした、海邊の路に瞳を、こらして、心は何物かに憧れ、夕、歸帆の風情に、慄るゝも、此の寂しみは、打ち拂はるへく

も候はず、おゝ君よ、先つ日、おとづれ申上げてより前から巾せとの事、かへす〴〵も、御禮申上げ候。

其の夜は涙に袖をぬらし申候ふが、今日、御ん情みちたる御玉章を拜見いたし候てより小さき妾が胸はいよ〳〵せまり涙は尚も繁く候まことの御文、必ず〳〵忘れ侍らじ。さるにても、拙き妾が口吟みを、うかと差し上げしを、さ程迄も仰せらるゝは、誠に身にあまる事とうれしゆ存ぜられ、厚く御禮申上候。母は、矢張、女の事とて、御君の御玉章を語りし眼に、老の眼にはや、涙さへ浮べて、厚く御禮を、お

（評）筆に力あり。

女工　　三重縣　加藤ったへ




おゝ、九十九里の海は、雨の爲めの暗さを、尚も、暗く變じていよ〳〵夜の世界と變じ申し候今宵月が出て候はゞ、又も、都の君を、思ひ出して、候ふものを、五月雨の未だ、たへ間もなければ今宵は又も、病床に泣かん覺悟にて候。先は、あまりのうれしさと、悲しさとの末、御返事迄〳〵し、

# かたみの衣

太田樂子

美くしき衣ありと、妹の少女は高く叫びぬ。障子はづしたる明るき室に、かけ連ねし衣のかず／＼紅の袖や、紫の褄や、とり／＼の衣の色目も綾に、つやある帶は衣桁の上より疊に曳きて、主が誇りの長からんさまなる。ぬき殼の簞笥の抽斗いくつか、室の内は足入るゝに辛き程つゝみ紙亂れたり。軒端に見ゆる天高し、氣は澄みぬ。秋朗らに晴れたるを、金風さはやかに衣を通して、一とせの濕氣や拂はむ。清らなる日なり。

わか／＼しき聲の高きに驚かされて、日當りの椽近く、鉢植の菊の手入れに餘念なかりし翁は、少女の方を見かへりつ。

姉なる少女は、はやれる妹を輕く抑さへて、徐かに美くしといふ夫れを取出だしぬ。空となりし抽斗は傍へに押遣りつ。取出てしは厚ふさの紅や、褪せたれど、金糸銀糸の縫ひ美くしう、うす紫に總模樣する白藤の大ちかさ、長きしだりに昔の夢や籠る。三尺振りの大き袖の香もなつかし。

手傳ひゐし婢もよりきて、美くし衣よと飽かずたゝふ。げによき衣よ、姉上のにも非じを誰のならんと、妹の千枝子は訝かしげなり。この一昨年亡せたまひし祖母君のなり、祖母君のさなりと宣ひしを、と姉は云ふに、祖母君がこれを着ましゝかと妹は可愛き目をみはつて、小さき驚きの眉のしなやかなる。稚き胸には映る亡き祖母が俤の、おとめの昔ありしとは思ひがけざらむ。

着せよといふに禁むれどきかぬ妹が肩へ、姉は紀念の衣を打かけやりぬ。

祖父君、祖父君と笑みかたまけて嬉しげにゆく妹、麗はしき衣は小さき身にさながら法衣のごと、袖も曳きぬ、裾も重げなり。姉と婢は聲を合せて打笑ふ。

祖父君よ、見たまへ美き衣ならむと椽に立つを、翁は打見てほゝ笑みたりしが、千枝子には能く肖つかはしきぞ、そがまゝ躍りて見ずや、など戯れつゝ。

祖父君よ、こは祖母君のなりしといへど然なりや、祖母君はかゝるを着ませしにかと、千枝子はさかしげにあつかひ兼ねる袂の長きを翻しなどして。

さなり。汝らが祖母にも若き昔はありき。そは祖母

が奥仕へせし折の晴着とて、模樣よしと云ひて甚く好みしものなりしが。

云ひさして翁の面晴れ〳〵しうなりぬ。秋の日老いたる片頬を照らして、翁の胸には今温かき光のさし來ぬらし、頭の雪に七十幾年の夢をさとれども、戀は血通ふ限り人の心に生まむ、戀らぬ戀の俤は、とこしえに若く新らしうして。

白丈長清き髮のつやゝかさ、白を重ねて此衣を着て、立矢の帶のいかに榮えまさりけむ。千枝子の齡には遠けれど、姉なる少女とは等しかるべき年の程なりき。

翁の前には花のごとき少女のあらはれ來りぬ。さながら捉へ難き影のやうに。

翁は菊に手入れの手をとゞめて、懷かしき振袖に見入りぬ。よろこべる千枝子は其人ならねど、日に榮ふる五彩の色、いかなる彩と翁の胸に映るらむ。翁の瞳には常に見ぬ和みの色を浮べたり。

わが爲に花笑まひ、わが爲に鳥うたうと醉ひし春は昔なりき。

思ひは今を離れて、七十幾とせ、越へ來し夢路をうつゝに辿るか。

暖かき日に蒸されて、黄菊の花の香り仄かに翁をめぐる。

さても昔の夢の美くしかりしかな。

# 家庭と文學

## 書物嫌ひの家庭

元來今までの我國の家庭では、書物を讀むことを餘り奬勵しない。學者ならいざ知らず、一般の士農工商は所謂町人根性が永く其家庭を支配して、町人は町人て、眼に一丁字なくとも立つて行けたのである、却つて書物など讀むと高慢になるとか、怠惰になるとか云ひ、今でも片田舍に行けば乾度、書物などを覗き込んて許り居る若者は敬遠主義を取られるに相違ない、又家庭ては之を嫌ふに相違ない。勢ひ家庭の人達に陰れて讀むとか、内證で物を作るとか云ふことになり、是も大いに文學迫害の一原因となつた。

我等とても身に覺えのあることだが、家庭で禁じたり、叱つたりすればするほど、讀みたくなるものだ、全然平凡な人間て、書物など讀まなくとも、世の中は面白い、娯樂もある、希望もある、滿足もあると云ふ

のなら、何の異議もないが、少しでも物が理解つて、文字の知識が出來、讀書の興味が分つてくると、何んな反抗をしても讀まうと思ふ、然うなる程ど家庭の親みが薄くなつて、專ら讀書の上に慰藉を求めやうとする、之あるかな、蜜のやうな甘い小說や、毛のやうな柔かい詩歌や、凡て自分の爲に存在するものは文學ばかりのやうに思はれ、天にも地にも代へ難いやうな愉樂を此文學から吸收する、人間が空想的になる、偏屈になる、獨斷的になる、沈默になる、周圍がつまらなくなる、もう斯うなつて來ると全然家庭とは別の人になつて了うので、初めに程好い處で、調和しなかつた爲め、家庭も一つの罪をつくり、本人も苦しいわけである、恐しい反動の力である。

只、文學物が何うしても趣味、感情の養成に資する處の多いのは言ふまでもないことで、全然是を入れなかつた日には、壁の上の花のやうに、血も色も、香も、生氣も無い人間ばかりになる、心の乾物は女に取つても、男に取つても、一種の不具であるから、何うしても文學は家庭に入れねばならぬ。

## 家庭に於ける詩歌

小說の外の詩歌に就いて、現在の家庭との關係を觀察するのに、之れ亦混沌たる狀態にある、元來我國の人間は存外歌ふべき國民であると思ふ、小說などになると一寸何處の家でも話題になると云ふ譯にも參りかねるが、短い韻文、乃ち俳句であるとか、和歌であるとか云ふものゝ方が家庭との關係は深い。新派舊派の別は暫く措いて、俳句及び和歌の勢力と云ふものは隨分廣い、何處の家の襖や掛物にも、俳句や和歌の一首位は貼附けてある、和歌に到りては「百人一首」の勢力と云ふものは決して侮るべからざるもので、古來幾百年、人の口から口に傳はつたと云ふことは、實に不思議の現象と云はなければならぬ、意味は分つても、分らないでも兎に角歌と稱ふものを尊重したのは事實だ、百人一首が此れ程の勢力となつたと共に俳句も亦勢力となつてゐる、只、俳句は男子の方、和歌は女子の方と云ふ傾向があつて、百人一首などは女子の習字の手本にもなり、嫁入道具にもなり、骨牌にもなり、實用的方面にまで影響してゐる、然うして其命脈を維いでゐる、或は文學的生命より、實用的生命の爲に存在してゐるやうにも見えるが、歌は歌に相違ないから、之が多くの女子の趣味の糧となつたことも少なからぬ

てあらう。歌と云ひ、俳句と云ひ、我家庭に深い關係があり、又尊重せられるものとすれば、此方面は家庭と調和し易いに相違ない、宮中には御歌所と云ふものがあつて、年々の新年御題に詠進する歌は實に萬を以て數へる程である、日本の歌は單り一家ばかりでなく、一國の詩歌を代表するもので、我が國歌として海外にまで歌はれてゐる「君が代」の唱歌も亦三十一文字の純粹の日本の歌である。

然るに大勢は進んで已まない、今の青春の男女の眼に映ずる詩歌は以上に言ふやうな和歌俳句の類ではない、矢張明治になつて新たに興つた詩歌其ものである、俳句にも新派があり、和歌にも新派があり、歌俳の外に新體詩がある、此等新派の興つて以來、歴史的のものは凡て舊派なる名の下に追々作る人が乏しくなつて來た、文學の問題でなくなつてきた、若い人は既う舊派の歌は作らない、處で此の新派の詩歌と、現在の家庭とが何う調和するかと云ふに、矢張調和しない、文學は單獨に或る一つだけ進歩するものでないから、新派の和歌俳句と云ふやうなものも、充分時代の感化を受けてゐる、否感化を受けると云ふより感化を與へて居ると云つた方が可い。

此新派の和歌（俳句よりは現在に於て若き女子に勢力を有する）と云ふものゝ起源が、甚だ極端であつた爲に一部の保守派、及び全舊派歌人に擯斥せられたが、今では新派の和歌も、偏して居ず、文藝の新勢力として動かすことの出來ない土臺を造つたから、今後は昔の家庭に和歌が深い關係を持つたやうに、新派も一般の家庭に歡ばれるやうになれば可いのであるが、速いやうて遲いものは文藝思想の傳播で、ある階段までは恐ろしい速さで新意義も擴まつてゆくけれど、それからさきになると容易に開拓が出來ない（之れも一に若い婦人の力で動かすより外に好い方法はあるまい、成る時期に達すれば屹度然うなるだらうと思はれるけれど、由來文學の事は複雜してゐるから何う變化するか分らない、兎に角、眼前では新派が刻々と多方面に行はれて行くに相違ない。

新體詩に就いては別に言ふ所があらう。

# 新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は乙種の規定に據る

## 地

### ○若き日に

四谷　河野槙

幼き日なりき。
日を受けて小き歡び輝かに
かたばみ咲ける徑ゆきて
見出てしかあゝ傷める小禽。
白き和毛は紅玉の雫する
其の小き胸、我胸にあてし瞬間
高き鼓動つたはりぬ
あな、紅の汚染鮮かに。
万象は今息をひそめて
在りし日の俤浮ぶる



白き日は靜かに照れり。
あゝ彼方、うれひ泣くヰオロンの
ひゞきに震ふる胸の扉
すきとほる籠の奥の奥に
美しき影、絶間なく
泝れ啼く。

幼きおもひ出に泣くと聞くと、人はあなたを三十ぐらゐの方と思うであらう、やつと其半分の年だと知つたらどんなに驚くか、このまゝですなほに育つて行つたらと思うと將來が待たれる。

## 秀逸

### ○火焔

若鮎

我が息の腐れるを目のあたり、我嗅
と嘆きしが、見よ脈を
音は沈み、心音もひそめきて、瞬くは
火の屑か、華かに
吾生きぬ、まさ目にも光見ぬ、と思ふ
たまゆらを火は靡く
魚鱗の光めき、燃さかる火のほてり



冥界よりや還りこし
生滅の大渦を照らす火を見恍けしが
きらゝかに、温かに
そが中にふとさやぐ白きかほ、藥盛る
みどり女がおぼろげに
大渦のたゞ中をひよめきし軀にも
さやさやと火に靡く

住所も姓名も書いてないから沒書にしようとしたが、嫌ひな詩だからさうしたと言はれるのも心外なのでかんにんする。見よ脈をといへば沈める音も心音も脈搏のとてであらう、さうすれば瞬、のは何の光か、作者は幻視の積りだらうけれど、見よ脈のとてもあらば兎に角、もとのままではさう受取れない「生滅の大渦」も奇怪だし「軀にも火になびく」も意味がとほらない。詩は必平明なれとはいはぬけれど、女のくせに氣取つた作はいけませんよ。

### ○合歡の花

岡山　青山和子

合歡の花が咲いて居る
咲いた合歡花、ねむり花
笑顔の坊やはねんねした。

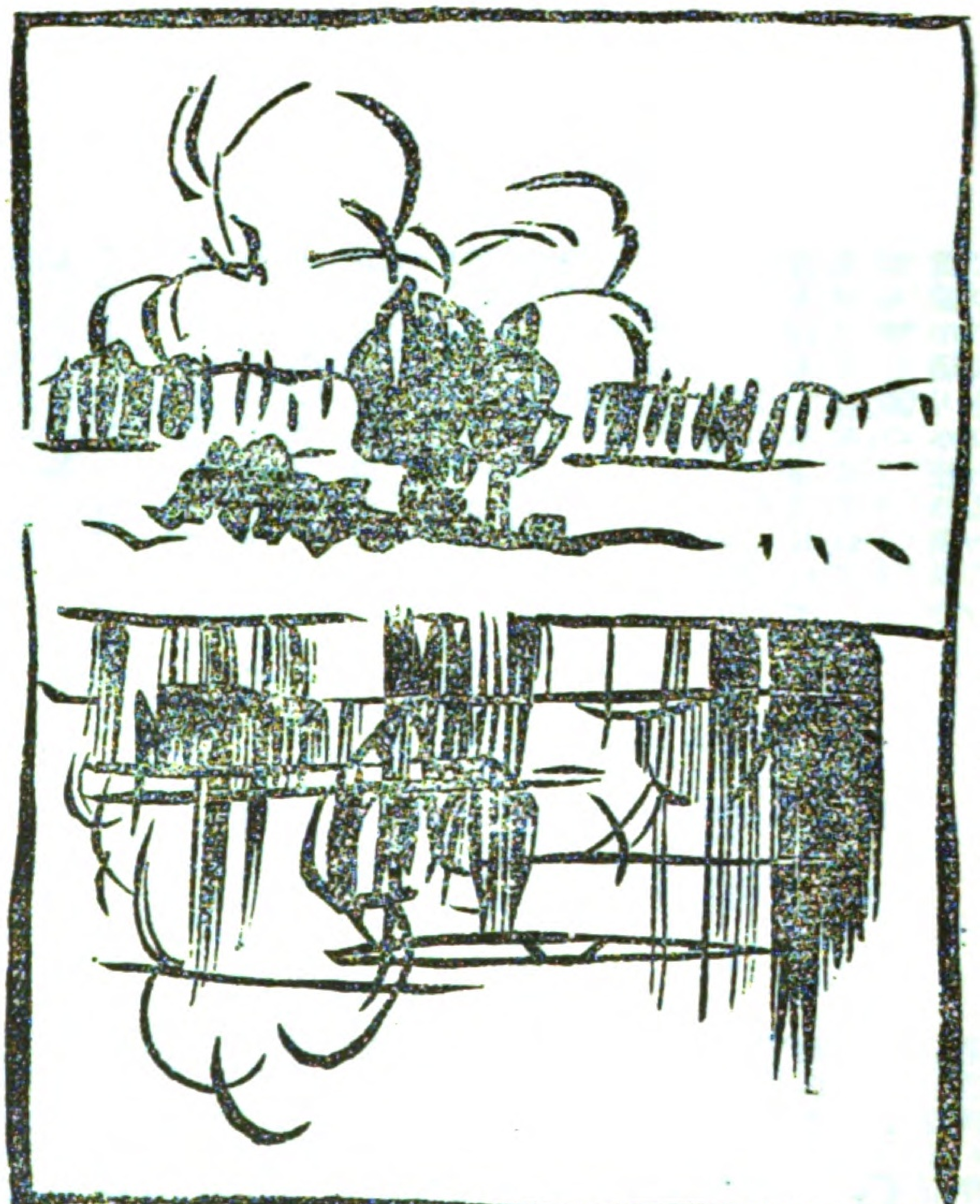
筬の拍子がトンカラコン
坊やはねんねせ合歡起きよ
起きた合歡には蝶が集る
ねむつた坊やの片笑窪
笑窪可愛い坊可愛い
をさの拍子がトンカラコン
坊やは覺めずに合歡起きよ

これは可愛い。坊ちやんをもつてる若い奥さんは羨しいと。

## ○はかなき身

北米羅府　合屋　岐子

ありし幼時を夢うつゝ
うつゝ心地のふと醒めて
瞼ひらけば目に殘る
影はしばしを漂ひて
かくてぞ消えて、うす暗き
室に横たふ妾ばかり。
病の熱のくるしさよ
人索むれど、硝窓の外に
みゆるは遙か月の影。
いて故國に病めばとて



## 雲の峰

陸奥　松尾千代子

忍べど泣くに誰が應ひ
ひゞくは遠き波の音
淚盈ちたる眼を張りて
妾に侍らむ、母君は
世になきものを天つ空
あゝ故里ならぬ死の國へ
母を尋ねてかへり行かばや。

布哇から上土井定子といふ方がよく詩をよこしたが、これはそれよりも遠い。母のあとを追うて死の國に到らんといふのだが、ちつとも悲しくないから困るけれど。

## ○跫音

近江國　辻　千代子

跫音しぬ——人や來らし
細路次の溝板ふみ
さながらに時をきざむ、
針の音の耳うつごと。
萬象の——沈める街、
小夜更けて人たづぬる
けはひ——そは音のゆるく
たゝずむか家の軒に。
たづぬれど探し得てか

たゆたひの跫音ちさく
近よりぬ板のひゞき
すは人のより來らし、
うつむける頸あげて
うかゞひぬものゝけはひ
ふと絕えしその跫音の
魅入るごと胸にひゞきて

神經過敏

○某夫人をいたむ

東京　瀨々かしこ

寂しき光は　しづみゆく
霞が浦の　浪の花
ちりてぞ消ゆる　黃昏の
葦に聲する　いざり舟

胸の痛みを　やしなふと
一人の吾子に　わかれ來て
實家のはし居の　あくがれに
春の若草　つゆ深く

流は消き　櫻川
かげろふもゆる　なかにして
うす紫の袖　匂ふ
少女の昔を　偲びつゝ
月波根おろし　肌寒み
やつれし母の　み情に
もろき淚の　したゝりて
ゆめは都に　かよひしか

一年なやむ　いたつきに
丈なす髮の　つや失せて
緣はあさき　新妻の
君はかへらず　なりにけり

○此思ひ

中澤やす川

いつよりか、
かゝる思ひを抽へけん
うつゝ心に我魂は
野をこそはしれ——
空なこそ君があたりな
はせめぐれ——。

かれはてし、
生命の清水掬ばんと
かしらをたれて行く水の
青きおもてを覗き見れば
うつろは醜の魂のかげ
からびし淚の、
我身の姿りな悟れ共
尙わすれ得ぬ此思い。

吁、灯をつけよ——
心には
寂しきやみの迫るのみ。
懸かへるかはたれ時の幽詳けさに
人故しつむ思ひとも
知らてか鐘のひくうなる。

○羨

山口縣　谷滿緒子

すばるの星の座の如く
田植う小女等あまたして
慰ひぬ。柳の下影に。
中のひとりはわれなれど
そぼれ私語めく幾人に
思もそはず——羨まし。
人に嫁げばなんのその
胸には秘むる戀もなく
人と樂しき話もなし。
かたみに築きし生華も
岸の柳の根の土の
くづるゝ如くはかなしや。
山ゆ淸水は流れてゝ
さ苗は小田にそだてども
溢流るる——われは捨苗

○小さきよろこび

丹後　中澤衣子

我お胸の——
うつろ木陰に響しいこひし
矛醜なる凶鳥は
終に巣くひぬ、
あゝえ堪へじよ

草の戦ぎに怖ぢ恐るゝ
我は少女子——十六の
もとより弱き性なれば
み胸に泣かむ人もあらで
夜の海邊の磯にたち、
黒づむ海の涯に見いでぬ
小さき幽けき美しき漁り火一つ
やさしき神のみ瞳の
愛に輝やくそれのごと
小さく幽かになつかしき
いざり火見ゆれ沖の小島に。

○病床吟

下谷　細谷けふ子

寛の神は紅の舌を吐きつ、
つと千みぬ郎の影に、
あなおそろしの様や、
覺きて見なほせば、
圓の灯影ゆら／＼と、
おぼろがに見ゆる君が姿、
さはなつかしき、
青春き血汐の燃ゆるがまゝに、
希望を胸にゑがきしぞ、
そはあだなりき、
頭垂れてほともらす吐息、
亂れしおくれ毛はら／＼と、
やつれし頬をなぶる、
あゝ今闇と光りの別れ路に、
ふら／＼とまよふはあはれ我魂、

○蝸牛

三河　森田春子

籠り居て　吾事思ふ
吾角は　よみの世にある
しこ鬼の　角にもあらず
変戀ふる　おぞの男鹿の
美しの　角にもあらず
其かみの　造化の主の
與へしを　唯有てるのみ

○雪

和歌山　木下美笑子

るりの宮大空を
みにまとふ白衣の
雪姫はたゞ二人
ゆふぐれの寒風に
ともなはれ降りしか。

朝日子の紅の
熱き頬のくちづけに
野に立ちし雪姫は
歡びに身も消えて
春草の芽は萌えぬ。

岩かげの暗闇に
のこされし雪姫は
ひとたびは消ゆる身を
啜かき光みて
墜をあびかなしみぬ。

○魂のいのち

伊豫　高橋しづ子

若き血潮にはなやぎし
我胸の圓眞夏日の
熱のいぶきに照らされて、
炎々と燃ゆる焰にやけ爛れ
朱の輝き色だみて
珍花姿み匂ひうせ——
かくて落日の沈みもゆけば

渦流に堕ちし戀草は
寄るべなきさに悶えの火
青き焰に燒かれつゝ
行衛も知らに流れ行く
涙のまに／＼——

ひた戀ふる故郷夢み
常闇の岩間ぬひつゝ漂へる
小さく冷たく幽かなる
魂のいのちよ—— 消えがてに
てらす螢の火に似たり。

○宮を拜す

紅ばら

人力車の響、
ツト直す身の居ずまゐ、
笑みと恐れの眼、
夢の如御美しき面に注ぐ、
只一瞬眼は直に土に、
耳は車聲をのみ、
今一度と眼上ぐれば、
あゝすでに、
御寫面わづかにかすみて、

双の眉羽重げ、
なつかしの眼注ぐ、
御待きの人々二十幾願、
はりつめし胸のゆるみに、
又一しきり、
御たたふる音楽かしましう、
一言毎に散りゆく人の群、

○遠き世

宗叔　川島ちつ

戛と鳴る劍の納音
跡の響追るとおもふ瞬間
金髪を捲き蹴る胡風に
若武者は跨る白の大駒を
汗にまみらせ白城の
朱反橋に立てば――窓ひく姿
鑾輪に似たる楊の暮
星のあえかの明眸に
きらめく冠
やさ笑に
紅薔薇そとかいやれば
蔦の蝶欄を辷りて汀に散りぬ
未明なり横笛の
衣曳く空に明星は
城樓の角をしかすめ
ぴかりぴかりと戀人の
瞳と燃ゆる殿の國
遠き世の騎士の古戀

○道に見ぬ

松城　齋藤もと

星まばらなる春の夜に
我祝ごとを道に見ぬ、
つゞく灯影のいと明う
行手の暗を開きつゝ。
今宵を晴の旅なれば
乘かけ駒に鞍置きし
昔の影はとめずとも
いづれ榮ある姿かな。
眉うつくしき人の面は
胸の想を頬にそめて
かざしの玉のゆらゆらと
ゆられて過ぎぬ嫁のきみ。

○磯邊に立ちて

磐城　山下修子

男波女波のむつれよる
松の磯邊のさまよひや
明星淡くまたたきて
ささべり紅き雲の
雲の帳のあやしきに
ゆれて靜かに明ぬれば
天の光のほのめきぬ
曉の潮湧く瀬戸の海
輝の黄金の漣波に
無限の幸をただよはせ
底の宮殿のたをやめは
平和の曲をかなでけり
あはれ夢よき島國よ
さめて鴎と舞へよ海。

○夕雲

青森　吉田はな子

まだ世になれぬ人妻の
人なき窓に身をよせて
少女さびすと朝夕に
とりしくしばのます鏡
挿頭の房むらさきの
にほひこぼれし前髪や。
うす紅の顔ばせに
夕べの雲のかゝりきて
うら若草のちからなく
おもひしなゆる袖の露。

○落日

張津　紫菫

行ひきよき老僧の
寂びたる禪に入る如く
靜にきしる落日の
殘る光りの白きかな。
闇に岑を望むとき
森は黒くもそびえたり
嶺なせる下艸は
風吹くなべになびきつゝ。
小艸の花の色あせて
蝶の羽袖もさびれけり

# お伽噺

嚴谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は乙種の規定に據る。

## 地　雨乞ひ

伊豆須崎　香芽子

昔むかし、天上國と云つて、天の河の流域に大きな國がありました、其の國と云つたらもう何處へ行つても、星の御殿が澤山に建てられて居て、立派なこと、譬へ樣もありません。

或る時、其の國の王樣が王子に種々と國の秘密を、お話しになりました、王子は生れつきお多喋の性質ですから、悉皆其の秘密を家來共に話してしまひました。

そこで王樣は非常に御立腹遊ばして「こんなお多喋の王子ては此の國の王位は繼げぬ、下界へ放下れ、」と家來共に命令をされましたから家來共は泣く／＼王子を下界へ棄てました。

何分天上界と下界の事てすから、世の中のことがすつかり變つて居ります、王子は棄てられて、「これはとんだ所へ來たものだ、これも私が惡かつたからのことだ」と斯う考へて居ります内に、日は暮れかゝる、お腹は空くけれど宿る蔭も食べるものもありません、「如何に御立腹なすつたからつてお父樣が、私をこんな憂き辛き下界へ下されて、こんなに私を苦ませるなんて、吁、お父樣が恨めしい」と涙を流してお父樣を恨むで泣て居りました。

寒い風がヒューと吹いて來て身が縮むほどに感じました、「吁なさけない、けれど皆私のお多喋故、國の秘密を人に聞かせたのが惡かつた、お父樣の御立腹なさるのも無理は無い」恨んではまた自分の惡い事を考へて、今の身と成つた事を諦めて居ました。

もうお腹が空いて堪りません、王子は四方を見廻しますと大きな草の葉がありますから其の蔭に宿つて露を甜めて居ることが殆ど一週間にもなると、王子は自分ながら驚くべき不思議な事が出來ました。

其は、今まで確然と五本あつた指が四本になつて、其の間に蹼が出來ました。そればかりてはありません體の全體が漸々と變つて、それは／＼見苦しい蛙の姿となつたのてあります、王子は「もう私は斯うなつては

到底も天上國へ歸ることは出來ない、これは神樣の御誡めだから何でもお多喋を止めなければならない。」と深く感じて多くの事を話さず、蚊や蚋などを食べ、草葉の露を吸つて暮して居ました。

さう致しますと、人も大さう感心して、

思ふこと云はずに居るか
ひきがへる

など〻歌ふ人さへ出て來ました。さて斯うなつて來ると世の中へ知れ渡るのも早いもので、此の事が地をお守りになる神樣の耳にも入りましたので、神樣は早速蛙の所をお訪ねになつて種々慰めて下すつた上「此の方の家來になつて人間の爲



めに盡さないか」と仰せられたものですから蛙は喜んで此の事をお受け致しました。そこで、若し地に日旱ばかりして民が困る時には、神樣が蛙にお云ひ付けになつて「ガー〳〵」と鳴かせます。天上國では此の聲を聞いて、元の王子が下界へ下つて、蛙といふ見苦しい體に成つてまで、自分の惡かつたことを悔いて、人民の爲にならうといふのは仲々感心なものだ。」と云つて、お父樣の王樣が家來共に命令して天の河の水を堰き止めて下界へ降らして下さるのです。皆さん蛙のお蔭で雨が降つて、田の作物でも、畑の作物でも善く出來るのですよ。

何と蛙は立派な履歴を持て居るものではありませんか。

（評）科學の意にもかなひお伽噺としても面白いと思ひます。

**秀逸**

## ○夢の姿

大阪　百田富美子

同じ人間に生れながら、何故に毎日〳〵遊びちらかして樂しんで行く人と、其日の生活にも苦しむ貧乏人との相違があるので御座いませう。

花子さんの家は、やはりその貧乏人の一つでした。

お父さんは茲に書くことの出來ない位な、いやしい職に就いておられます、お母さんは、やつと、人さまのお召物や洗ひ物を乞ひ集めて、縫はして貰ひ、洗はして貰つて、細い〳〵けむりを立てゝゐるのでした。

花子さんは今年七歳、普通の家の子供なら、可愛い盛りのお孃樣で、それ花見の、それ汐干狩のと遊びに日も足りない有樣でありますのに、可哀さうに、衣服といつては、いつも破れかゝつて、幾つと知れずボロの寄せ集めたやうなもの。まあ何としたことでせう。

それに花子さんには一人の姉さんが御座いました。眉のきりゝとした、それは美しい人でありましたが、如何なる魔物に見入られたのか、あたら花の十七を一期に、魂は遠く天の一方に散つて仕舞いました。

それが、花子さんには、どうしても〳〵忘れることが出來んのでありました。

毎朝、毎夜、必ずお父さんに敎へられた通り、東の空を眺めては、紅葉のやうな小さい手をヒタと合せて伏し拜むのでした。

やさしいルビーの樣な眼には、ポタリ、と露とも何とも云へない小さい泪があふれてゐるのです。

誰れが疑乎と見ておられませう。

あゝ姉さんは、今どうしておいでになりませう。

あの美しいむらさきの夕雲の中に、美しい愛の女神と手をとり合ひながら、玉の樣な聲で、淸い歌を唄つて居られるでせうか。

或る夜、花子さんは何心なく、ガバと床から起きて椽に立ちながら、眞暗な空を見ておりますと、あら不思議、黒い〳〵雲の間から、其一方が颯と開いて、銀色の幾つと知れない尊い光が、矢をいるやうに、眞一文字に、花子さんを照しました。

「アラッ！」と思はず叫びますと、

「おゝ、花ちやん――」それは、たしかに姉さんの聲です、懐しいなつかしい姉さんの聲でした。
「姉さんよ、姉さんの聲よ!」
と四邊を見廻しますと
ボーーと夢の樣に花子さんの眼の前に浮んだのが、ああ朝夕、伏し拜んだ姉さんの姿――。
「姉さんやう――」
ハタと抱き付かうとしますと、フワリと浮いて、姉さんの姿は、かき消すやうになくなつて仕舞ひました。
「わアーーッ」と其まゝ花子さんは倒れて泣き出しました、夢は醒めたのです。
あゝ夢でした。
もう、花子さんは夢の外には、姉さんに逢ふことは出來ないので御座います。
花子さんが、やがて十歳となり、二十歳となり、そしてお嫁に行つて、遂に白髪のお婆さんとなつた後にも、あの神々しい姉さんの姿は、其頭からはなれないてありませう。

(評) 友愛の情はよく表れて居ます、併しお伽噺としては何となく飽き足らぬ節も有るやうです。

## ○秋田源左衛門

名古屋　山田小葉

今は昔美濃國に古い〳〵松の大木が有りました、土地の人等は大松〳〵と云ふて、周圍八尺許り、高さと云ふたら皆さんの御家の高さの三倍位有りました。そして其葉はいつも〳〵大層繁つて、鳩や雀や鳶などが集を作りまして夕方になると四方から集まつて参りまして、チユー〳〵ガア〳〵と八釜しくて丁度御湯屋の大込みの樣な感じが致します。近頃此松の上に天狗樣が御宿りになつて、夕方過ぎから御出ましになつて、剛慢な人、親に不孝な者、虚を云ふ者、盗する者人に情をかけない者等をお捕へになるとて、近所では上を下への大騒ぎですから、もう子供等は、毎日〳〵ビク〳〵として、お父さんやお母さんのお云ひつけに背かず、大層音なしくなりました。又大人等ても自分は常日頃惡い了見を起さなかつたか知らん、と過ぎし昔をかへりみる者もある、中には又常に猫や犬や鶏等を虐待したが、吁もうこの樣な惡い事はやめます等と、生れ變つた樣にやさしい親切な人間になりました。此う云ふ樣に、話が一般に八釜敷なりましたから近邊のみなら

ず隣の國迄も皆知つてゐる樣になりました。此處に秋田源左衛門とて、大松から二里程隔つてゐる處に、一人の武士が有りました、平素剛慢な人で、何事につけても我程えらい者はない、自分程怜悧な者はないと云ふて少しでも家臣や、百姓たちに惡い事が有ると直ぐ、斬り捨て等して、殊に惡い／＼大名でした。先つ頃より大評判の大松の事件が源左衛門の耳に入りました、處が源左衛門は平素が平素ですから、ピクともしません、「何だ天狗奴があの大松に宿つて人をつかんで行く？ソンナ天狗位に捕へられる奴は皆フヌケ許りだ、我の樣に文武兩道にたけ、人々からもえらい御大名樣と尊まれてゐる者には決して手向はせない、よしや夕方散歩してゐても我を見たら直ぐに匿れてしまふ事は勿論だ、ヨシ／＼其樣な者今宵一つ、我の手なみを見せてやらうと大に高言を吐きつゝ夕方から二人の家臣を連れて、彼の大松の方へと出かけました。丁度冬の眞最中で今にも時雨が降る樣な空模樣松風の音がヒユー／＼となつてゐます。威張りに威張つて、源左衛門は、例の自慢を口にしつゝ大松の根元から凡そ二三間許り離れた所迄來ると、俄に、主人源左衛門の姿が見えざるより、二人の臣は大に驚き「さては天狗とやら申す御方の連れて行つたので有らうか、ヤー／＼御主人を失ふてどうして家へ歸れる者か、もう我等は明日の命が危ういぞ、」とブル／＼慄へ出して、歯の根も合はぬ樣になつた。さりとて、其儘歸る事も出來ないから、其處此處をさがしてみますと、遙か南方に「バタツ!!!」と聞えました、若しやと思ふて馳けつけて見ますと、果して源左衛門が、丁度蛙が地に投げつけられた樣に、腹這ひになつて、ウー／＼とうなつてゐました、家臣たちは何



もし／＼かめよ

紀伊　禰田こう子

は鬼もあれ先づ舘へと連れて歸りまして其理由を尋ねますと、「大きな體格の鼻の高い人間で兩方に翼のある人が、我を高い所へ連れて行つて、貴様は常に高慢して人を苦しめる惡人である、これから改心すれば免してやるけれども、今後倘するならば、重い〳〵罰を與へる、今日はこれで免してやるから、歸つたら直ぐに心を改めよ、と云ふて、何處とも分らない所へ投げ捨てられた」と恐る〳〵語りました。

其後源左衛門は大に改心して立派な大名にとりたてられました。

（評）これも其土地固有の口碑で御座いませう。

## ○七草ヶ原

京都　綿引眞砂

或る處に大層景色の能い原が在りました秋になると一面に芙蓉や桔梗や女郎花や撫子やさては薄かるかや等が生ひ茂つて其美麗な事は何ともたとへ樣が在りません。此土地の人達は七草ヶ原と稱て秋は皆なお辨當や瓢箪などを携げて見に行く位ですから他國から來た人はまあ何んて美しい原なのでしやうと賞そやし升てすから七草どもは何日も喜んで居ました。

或年の秋も七草は美しく咲き揃つて平和に日を送つて居ました。すると丁度八月の末の事或る日例も芙蓉の處へ遊びに來る蝶が平常に似ず心配相に來て云ふには「近い内に貴草方の身に取て大變な事が起ります。其れは外でもないのですが來月の一日か二日頃或惡戯者の大風が此原へやつて來て貴草達が中能して居るのを吹き倒して仕舞うと雨や雲まで中間にして其れは其れは恐しい相談をして居たのを私が聞ましたから急いでお知らせに來たのですと話ました。

芙蓉は此話に吃驚しました。

「よく御親切に知らせて下さいました。早速皆んなにも話して事を計らひませう。」と蝶に厚く禮を云つて別れました。其れから大急で廻狀を出して七草一同を呼び集めました。そこで芙蓉は、

「扨て今蝶から斯樣〳〵云ふ話を聞きましたが、何卒逃れる工夫は無いでしようか、皆さんのお考へを聞せて下さいと、云ひました。

けれども直ぐには誰も返事する者が在りません。其内に漸く年重な薄が立ち上つて頭を動かしながら

「私の考では大風が來ぬ樣に風の神とは兄弟の山神樣に願つて其樣惡戯をしないやうにして貰つたら如何ですと云ひますと、一同も其れが能いと云ふ事になり

其れと相談は定まりましたが、今度はお使ひに行く者が無いので困つて仕舞ました。すると芙蓉が、兎に「そんなら矢張あの蝶樣に頼む事に仕ましよう。角明日來たら私から頼んで見ますと、一先一同は別れました。

翌朝に成と蝶が來ましたから、芙蓉は山神樣へのお使をして呉と云ひますと、蝶は、暫く考へて居ましたが、私の羽て山の神樣の所まては少し難しいけれど平生から花の露を頂いて御恩に成つて居る私命の親の爲てす身を捨てゝも屹度遂行ませう、御安心なさつて下さい、日數もせまつて居る事なり今から直ぐに參りますと、羽音も輕く蝶は大空遙に見えなくなりました。

後に一同は蝶が受合て往つたけれど返事を聞くまては安心が出來ませんてした。其うちに容捨なく日數は經つていよ／＼明日はと云ふ夕暮、蝶は疲れ切つた容子て歸つて來ましたから、七草はより集つて一方は手當をし又一方は其後の成行を尋ねました。蝶は皆んなの介抱に一息ついて、彼れから急いて山の神樣の處へ往き其話をしましたら夫れは、能くない事だ屹度引留て出さない樣にするからと、引受て下さいましたから、御安心下さい、其のかはり私はもう貴草方のお傍へ來ることが出來なく成りました。と云ひ終ると、吹いてくる風にまぎれて、蔭も形も無くなつて仕舞ました。芙蓉を始一同は此有樣に僅な恩を忘れずに命を捨て自分等の爲に盡して呉れた蝶の赤心に涙を流して喜び且つ感心しました。



神戸女學校生徒の「ダンス、ライゲン」（大谷百枝子寄）

翌日は誠に申分のない上天氣てしたから、七草は大層喜んで蝶の爲に盛なお祭を致しました。其年の二百十日が穩だつたも全く此蝶のおかげださうてす。蝶は今ても天國の花園に樂く暮して居るてしよう。

（評）別に嶄新な節も御座いませんが子供にはなして聞かせるには時節柄よからうと思ひます。

立田[illegible]女[illegible]寄

# 新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずてきしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以內、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投稿締切は每月十五日、懸賞は乙種に據る。

地

## ○候と云ふ文字に就て

大坂市　はな子

候と云ふ文字を、根本から分解して説述したり、或は思想の發表を妨げ、趣旨の暢達を害ふから、書翰文實用文等に用ひては可とか不可とか、そんな六ケ敷學を述べるのではありません、齊昔からどの位の値を持つて居るものかを説くまてゞす。

貞丈雜記に恁ふ云ふ事が書いてあります、

「書狀に何々候と書く事、候の字は少しく敬ふ詞也、然る間下々へ申渡す文書などには、候と云ふ文字を用ひざる事なり、例ば可相心得候と云ふ事を、可相心得者也などゝ書くなり。」

是によりますと、候の文字は尊敬して書く場合になくてならないやに思ひます、昔から候文體が高位高官の人樣に捧る謹嚴な書翰には屹度用ひられてあるのを見ても分ります、極々親しいお友達の間ても、文意に尊敬を欠いてはならないと云ふ事は、誰ても存じて居る事てはありますが、一時の流行文字を追ふて、全文艶麗な形容詞て埋もれた手紙を書くと、什麽しても敬意を表す筈の候が、句切をする爲め態とらしく付加へた樣な感じがして、候の意味が極めて薄く響きます、尤も文意の切目に使ふのは當然てはありますが、候の本意義は敬意を表する方に七分の強みがあるかと思ひます、然し昔から一笑話として傳へられた、

『此の候まことの候には御座なく候、次の候が眞の候にて御座候。』の樣に、候の文字の共進會かと訝からるゝ樣な類は、敬意や文意の句切を圓滑にすると云ふよりも、むしろ滑稽と云ふ方が適當てしよふ、女の手紙には何れにしても、特別に大切な文字だらふと思ひます。

「候」と云ふ字の今まて使はれて來た意義は誠に仰せの通りてす、併し書簡文も今の樣ては將來此「候」が何うなるか甚だ疑はしいのてす（評）

人

## ○整容の一端

野村光子

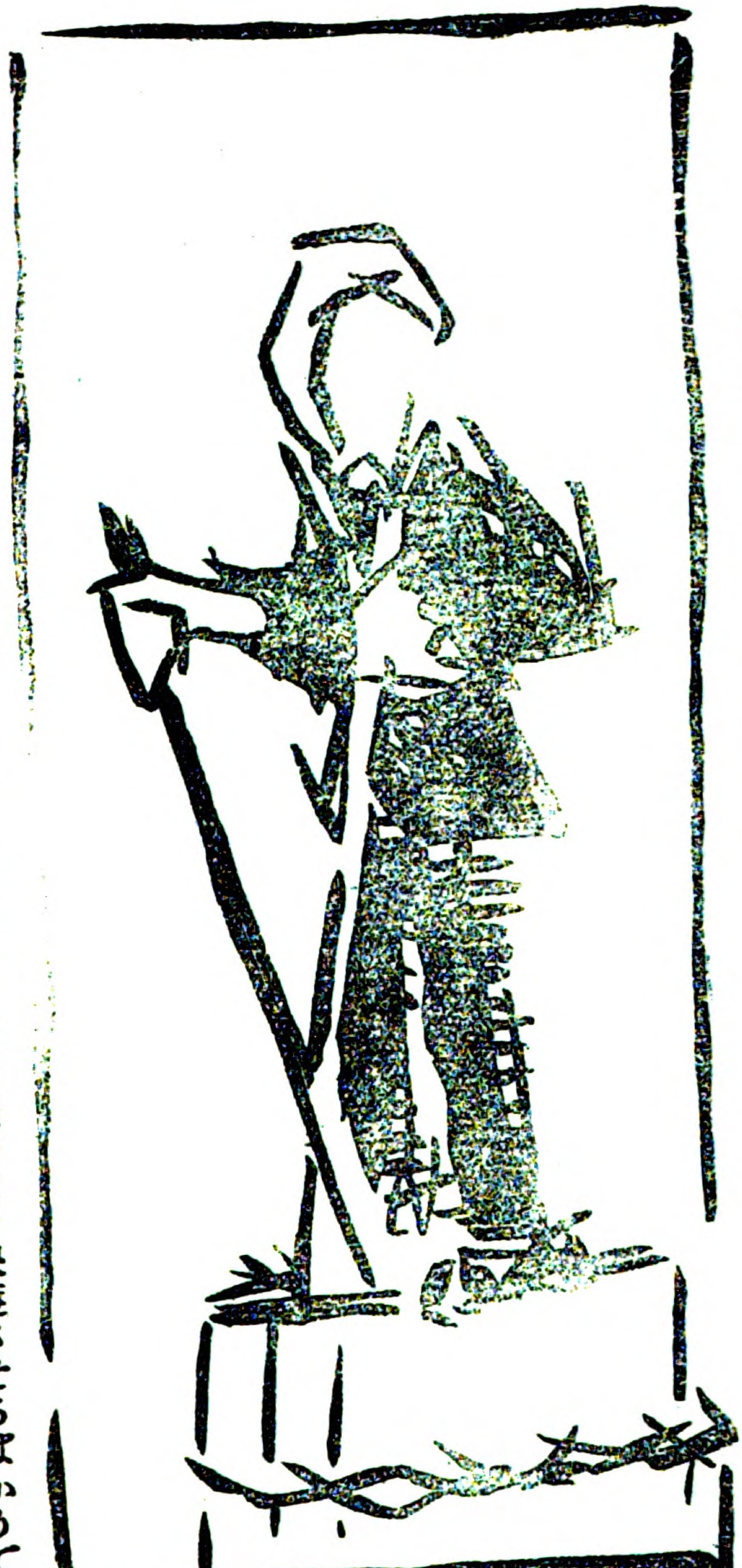
私は論文と申しましても難かしひ理屈を並べるのぢあございません唯感じました儘を些か皆樣の御參考までに申述べるに過ぎません極平凡な事を平凡な詞て申上るのてございます。

皆樣は御化粧を遊すてせう人々に依て華美な風姿を好

む御方もあれば質素な風を愛てらるゝ御方もあり濃さ淡さは皆樣の御自由にお託せ申し升が二度と返らぬ貴重な時間を消費して御粧りをなさつた御方の多くは前

芋あらひ

髪の恰好や御顔の極彩色簪やリボンの配合等は綿密に限なく御心遣ひ遊しても一寸まあ其御手を御覽遊せ白魚の樣な御指に生えて居る爪の御色を時に依れば塵が埋れても居りませうし長く延びても居りませうし第一に其爪に艶と言ふ者が御座いません眞白な御手に艶々しく薄紅の爪が有てこそひとしほ美しうも見られ升し晴れの場でお琴を調べ遊さうが活花を遊さうが何に依らず御手は御用ひ遊すものすれば其指先の爪を美しう遊すのも又一



つの美容法かと存じ升爪は何の爲に生え居るかと申せば勿論指先の肉を保護する爲に生えて居り升其品質は何から出來て居るか等は理科の先生に御託せ申すと致

栃木　栗原とみ子

しまして私は唯徒に指先の肉を保護させるばかりではなく進んで指の飾になる樣に致し度と存じます皆樣が御湯を召した後は爪が軟かうございい升から容易く切り取る事が出來升餘り切り去らず丸く指なりに切て其爪

の上を軟かひ皮か布かで磨擦致しますと美しひ艶が出て參り升毎朝五分なり十分なり爪の御化粧をなされば常に玉の様美しひ櫻色の爪となつて御自分のみならず他の人にも美感を與え升然し爪の御化粧の爲に特別時間を消失遊す要はございません皆様が窓に倚て美しい詩を思ひ遊す一時御手さえ明いて居りますれば何時でも出來る事でございませう中には私共は其様な酒落な眞似は出來ませんよ月に歌ひ花に醉ふ姫様達とは違ひ升終日畑いぢりを致す者にそんな事は不必要ですとおつしやる御方もお出遊しませう然し文明國の女子として社會に接する事の多い方達は容姿を整える以上は些細な點にも御注意遊し升様に私の經驗の一例を引ひたのでござい升

女子の爪の汚いのは如何にもみにくいものです、何もダイアの指環を光らすには及びませんが、自然の爪は磨いた方がよろしい、此論は細く氣がつけてあります（評）

**秀逸**

## ○想像のまゝ

松山市　芳　枝　子

今、私の頭の中にこうだらうか位て想像のついた方を書いて見ませう。それは寄稿家のくに子様に貞子様、それから田中久子様と太田さし女様の四人てす。

田中久子様は、御寫眞は拜見しましたけれども如何な性質でゐらつしやるやら一向わかりませんが只、女學校を卒業なすつてから、少くとも三年位ひは家にゐらつしやる方だらうと思ひます。

太田さし女様は、御自分がおつしやつた通り、よく信濃氣質をあらはしてゐられますが、お書きなさる事がくに子様より何處か可愛らしい所があります、ですから御年はきつと御若いてせう、くに子様より三ッ四ッ下てゐらつしやいませう、希くば御寫眞が拜見致したうございます。

貞子様、この方は、極圓滿てしかも女らしい方だと、思ひます、觀察眼が人にも増してするどいと云ふばかりて、境遇も今日まで別段變つたのでは無く普通の所にゐらつしやるのでせう。御挨拶等なさるのが大變御上手て、其の時にはいつもこぼれる様な笑顔をなさると想像します、そしておかしい時には人よりもよく御笑ひなすつて、そして何んとも云へぬなつかしい氣のする優しい方ではありますまいか。繼母位は持つてゐらつしやるてせうよ。

くに子様、此の方は御作を拜見しますと如何にもひねくれて、片方に偏した性質の様に思はれますが、心の底は決してさうてないと私は信んじます、矢張、普通

の女と同樣なのでせうが、外にあらはれる所が激しいのです、そして態度が如何にも、えらそうなのは爭そふ事は出來ますまい――と、これは私が思つた事を僞らず飾らず發表したのですから、御氣にさわつたら何卒御ゆるし下さいまし。

女子の批評は批評までがセンチメンタルです、またそれだけに、普通の批評と違つた面白い處があります(評)

## 木下操子樣に

遠江　貞　水

小豆畑の耕作が遲れたので草だらけになつて七月廿八日、暑い日の眞晝、兄樣と二人で酷い目に逢つて鍬でつゝいて草むしりをして、お茶漬に歸る家路「オ、暑い、今日は郵便が來ればいゝが」兄樣が「なんだつて」「雜誌、もう物言ふもけだるい。」家に這入つて見ると意外にも二册來て居た、一册は第九號でした、八月號を順々にめくつて見ると妾の文はあはれ沒書。新論文中に「再び田園生活を論ず」といふのが目に付いた、評が長いので何げなく見ると妾に關係があるので氣が氣ならず急いで讀んで見ると痛み入りました。妾は貴孃の論を反駁する積りではありません、妾は兩三度の投書が沒書になつたのでツイあんな物が出來ました、それが當撰にならうとは意外でした、妾も矢張人に中傷されたり反駁されたりすると焦氣する性分ですから平生の仕事も親の云ふ言も肯かない時があります、そんな着物は見苦しいからよせと云ふのを買つて來たり、父の股引を縫へと云ふのに兄の襦袢をたてたり、時としては冬など夜の一時迄も机に居る時があります。話が餘事にそれましたが田園生活は操子樣の御文が相當で妾の文は最下等の農民を論じたのです、商工業の發達につれ諸物價が高くなりそれにつれて上家の年貢が增したので妾の地方では小作人は農一方では迚もやれません。全くの小作人は十人に三人あるか無しですが是は農の傍竹細工か板店商賣、人のお使ひか日傭人に出ます、操子樣の言はるゝ通り勞働者は身體壯健です。健康が第一の最大快樂ですから田舍の者がハイカラとか氣取つて都會に移りたがるのは最も忌むべき事です、田畑に作物を仕付けて肥、耕作をなせば青々と益々大きくなり熟て賣る時こんな愉快はありますまい、おのが力で是だけにしたと思ふ所人にも見られるのが愉快である。何は兎もあれ文才ある御姉君、益々我女子文壇の爲に末永く奮つて投書しようではありませんか。御赦し下さい。

双方意志が疏通して何よりです(評)

### ○美の趣味

相模　野　島　里　子

洋服の時には、白いカラーを程よく出して、かけべき釦はかけ、靴は能くみがいてはく。和服の時には襟

を能く合せて、帯をきりつとしめ、羽織をきれば、紐を正しく結んで置く。そして、而も常にそれ等の衣服に垢をつけないで置く。かう云ふ人は衣服に對して美の趣味を解して居る人である。

三度の食事に用ふべき、食卓、椀、箸、皿、飯櫃、茶を飲む時に用ふべき、茶入、茶椀、盃、菓子皿、扨ては鐵瓶、火鉢、竈、水桶等に至るまで、飲食一切の器具を清潔にし、而も能く整頓して置く。かう云ふ人は飲食に對して美の趣味を解して居る人である。

外から見て美しく、内に入つて見ても能く掃除が屆いて居て、床の間や、本箱や、戸棚や、簞笥や、扨ては廊下から植込に至るまで、常に能く整頓して居る。かう云ふ家に住まつて居る人は、住居に對して美の趣味を解して居る人である。

衣、食、住、これ等の內、其の何れか一つに對して、美の趣味を解して居る人は多々ある。が然し、三者其の何れに對しても、美の趣味を解して居る人に至つては、曉の星を見るよりも少ない。敢て洒れよと云ふのではないが、日本の國民には、一般に美の趣味を解して居る人が少ない。國民全體が、衣食住に對して相當に美の趣味を解して居たら、どんなに美しい國家が成立されるであらう？私は再び云ふて置く。敢て洒れよと云ふのではない。否、洒れるのは極めて宜しくない。私は只、國民全體に涉つて、最も眞面目に、美の趣味を解してもらひたいのである。

### ○文士と畫家　　愛媛　松村　さみだれ

妾は小說界では幸田先生と尾崎先生畫界では橋本雅邦先生と川端玉章先生の四人が好である。

妾は常に思つて居ます、文士の露伴先生が畫家橋本先生となつて畫を書き雅邦先生が文士露伴先生となつて小說を書き。紅葉先生が玉章先生となつて畫を書き川端先生が文士となつて小說を書いて居られたと。

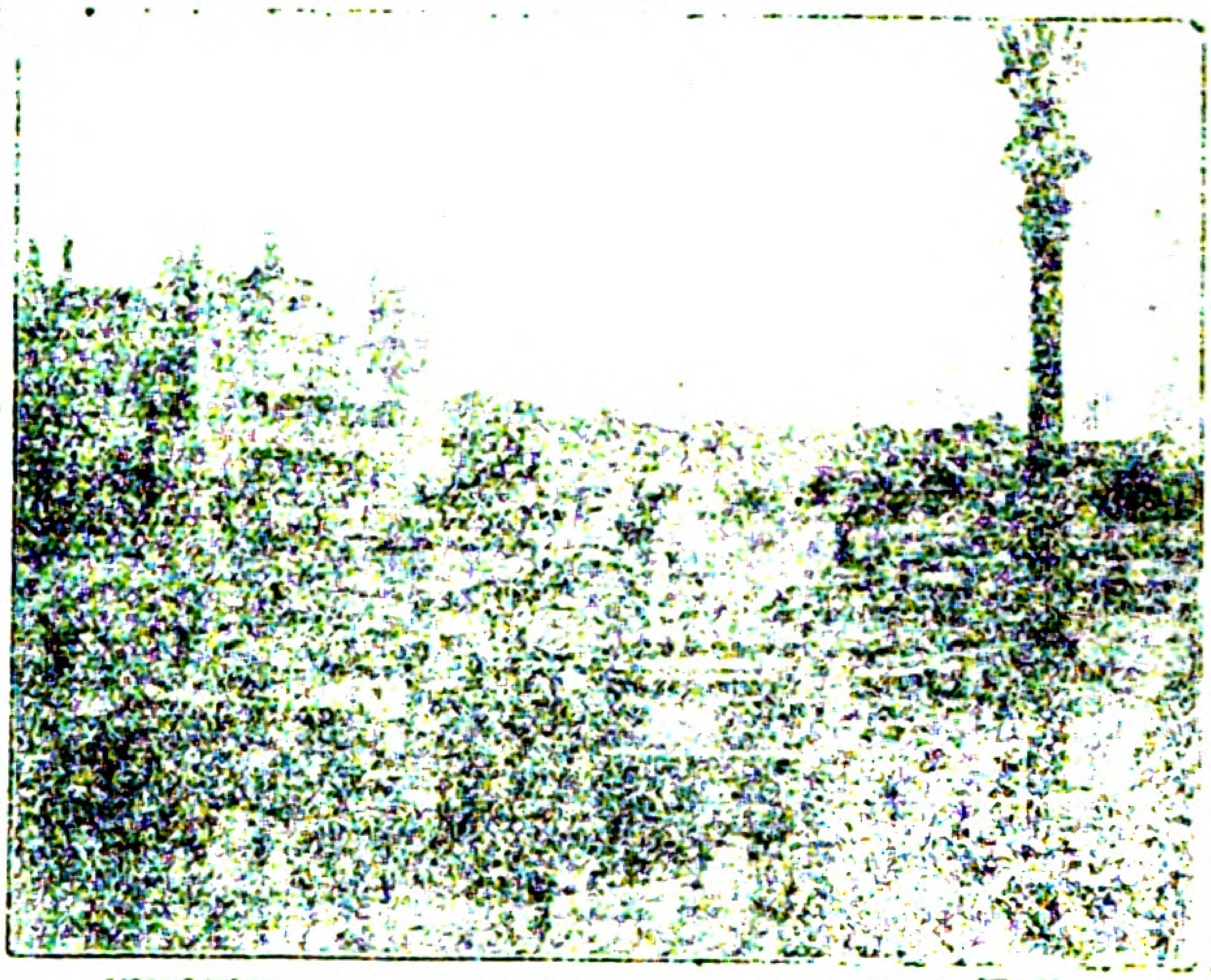
御覧なさい、幸田先生と橋本先生の作は、よく似て居るとは愚瓜二つ。又尾崎先生の作は川端先生に、ソックリです。前者は、男らしい中に、あつさりして居て眞に江戸兒です、後者は、女らしくつて、何だか、こつてりして、上方……京人の樣です。て幸田先生の文士としての夫人は尾崎先生、橋本先生は川端先生と御夫婦です、妾は今幸田、川端、兩先生に其連合を失はれた事を深く弔します。

### ○投書に就て　　大分縣　植田たか子

今日雜誌にて地方文士の文章を募集するもの、此女子文壇を初めとして、文章世界、秀才文壇等なか／＼澤山有りますが、又夫に投書する文士の數も非常に澤山有ります、斯の樣に文章を募集する雜誌の主旨は、新進文士の文章の上達を期するが目的で有るのです、懸賞は多數なる投書家の勵の爲めに課したもので有るのです、然るに現代の投書家は募集雜誌の主旨の如く、

果して自己が文章の上達を期し否練習する目的にて投書するので有らうか？實に疑わしいのです、否疑わしい所で無く事實は之に反對して、自己が文章練習の目的にて投書する者は實に少數にて殆んど數へる位の物でしよう、十中の八九は、或は僅なる懸賞品に迷ひ夫を得んとし、或は壹貳等に掲載され自分の名譽を得んとするものゝみでしよう、斯ふ言ふ人々に限り先輩の作を剽窃し盜用するのです、かゝる人の胸中には募集雑誌の主旨を忘れ唯何んでも彼でも壹貳等に當選し名譽を得んとするのみでしよう、名譽を得んとする心は實に好いですが、斯かる手段を弄して迄て名譽を得んとするは大に不可です、かゝる手段にて名譽を得たとてホンの一時的の名譽にて終には文壇から放逐される樣なあさましき運命と成るのです。

他の雑誌はいざ知らず、吾女子文壇の投書家はかゝる野卑な振舞をせずして光明正大なる自己獨力の作を投書して神聖なる女子文壇の體面をけがさゞらん事を願いたいのです。無學短才なる妾が斯んな事を言ふては實に先輩諸孃に恐入る次第ですけれ共一寸思ひのまゝを。



神戸オリエンタルホテル（栗原子寄）

○美なる罪は愛　日本橋　田代房尾

私は總て罪と云へば恐ろしく、愛と云へばやさしきものゝ樣思ふて居りました、此程漸く罪の内には美なものゝあることを氣付きました。夫の可愛らしい美代ちやんが、お化粧の水よと露の朝顔をゆすぶつて、傷なく萎らしたのも罪、又野薔薇が可愛と唇をあてゝ、一輪散らしたのも罪、落種の菜の花見付けた小蝶の行を、暖たゝかき春の風が妨げたのも罪ではありませんか、美代ちやんや春の風は、今深い〳〵罪を犯したのです。而し此美な罪が即ち愛なので、此愛がなかつたなら總ての美な物は情のないすげなきものとなり、丁度今を眺めの菜の花に、一羽の小蝶も通はぬと同じ樣です。それを花の爲めには吸魔とも思ふてしようが。黄金色や薄白色の愛らしき蝶の。舞ふを見てこそ吾々が目に菜の花の愛を增すので、此花を吸ひ取る魔となる罪の深かき小蝶が即ち愛の靈です。又咲き誇つた櫻に吹く嵐や、咲き亂れた海棠に降る雨は誠に惡むべきものですが之れも美なる罪で、即ち之れあればこそ花の情は一層深いので、花の見所も眞の

愛も茲にあるのです。私はあまり極端な云ひ樣ではないかと思ひますが、罪の美なるものは總て愛で美なる罪は愛の子だと思ひますの、さうすると或る御方はそれは愛が美であつて罪は美でないやはり罪は罪だと申されますけれども、假令ば美代ちやんが、薔薇が可愛と唇をあてゝ、一輪散らしたのはまさしく罪でしよう、其罪を私は何とも云へぬ程可愛らしく感ずるのですもの、勿論範圍の廣い愛が悉く罪だと云ふのではありません、美なる罪は愛だと云ふのです。今美なる罪と愛は體容の區別はなく同一だと云へば、聊か語弊があるかも知れませんけれど、斯樣なことは私が論ぜんとする主眼ではないので、私は只法律の制裁や、道德の苛責を受ける罪と、同じく罪の名を持ちながら、一はいまはしき罪一は美なる罪の、二つの分類あることを述べたばかりです。

### ○投書家と選者に就て

府下　滿子

進歩した活潑な今の教育を受けた女子が。悲觀的で寂寥の文字の多いのは誠に嘆かはしい事で有ます。之は皆樣御同感のことと存じます。……が復雜した人生の裏面を描くには是派の文字を全然文壇より斥けるといふとは如何でしやうか。花顔喃々美しき夢に醉ふ甘き乙女の樣な人。清溫なる理想の家庭に包容せられ得る人のみが身にも精神上にも些の迫害をうけずに匀々至善至誠の深い文字を書き連ねた作が生るゝ時世であるならば實に美しい現象では有ますが動搖の多い人世の波瀾の中に生活する以上は、何となくあきたらぬ物足りない感じが起らないでしやうか。世に敗れた人のインスピレエションに打たれた刹那の發作や、又は孤獨の寂寥を味ひ盡した人の書に小説美文は、たとへ事實でない作つた物にせよ、讀者に、强い感動を與へて、哀愁を胸に抱き煩ゆる人には、一時的にしても、却て慰藉を與へ得る事と信じます。私は別に道德上の問題に關係があるとは思はれないのです。寧之に依て人生の趣味ある一端が窺ひ得るではないでしやうか、私は決して哀傷的の事實、悲觀的の文字を歎ふのではありませんが人情の機微に觸れて滴り落る雫が漲り溢れて聲となり文となつた衒つた跡の見えぬ嫌味のない哀音嫋々と胸底に深く印象されて何とはなし作者其人の面影も偲ばるゝ樣な文章ならば生の深い意義の上から到底離れられぬ事として文壇から是等の文字を强てのぞきたいとは思ひません。のみならず作者が憂愁煩悶を訴て多少滿足を得るならば思ふ儘、心の叫びを書き表した其作を充分に汲み取て同情したいと思ひます。

私は先輩の方に對して反駁を試みやうなど思ふ心は、露ございません只、自分の思想を幼稚な筆で言ひあらはした丈ですから不惡お思召し遊すやう念じて居ります。

# 「新言葉の海」

**チヨイウ**〔女　優〕（俗人語）　女役者のこと、之を嫌ふ人と、恐れる人と、喜ぶ人とあり、是にならうとするものは女に限る、試験に卒業したるものを謂ふ

**イカニシテ**〔如何にして〕（雑誌語）　如何に多く雑誌記事の見出しの文句に使はる、如何にして美人となるべきや、如何にして玉の輿に乗るべきやの類なり、直譯語なるべし、初め實業之日本社にて盛んに用ゐしより、到る所に行はるゝ一つの熟語となれり

**サンタン**〔惨　憺〕（記者語）　專ら新聞記者の間に行はる、彼奴は惨憺たる生活をしてゐる、何うも惨憺たる雑踏だなどゝ云ふ、殆んど意味なし、其實何の惨憺たることなき場合にも、好んで之を用ゆ、話を大きくせん爲の道具なりとも云ふ

**デカダン**（學生語）　佛蘭西一派の詩人が思想より來る、破壊を意味し、自然を意味し、本能を意味す、自然主義と親類筋の言語なり、紳士淑女の間には通用せず、多く若手の書生に使はる、デカダンとは名詞なれども、デカル、デカラウなどゝ働かせて使ふものなり、何の意味とも解せず

**セイクワツ**〔生　活〕（一般語）　何處にも通用する便い言語なり、體裁の好い言語なれば上下一般に用ゐらる、借金で首が廻らぬと言へば不體裁なれど、生活が困難で苦しいと言へば、誰の前でも遠慮することなし、古く美的生活と言ふ言語の流行せしが、今は流行せず、其代りに日雇人の細君でも、生活が何うの斯うのと云ふ

**ゲンジツバクロノヒアイ**〔現實曝露の悲哀〕（評論語）　此熟語は長谷川天溪氏に起る、自然主義を論ずるに必要なり、天下の評論家は此語を盾として苦痛や壓迫や悲哀を現實の實相なりと叫ぶ、贊同するもの甚だ多し

**レイニクイチジヨ**〔靈肉一如〕（評論語）　佛教語と間違へるべからず、お經の文句には無き熟語なり、半獸主義の元祖岩野泡鳴氏等の唱へ出せし言語にして、靈魂も肉體も一つの如だと云ふこと、之も評論家の間には能く往復せらるゝ語なり

**シゼンシユギ**〔自然主義〕（文學語）　何の不思議もなき語なり、人間は自然の通りのものだと云ふこと、自然の通りを小説などに作つたものを自然主義の小説と謂ふ、世間一般に誤解するもの甚だ多し

**ハイカラ**（日本語）　もと英語なりしが轉化して日本語となり、三才の兒童も此の語を言ふに到れり、あの人はハイカラだと云ひ、あのリボンはハイカラだと云ひ、人にも、物にも凡て新式の流行に後れざるをハイカラと稱す、此語の分布全國に渉る

**バンカラ**（學生語）　ハイカラの反對に流行にも頓着せず、服粧など意に介さぬものを云ふ、バンは野蠻の蠻なるべし、又支那人のハイカラをチヤンカラと云ふ

**フルツテル**〔振つてる〕（東京語）　ふるつてるは振つてゐるなり、士氣大に振ふ、國運振ふなどの振ふに同じ、此袷はふるつてるじやないか、あの女の眼は實にふるつてるなど云ふ、意味は自由自在に動く、重寶な言語なりとして學生其他一般の男子に用ゐらる、あらふるつてゝよなど女學生の間などに用ゐらるゝやうになるかも知れず

**ニク**〔肉〕（作家語）　牛肉鶏肉にあらず、人間の肉なり、肉とは肉體の略語なり、彼の作は肉の描寫が多いとか、今度は肉を書いたとか、小説家などに言はれる、肉の描寫がうまいとか、肉を書くのはいけないとか批評家の間にも用語とせらる、勿論自然主義の系統に屬する新語なり

**ツウセツ**〔痛　切〕（學生語）　適當又は適切又は非常など云ふ場合に流用せらる、僕は痛切に戀を感じた、實に痛切に歌つてあるなど云ふ、多少文學語の氣味あり

**シン**〔眞〕（文學語）　眞實の眞、眞理の眞以上の眞を指す、人生の眞を描けとか、自然の眞を捉えよとか云ふ、甚だ捉え難きものなるが如し

**インシヤウ**〔印象〕（詩人語）　印はしるし、象はかたち、かたちをしるすこと、心のかたちも含む

**イツハル**〔僞はる〕（青年語）　眞の反對現實暴露せる事を云ふ、正直者を往々にいつはつてゐると云ふ、之と似てとらはれてゐると云ふ語あり、僞はつてゐるより稍罪の淺きものと認めらる

**ハツバイキンシ**〔發賣禁止〕（役人語）　雑誌や書物を政府に取上らるゝこと、取上られて吹聴すること

ポンツク生　戯作

# 俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は丙種の規定に據る。

兄君の門出の庭の櫻かな　福井縣　中谷文子
起されて返事も夢の火燵哉　安房　廣田やす子
冬籠り妻もなくして茶のうすき　相模國　鍋田美代子
歌思ふ窓にさしけり秋の月　よし子
孔明や秋風さむき三國志　靜岡縣　富永朗子
白萩のほろり〱と暮れにけり　大隅　石崎芳子
夕顔や戀はこゝにも哀れなり　伊勢　かすみ
秋めてゝ日向を好む翁哉　信濃　駒澤ひろ子
城外に韓人諷ふ月夜哉　隴中　黒澤美江
月一ッ水田に閉づる寒哉　安房　内木茂子
うら枯の野は平かに露白き　大坂市　山内溪子
菊畑の中に草刈る女哉　西多摩　森田しま子
落葉山村の詩人が通りけり　下總　越川津根子
露滋き萩起しけり朝の風　下野　守賀神芙蓉子
名月や丸き一盛の歌むしろ　南多摩　石井たま子
生垣に暮るればすだくきりぎりす　熊本縣　高根ちか子
美しき稲の穗なみの旭哉　千葉縣　石川はな

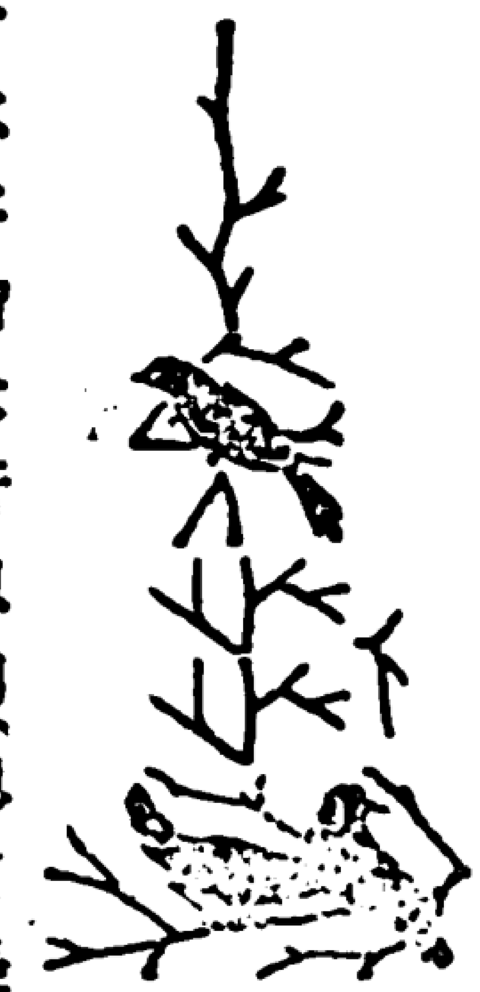
たのしげに稲刈る里の乙女かな　茨城縣　來栖かつ子
分け入ればよき寺のある茂り哉　栃木縣　岡本ゆき子
夏の日は靈相手に暮しけり　栃木縣　金田きん子
蝶一つ友を求めて秋の月　茨城　佐賀通子
吉野川小舟うかべて月見哉　大和　我澤素技
疲勞れてあける雨戸や雁の聲　靜岡縣　土屋いそ子
名月の湖を横ぎる小舟哉　下總　梶山芳枝子
稲負ふて歸る田圃の月清し　下總　秋山紅葉
白菊や[illegible]靜なる修學院　茨城縣　池田利子
後の月今道心を照らしけり　水戸市　小桃子
名月や畑を走る猫二匹　伊賀　岡花子
秋立つや鏡に動くものゝ影　相模　藤原下枝
秋の水白玉樓を廻りけり　相模　渡邉八重子
佳き日ぢやと語りあふなり菊畑　大分縣　田原秀
岩清水草の徑へ溢れけり　滋賀縣　森芳江
瀧音に寢さめにけり夏の宿　岡山縣　稲谷繁子
さ霧から花賣る女出て來る　奈良　清水雪軒女
馬つなぐべからず庭の紅葉哉　千葉縣　石田ふく子
張り替へし障子あかるき時雨かな　羽前　花なし草
秋雨や怪火燃ゆる馬捨場　横濱　草柳きぬ子
小娘の夕の化粧や萩の窓　神戸　安達絹子
三保の秋唄ゆかしさの窓の内　徳島縣　西野ひさし
菊咲くや金屏古き奥座敷　京都　堀尾ふみ
糸萩の障子にうつる月夜かな　備中　八重衣
月すみて美人を輝らす庭哉　京都市　武部柳栗女

涼しさは濱の眞砂に浪寄する　清國　中川喜久子
涼しさや塵を掃けば芝の浦　下野　高富梅子
雞頭の花奕しや凉　相模國　濱田結子
朝顔のつる面白し松の枝　稲井　小林紅梅
月澄みて野中の人の歌ひけり　水戸　岩田いさ
詩をよくす法師老いたり萩の寺　千葉縣　北田秀子
床の間に掛けて見事な稲穂かな　栃木縣　河田琁枝
蕃椒しろき山田の月や虫のこゑ　伊豫　曉子
酒買ふて船に棹さす月見かな　下總　越河菊野子
白露の中に佇む詩人哉　下總　梶山秋影女
さなきだに寒けき物を雨の萩　千葉縣　戸村みのる
夕月に米とぐ妹や萩の花　大津市　内田八千代
行秋の枯木に朽ちし草履哉　下野　宇賀神芙蓉子
行く秋を琴ひく指み痩せにけり　豐後　菅原義子
女文字の古りし名札や柳散る　札幌　篠原靜枝
逢坂て聞ばや駒の轡虫　群馬縣　小坂梢雫子
夕顔に君凉しさの端居かな　北海道　安川みのり
夏艸の深きを踏むや溜り水　大坂　大島ひちゑ
藤豆の風に鳴る夜や時鳥　近江國　梅女
菊の香の雨に動かぬ盛り哉　宮城　佐藤しげ
白萩のみ寺に集ふ子守唄　長野縣　唐澤喜惠女
木枯しの馬に別る峠かな　神戸市　大澤ゆかり
潮渡る風爽うして月一つ　神戸市　小沖ちどり
凉しさや家路忘れし橋の上　兵庫縣　橋きみ子
名月や階近く琵琶法師　千葉縣　三橋愛子

新涼の鏡に映る灯影かな　上總國　金子ふく子
我が耽た暇く野犬や秋の暮　千葉縣　村上鶴谿小史
初夏や帽子に輕き朝の風　尾道市　濱本よしの
拜領の松の青さに餘寒哉　牛込　高橋そと子
萩咲くや小さき山の麓より　五日市　並木蝶子
野の家や軒の下から萩の花　磐城　佐藤勝代
雨さくる峠の茶屋やほとゝぎす　芝區　高橋房子
清水汲む人去つて只野菊哉　山形　藤倉榮子
朝露や孝女は町へ花賣りに　大阪市　眞田露
山門をくゞればかなる苔のはな　阿波　中村かつ子
名月の縁先に茶を運びけり　上毛　淺香いよ女
笠敷いて秋野の夢やきりぎりす　西茨城　田村紫色
さす傘に紅葉ちるなり秋の風　滋賀縣　玉川女
雲低き二百十日の稲穂哉　矢名
朝顔の花一つ見ゆ垣の上　岩代　本岡咲子
讀みさしの夕顔の卷や火取虫　越後　藤原菊子
田植歌耳そば立る荷馬哉　長野縣　土屋くに子
野菊ちりて添水の音の力なき　大坂　梅女
短夜の後に高し星一つ　千葉縣　あい子
殘月や琵琶の音やめばほとゝぎす　北海道　龜吾さよ子
葵さく京の小家や歌合せ　安房　名無し
五月雨や格子に結ひし紙人形　大坂　若宮八正
狩衣に紅葉うつろふ夕日哉　駿河　勝又猫丸
欄に萩しがらむや丸木殿　大和　豐田晴子
子規塔の左手を過ぎにけり　備中　大西好子

# 短文

編輯局選



規定　十六字詰七行以內、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は丙種に據る。

## 地

### ○雲の色

岩手　つぼみ

私の村は、ほんの片田舍なもんてすから、同じ家や同じ人、同じ草木のみて、何時までも何時までも、變る事はありません。たゞ一日にも幾度となく變つて行くのは、雲の色ばかりであります。

刻々に變つてゆく都會に居りて雲の變るを知らぬ人あり

## 人

### ○思切つて

長岡市　白きく

姉様は文金の高島田、振袖姿でお嫁入りなさいました。妾は思切り輪の大きい銀杏返しに、サンゴの根かけ、帯も野百合鹿の子と黒繻子の腹合せ、千本よせの白デヤバラのシゴキで上げて、庭の松葉と枯すゝきを其まゝ織り込んだ、前かけを〆て行きますのよ。

一風も二風も變つたお嫁様、貰ひさうな人はありませんか

## 秀逸

### ○御叩頭草

大阪府　寺部君子

毎日も行く花屋に、おじぎ草と言ふて一寸さはると直ぐ葉を萎めて頭垂れる草が有りました、此れは又心が有るのかと葉の凋むのが面白さに、さはつて居りましたが。十日程して行きましたら、其草が枯れて居たので、何となく哀れに思ひました。

餘り觸れすぎて

### ○秋風

駿河　泉とし子

「お斷り！」と慳貪な聲を浴びせられて、門並に立つた瞽女は、遂々一軒も貰へず町端れに出た。日は全く山に隱れて、麓からだん〳〵暗い影が襲つて來る。颯と秋風が、よぼ〳〵した瞽女の裾を拂つかせて、背後から逐ふやうに吹いた。

文章がうまい

### ○幸福な私

品川　蕊子

卒業しても野卑な仕立屋へもやられず、高潔な裁縫の學校へ上つて人普以上充分に品物をあたへられ、而して隣家は西洋人、時もついやさずに英語も習へる好きな花も青い芝もてうして机にむかつて眺めながら……あゝなんて幸福な身でせう。

何うかつゞくやうに

### ○南風

若狭　汐汀女

ぶうーぼうーと數百の牛が一時に鳴く樣に吹いては家根を飛ばし立木を

折り向ふの神の山へ當つて居る、丁度今日で三日目、中々止みそうにもない、村人は青い顏して門に立つて居る、空の雲行はだん〳〵早くなるばかり

地方に大火あり

## ○晴鬪

靜岡縣　天野きん子

宅で先頃若い雌鷄を購ひまして從來の夫妻の裡へ放して置きました。さきの雄がもう年を老つたからであります。すると雄鷄の留守に老妻は嘴を鳴らして來ては新妻の背中を啄きます。その度新妻はクーッと苦しさうに啼きます。嗟一家の晴鬪、私は慄然としました。

實の見えないだけ人間は恐ろしい

## ○紙

堺津　みなしご

七夕樣には五色の紙、婚禮の目錄は奉書に限ります、優しきを好む御婦人方は水色又は淡紅色の色半切を、其御手紙にお使ひ、さゝます、淸國



まさこ路

大阪　今西こゆき

人はたいてい赤い紙、唐紙は主に書家に用ひられます、古い新聞紙は八百屋の袋に又裏長屋の壁にも貼られます。私等の使ふのには雁皮紙が一番好う御座います。

記者の机上には五錢入道の紙が散る

## ○芒

上野　大沼素女子

鞘を出かばかりの若い芒は、無邪氣な少女のやうて、優しう御座います靜かな秋風に其穗先が靡くのは、私のお友等が招く御手のやうて懷かしう御座います、ほをけてぼうつと白くみだれたのは、戀に病むお方が自暴自棄を起した姿と思はれて、大さう見ぐるしう御座います。

化けさうなぜあり、困りさうなぜあり

## ○私

本郷　朝井千とせ

弟達にはやかましい姉さんだ、と嫌はれ、他家の子には大好き、と嘉はれ、母樣には我儘者よと、叱から

れ、伯母樣にはおとなしい、と譽められ、友達には面白い方だ、と喜ばれ、先生は無邪氣な人よ、と可愛がつて下さいます。

記者はお友達と同意見

○古い友　　沼津　八代敦野

私古い友達に會ひまして目立つて氣の付く事がこれだけ有り升、先づ第一が何誰樣も美人になつた事と、次がお言葉使ひの大人びたのとそれからお世辭のお上手に成つたよ、と此三件て御座いますよ。

女てさへあれば美人にならぬものはない

○雜誌の記事　　奈良縣　中富よしみ

妾の家は極めて山奥てすから修驗者や探險家に假寢の宿を貸す事も度々てすが、先日ある雜誌で計らずも山家の一夜と題して挿繪まで添えた記事を讀んで非常に驚きましたが、更に記事の終りにある一少女の批評を讀む時、私の胸はあゝ如何ばかり躍り騷いだてしやう。

ほんたうてせう

○夢　　小野つかさ

一人は三尺の秋水スラリと私の胸へ突つけた、一人は其手に己が手を持添て力を籠てぐさとばかり、わが少さき胸に深手を負うては堪得ぬ苦悶！他の一人は靜に惱む私をかい抱いて藥を含んて痛める胸へ吹きかけた、勞れ果た心の眼は甦つた樣にぱつちりと……。

うなされた夢

○蟲の聲　　大津市　内田八千代

妾は如何な音樂よりも、松蟲や鈴蟲の聲が好きて、晝は一心に勉め、夜は此愛する音樂て、樂んで居ましたが、今夜は、破れた朝顏垣の蟲の聲が、大層しめつて居ます、冷たい露のためか、憂き秋を泣く涙のためかと、思はず心配しました。

細心な用意て鳴く虫を研究したら面白からう

○豆の食ひ方　　備後　小林つね

兄さんは豆が大好てすて、私の內には、煎つた豆をきらした事はありません、兄さんは、勉強して氣がつきると、箱のふたに、一ぱい、だして、東の窓の敷居へのせて外を見ながら、皮もむかないていつても始からなくなるまで撰りより御あがりにます。

○心がけ　　上總　秋葉美也子

私、女子文壇を拜見するようになつてからは、道ばたの草花を見ては一寸した、新體詩を作つたり。又、小供が樂しげに遊んで居るのを見ては、お伽噺など考へるようになりました。これもみな女子文壇のお影だと思ふとうれしくてなりません。

○冥想　　布哇　上土井定子

終日の勞を慰せんとて寢臺の上に體を轉し蚊帳の天井を仰いて想を胸中にえがく眠はいつしか閉ぢられて夢の如く現の如し泡の如き想は過去

にかえり未來を案じて喜悲交々至る折しも風の戸を叩く音に驚きハツト目を開けば机上に洋燈細く光つて置時計の命を刻む淋しき響

○唯子さん

府下　山脇数子

平素沈み勝ちなる唯子さんが今日は何だかいやにそはそはしてゐる、又例の山下様がお娟立なすつたのであらう。それかあらぬか、夕方より一寸散歩して來ますと風琴携て出て往つたはよけれど、やがて眞青な顔して門口へ轉込むを聞けば『妾今犬に吠えられて……權現の坂て』。

○夏の夜

水戸　重子

まあ好い月だ事、そつとお琴を取出して、京の四季を彈いた、今宵は何時もの私てなく、聲もはつきりとして、何とも云へぬ心地がして、自分ながら、恍惚として、打水涼しき庭を眺めた、

○望み

函井縣　池上小芳

いつも夕方の空を眺めると、こんな事を思ふ。景しも無い海原に、紅く色づいた楓て自然の家を作り、自分は白の絹に身をつゝみ、黒髪をメツとたれて、幾百とも數知れぬ、小鳥を飼つて周圍に草花を集めて、人の聲も聞かず年も取らずに暮したいと。

○十月

立田郷



君代　木内雪子

私は十月と云ふ言葉を聞くと。糸を繰る様に思ひ出されます。生れたのが十月四日。運動會て一等をとつたのも。柿の木から落ちて大怪我をしたのも。祖母様が亡くなつのも。皆十月てした。今年の十月には姉さまが美代ちやんを連れて里歸りします。

○秋日和

長門　新田泰子

秋晴れの好い日和、妾は襷掛けてセツセツと洗ひ張りをしてゐると、其處にもこゝにもユラユラと秋の陽炎が燃えてゐる。何處からか紅の楓の一葉がヒラヒラと飛んて來た。井戸端の茗荷畑て唐突に雄鷄がバタバタと羽搏きして空に長く高く閧を作つた。

○思出て

和歌山縣　谷田峰子

そこゝに、蕨を取る子供の群を思出した、山鳩の啼く聲み思出した、其時は心地のよい風が、鈴蘭の花を渡つて初夏の空氣を匂はせたことも思出した。

○朝顔

大阪市　川上涼子

朝早くをきてえん先にいつて御庭を見ますと青葉の間よりちらほらと紫赤白などの朝顔がきれいに咲いて居ます其花の上には白露をやどして居ます、見ればみる程美しくて愛らしいとこが有ます私は毎朝早くをきてこの愛らしい朝顔をみて楽しく暑い夏をしのいてをるのです。

○驟雨

高知市　伊野龍

妙な雲が來たと思ふ間に降出した雨、夕立にすると時候が遅れて居る、時雨にすれば早いなどゝ空を見て居る内に烈くなつた、兄様が裸て風呂の屋根をするやら私が傘をきせ掛るやらして漸く出來上つた時分には日が雲間から笑つてゐました。

○嫌ひな人とすきな事

森町　惠女

私のきらいな人は雑巾をしまにかける人と、口をつぼめて笑ふ人てす。すきな事は小川へ行つて妙子と笹舟を流して遊ぶ事と、ホロホロとこほろぎのなく時裁物をする事、それから寒中朝早く起きてヒヤリとする着物をひつかけ、手ばやくたすきをかけ手拭を被りおしりをからげてバタバタとおそうじにとりかゝる事てす。

○夜の停車場

沼津　加藤つる子

一點の燈火は暗から暗を縫ふて早や我が前に停車しぬ乗る客降る客新聞辨當の賣子の聲燈火を手にせる驛夫機關車の煙を吐く音忽ち雑沓の蕃を現はしぬ

○讀書

上總　金井菱花子

私は、春は緑兒の眠れるが如き野山を眺めて、夏は、銀の露を宿してゐる野邊に行き新鮮なる空氣を吸つて、秋は、枯れかゝる草原を散歩して冬は冷水でお顔を洗ひ心を清めて、そろ〳〵讀書に取掛るのです。

## ○秋の夜

東京　菫子

私はついと通り越して前の堤に走りました。今日は何時になく月が水の如に澄んで御濠に映るんです。有るかない風に小波が立つて水銀の様に何個にも砕け眼も眩みそう。遠い電車の響き電柱の長い影私は眼の行くまゝに、すると哀れな悲しい虫の聲がしました。

## ○電車中

澁谷　柳雪

年寄だからかまはないと云つた様な顔をして、たつた二三寸の處へ尻もみする婆さんと、我儕は帝國軍人でござるといふ様に横柄な顔して込んでいやうが、いさい、かまわず二人分も足をひろげて腰かける猿武者軍人。

## ○私の響

福岡　菊の露

私が井戸傍でお米をといて居るとお隣りの照ちやんが竹垣の外から「アラ小母しやん蜻蛉の番婁に遣はさいな」「何處に御座すな」「小母しやんの頭に!!」「そう?」と頭に手をあげましたら其拍子に蜻蛉はツーと飛んで行つて仕舞つた。

## ○夜半

盛岡　四戸節子

柱時計は一時を打つた、それに私は一寸も眠くない何うしてだらう。母さんはうんと寝がえりなさつた、と啼つて行く雁の聲する。秋の胸は蜘蛛が糸を吐く様に、空想を繰りだすばかり。

## ○少さき柩

下野　下河邊なみ子

若きみ僧の讀經の聲の寂しく。香煙のゆら〳〵と昇るみ佛の堂に白き布におほはれた少さき柩。それは露ちやんの柩である。母の涙、姉の涙、もうなんの甲斐もない、たゞ露ちやんは安らかに、永久の眠について覺めないのである。

## ○空想

美濃　美沙子

晴れ渡つた月の夜、御空に白く流れて居るあの、天の川に舟浮べて天女の樂と、弟の明笛と、妾のハーモニカと合奏したらどのような、韻がするでしよう。

## ○いちぢく

宇都宮　文女

去年は十一しかならなかつた無果花が今年は二十三なりました、こうして年々増えて行くのでせうが、それと共もに私達もだん〳〵年をとるのです、無果花の實の様にだん〳〵増えて行くとよいのですけど——去年は母様に亡父様を失ひました。

## ○鶏の聲

下總　越川津根子

私は毎日朝の一番鶏が啼くと目を覚し、二番鶏が啼いてから起きます。晝間は何時でも鶏は啼くが時に十時に一度十二時に一度宛は必と喧しく四方にて啼くので、二度目に啼く時は晝の仕度、塒に這入れば夕飯の仕度をします。

## ○白と黒

磐城　佐藤勝代

妾の方は　炭礦業なもんだから毎朝毎夕眞黒な土人の様な坑夫がぞろ〳〵妾の前を通るのです、又役人の奥さんなんか毎日たいくつて顔のお化粧ばかりして居るのです、兩方の　お顔から、からだなどくらべると、まるで雪と墨の様です。

## ○乾草

美作　性全みね代

私は田舍の百姓娘、お母様にお辨當をして頂いて朝早くから可愛ゆい乳牛と奥山へ草刈に行くの、牛は木陰に放つておいて私は精出して青草を刈りては乾し刈りては乾して晝過ぐる頃集めて六つの束とし牛の背に負けて夕方歸るのです夏の中は斯うして冬の間牛の食べる乾草を作るのが妾の務めてす。

# 學校生活

## 人

### ○卒業式

東京芝區琴平町二　廣瀬多美子

今式が終りましたので皆樣が喜しさうに證書を持て御歸りになります私等卒業生十二名は何となく學校が去り難くて皆云ひ合せた樣に敎室に集りましたそして御互に淚さへ浮べて「相變らずにね」などの言葉を繰り返して居ります、あゝも一度卒業式を樂む身に成りたい。

### ○可愛い子

岡山縣　岡　千鶴子

妾は、今年の四月から、村の學校へ勤めることゝなつて、目下尋常一年を受持して居ます。左樣生徒は五十一名許りです。皆可愛い子のみでしてれ、この間もこんな事がありました。竹田三郎と云ふ子が、授業中に、物も云はず一目散に走り出かけるのです。『どうしたのですか？』と妾お尋ねまするると、『小便に行くのだ』と、云うのであります。其時、妾は思ふたのです。天眞爛漫な三郎さんが、いつまでもこの心をもつて欲しいと。

### ○造　花

福島縣　都市麻女

私の學校は技藝の重なる學校ですから、生徒は一心に技藝をはげんで居ります、ことに製り上げた造花の時間には各の机の上には美しい花が生花のやうに咲きそろい、ベルがなつて先生がまとめて持つて行かるゝ時にはほんとうの花でないかとうたがはれます、このやうにして出來上つた花は開きもせず散りもせず永久に我居間の机の上に咲いて居ります。

### ○裁　縫

麻布　澤　子

私は裁縫の學校へ參ります、先生はお優しい親切な方で丁寧に敎へて下さいます、十五六から二十五六位の方や中には奧樣の方もお出です、そして每朝運針の競走を致し勝た方には丸が澤山に付き負た方はお當番をさせられます。

### ○土　手

伊豫　井上いち子

私の通つた小學校の運動場に並んで池がおります。日本地理の時間に土手にかけ登つて、瀨戶內海へ向ひて列を作り、遙かの島を眺めるのでした、先生は地理書を開いて、此北は播磨あたり、こちらは北海道、あちらは九州、臺灣迄も指さゝれて敎へて下さいます。閑かな見晴しにお話し聞く生徒の胸はすが〳〵しくなりまして國の位置などは敎室で敎はるのより覺え易ふて、よくわかるのであります、そして休み時間の時や、遊戲の時などは實によいのです。學校の實を還る時は嬉しいので、わざ〳〵登つて行く事があります。

### ○英　語

土佐　初　雪

私の學校は今年より英語が加はりましたがあまり急で皆おぼへが惡しく英語と日本語とまぜなどして隨分お可笑しい事もありましたが其でも先生は熱心に敎へて下さいますから私等も自然勵み今では大分覺えてまいりました。

### ○樂しみ

山口縣　村尾きよ子

私の學校では每日曜に、七十名の生徒が集つて色々珍らしいお料理の稽古をするのです、其れを晩には、御馳走になりますのよ。此れが私等の何よりの樂みですわ。

### ○二人の女敎師

三河　富美子

私の村の學校に、女の敎師が二人有ります。一人のお方は器量も宜う御座い升が、其れは〳〵優しいお方で、私なぞ見たいな醜い女でも、畑へ行く折なぞに、逢て行き合ひ升と、屹度言葉を掛けてお行きなされ升が、外の一人のお方は餘り器量も能くない癖に、私は敎師で御座い升と云つた風に、ツンと澄まして誰にも口をお掛けなさらないから、大層評判が惡う御座い升。

# 新歌謡

編輯局選



▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謡と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は丙種送呈

**地**

○橋はあざやか七色なれど虹は不思議に渡られぬ　大阪　天花

渡られぬが眞

**人**

○河原撫子一輪摘んで月の光で胸にさす　群馬縣　淸水貞子

月一輪、花一輪

**秀逸**

○音に名高い伊豫簾の竹をわたしや筏で下します　伊豫　曉子

○此宵十五夜うさぎに乘つて私しやゆきたひ月の世へ　越後　佐藤浪子

○桔梗笠きる松蟲姫は萩の雫が冷たさう　大津市　内田八千代

○肥後で名高ひ菊池の櫻秋も咲きます返り咲き　熊本縣　高根ちか

○私の身の上書かれた樣で本を見ながら袖ぬらす　呉市　碓井淸浪

○垣の朝顏若しなるならば思ふあさぎに咲かせたい　福島縣　岡崎白子

---

○世にも名高い吉野の川で妾しや毎朝顏洗ふ　大和　我澤秀水

○姉さん御らんよ桔梗の花に萩がこぼれてとまつてる　長野縣　山越悦子

○なんの氣なしに開いた文庫底にかくした歌の卷　若狹　浮戀子

○たつた一人の母さま捨てゝ何で出られよう學問に　備後　土井澄江

○淸水で名高い葛飾郡乳母の在所よ百合がさく　大阪　若宮八重

○夏の神樣青葉の山に雲のつり床召しまする　信濃　太田黄葉女

○加茂の川風袂に受けて京の四條で涼みたい　大阪　鹿島あや子

○花がなくなりや青葉のかげで彈いて見ませうヴアイオリン　上毛　秦女子

○テニスする子のおさげの髮に蝶かりボンかひら〳〵と　秋田縣　佐々木良子

○うれしかつたよ女子文壇の記者になつてる夢をみた　南葛飾　松操子

○青海神社の祭りは五月七里四方から見に來ます　越後　嬬久子

下總　三森ゆき

鼓瑟の母からとゞいた絵状さぐれば氣に當る　○　信濃　駒澤ひろ子

天津月姫髪結ふた櫛を忘れ置いたか三日の月　○　奈良縣　西田鶴子

おなじ事なら都の土地て樂しいホームをつくりたい　○　大連市　林　正

四十五年の博覧會にみんな行こことて霊かふ　○　布哇　上土井定子

布哇入島の名所を問はゞ緑滴る甘蔗畑　○　信濃　岸　波子

暮て美くし五色の雲はほんによく似た世界地圖　○　滋賀縣　姫ゆり

十一郡を周圍に從いて中に大きな琵琶のうみ　○　山口　酒向とし子

ぎおん祭りもしうすみましたこれから待つのは星まつり　○　滋賀縣　松　露

お傭断を讃で寝た時にやいつも天女の夢を見る　○　日本橋　吉田さく

乙女可愛や手にもつ花を袖てかばうてかさをさす　○　丹後　神田春子

凉し夜風に袖なぶらせて橋に笛吹く宵の月　○　日向　かう子

可愛い少女よみのかさかぶりザンザ雨にも田草とる　○　茨城縣　齋藤元子

夏の舞姫緑羅つけて緋扇もつたか花葵　○　韓國　原登里子

好きな着物を見るなと醫者に禁じられたらなほ見たい　○　山城　中林露子

わしの妹は女の盛り對ふ鏡は濃化粧に　○　失　名

夢は十三三昧線三筋私のむは一筋に

鉢に植たる茄子の花に止まりましたよ胡蝶　○　本郷　千とせ

歸省した時や母様までお大きくなつたと出て向ふ　○　水戸市　北村さくら

國は越後と問くさへ懸し賀もなつかし松前節　○　東京府　原島静子

明日は姉さん嫁入る日だに恥かしいとて誰にもあはぬ　○　佐賀縣　田尻みつ子

湯あみすまして庭さきに出て若葉越しに聞くヴアイオリン　○　兵庫　松井たま

出して見たいが出しても駄目だと思ひながらもこの歌を　○　熊本市　近野春子

風よ吹け〳〵花嫁様の笠を卷き上げ顏見たや　○　備後　楢月

直そ〳〵と思ひはするが思ふ中からオラヤンダ　○　仙臺　仙臺旗
註、オラヤンダは私いやてすの方言

可愛い胡蝶よ御前も一人私も一人の荒野原　○　三重縣　小貝よね

少女可愛や絣襷かけて小雨ふる夜も蠶飼　○　若狹　津田汐汀女

今朝も咲たよ垣根の花が國の妹に送りたい　○　澁谷　益美留里子

月の女神の情けに咲いた朝顔しをらす日の男神　○　仙臺市　齋藤富美江子

緋の團扇で招いて見たい三笠山出た夏の月　○　山口縣　吉田美代子

妾しや二十六未だ緣がない鬼も十七蛇も二十　○　下野　小林歌子

田草終りて嬉しい盆の浴衣着る日もはや過ぎた　○　安藝　谷岡の白梅

# 文壇餘興



課題　髪　小説談　果實

## 髪（課題）

【天】○母様の御恩

下關市本町吉見山下　愛子

母様のお腹から出た時は、薄い赤い毛、やつとのびて黒くなつた頃は、泣いてすねて母様を困らした、おかつぱになつて、蜻蛉の樣なおさげに結つて笑はれた事もある、苦情ばかり云つてた桃割も流行の束髪に變つた今、一人で束ねたのを御覧なすつては、賞めて下さる戀しい母様、私は髪結ふ度に此樣にのび揃ふ迄と幼い昔を思ひ出しては、御恩の深い事を一層感じます。

「一人で束ねたのを御覧なすつて」と云ふ一句が畫龍點睛

【地】○髪の來歷

岐阜市　篠田とみ子

ぐずぐず言ふなら己が結つてやらうと尋常三年生の時、父上がグサグサの男髷に結ふて下したのが心地惡うて怒り廻つた末、一人で髪を結ひました以來、よそへ行くとてお稚兒に三度、近くは知り合ひの慶事の時島田髷に二度、其外に人手を煩はした事はありませんが、束髪の流行らん前は隨分へんてこな蝶々等に結つて喜びましたものです、今でも一時間懸れば總分の銀杏返し位には手がたるみません、でも大方は束髪で居ります。

一人で結ふやうになつた動機が面白い。

【人】○アイノ兒？

京城　ゆかり

私は幼い時から大變赤毛でありました、京城にまゐりまして八つの年洋服を着て和城臺に、お友達と夕涼みにまゐりました時、日本の兵隊さんが「孃ちやんあなた日本語おわかりですか」つて尋ねられたことがありました、大方髪が赤くて洋服を着て居たので、あいの兒だと思はれたん

だつて大變笑はれたことがありました、それで母が大へん心配して、よく手入をして下さいましたので、髪に何一つ出來たこともなく只今では日本人の様な毛色になりました、私は母様に御禮を申さねばなりません。

場所がかわつてゐる。

## 秀逸

### ○袴に島田　京都　綿引眞砂

お母様は妾の頭をつくづく御覽になつて本當に癖髪なんて厭な髻され、妾は何うしても若いうちは島田に限ると思うよ其れも高髷が品がよくつて一番だよお前なんか乾度似合ふのだにねと嬉しらしく仰有るので妾はそれでも袴をはいて島田に結ふてたら可笑しうござんすわと云ひますと傍に聞て居らしつた兄様が是れは能い序に御帶と鈴を持つて御神樂堂で舞つてると可いゝよつて眞面目に仰有るのです。

### ○丈なす髪　伊豫　芳枝子

お髪の黒い麗々しいのを、きついハイカラに束れて、香油の香にむせぶ様、それに大きい薔薇の簪など飾つてゐらつしやるよりは、洗ひ髪の油氣無いのを一寸束ねて、無造作に黒い櫛をさしてゐらつしやる方が、眞のハイカラで無いかと、度々思ひます、そして私は後の方がいくらか好きです。唯かのお作に――帝王の手にも許さぬ黒髪やひろとぞなりぬ我が廿三――とか云ふのをおぼえて居ますが、私のは年の割に長うて四尺近うございます、此の間髪を洗つた時に後ろにたらした儘、椽に座つて居ましたが用があつて立たうとしても一向立てません「アラッ!」と云つた拍子に立てましたが、自分の髪を、しかと足の下にしいて居るのです。

### ○生徒の髪　静岡縣　濟子

尋常一二年生のお下げは、やつとくびまで位の毛の長さなのも愛らしい、三年生のオチゴもそろへばきれいで、四年生の永いくふさくする毛をながくたれて、幅廣のりぼんが風になぶられてひらくするのも美しい、五六年生の根本のかたい束髪は、運動をするに適して、高等一二年生のゆるやかに結んだ束髪は優美です、此は或田舎の小學生徒の髪を見た私の感じてす

### ○日に二度　英子

幼い妹の髪を結ふのは私の役なのです、毎朝起きたてのボウくしてゐる髮へお湯を少しつけて前を一寸程さげ跳れやうとする毛を無理に揃へてリボンでゆはへます。妹は大切にしますけれど、僅三時間の課業が終へて歸宅しますと、もうリボンまで落ちさうになつて居りますから亦結ふのです。日に二度乃至三度ですもの私中々忙がしう御座いますわ。

### ○桃割　京都　紫苑

學校に行く日は、いつも自分で8に卷いて行く。日曜にはきつと、お下げに結て大事に、しまつて置いた、リボンを、二三度取りかへて見る。夏と冬との休暇には、必ず姉様に桃割れにして戴く。そして、家の者は皆、桃割れが、一番よく似合ふと云ひます。

### ○たらちね　石川縣　岡田とく子

私し七ツの年に初めて御母様に髪を結つてもらひました、其時は只もう嬉しくてく、手で撫でるやら、お隣りの姉様に見せるやら、遂にはさして居た赤のリボンも落して、御母様に叱られ、何度泣いた事やら、眞實に其時のとか思ひ出すとおかしくつてなりません、やつと八年の間に、こんなに長くなつて、自分の好きな束髪なんかにいふ様になつたのも、皆御母様の御世話なさつたおかげとひそかに喜んで居ります。

### ○師範の寄宿舎　尾張　秋江

霜白き里の板橋で、見送人と泣いて別れた一人旅、思へば十五の秋でした。教師志願の私は某師範の乙種に入學しました。規則固き舍は夜一夜眠らない私炎を起しました。新入の三十人だけて私は理髪室に行きました。そこには二三人結へないとて泣いてゐらしたので、お緘の務て恥づかしいのも忘れて私がとて三人のを間に合せました。一週間程毎日して上げましたが四人揃つて本科に入る頃は皆上手になつて居ました。

立田[illegible]　文藝倶樂部

尋四を受持つてゐる私は兒童が人に結て貰ふのは許しません。

## 髮を洗ふ

近江　若井きく子

私は毎朝髮の毛を冷水て洗ふ事に定めました。館の小川の滑らかな水てよく洗ひ、化粧部屋へ歸つて鏡に對ひ、十分櫛て梳いて、キチンと廂に結ふた時は何とも云へぬ佳い心地がします。斯うするからてせう？私は一日氣が滑々して讀書などすると樂が盡きません。そして私はのぼせ性てしたが最う一度ものぼせず頭痛も癒りました。私はベタ〳〵に油を付けるのが嫌い、髮は廂が好き、手輕いのみならず風がよく透つて衛生に佳いと思ひます。

## ○お下げと束髮

美作　田づ子

母は大さう髮がわるいので心配したものださうです。其かはり私のは多く且つ長くて却つて苦勞するやうてす。結ひかけてから恰ど八年になりますが、始めの三年許、母の手をかりました。それからはいつも自分て束髮に梳いてゐます。始め母はおかしいから桃割にせよとか銀杏返しにせよとかよく申してゐましたが今頃私が「母樣桃割にして頂戴」と云へば「否々ヤハリお前には束髮がいゝ」つて云ふやうになりました。私は生れてから未だお下げと束髮とより他に結つた事が無いのてす。

## ○西洋色

大分縣　村田原秀

髮の毛に氣苦勞するのは、今も昔も變りはない。西洋人てあれば赤いのがいゝし、日本人になると、まるて反對て烏の翼のやうな眞黑な色を好みます、其癖今は廂に結びますので（無論私とてさうてすが）髮の毛も自然西洋色になつて參りました。其て母樣などは何時も、桃割れにお結ひつて申しますよ、しかし私は他の人から結つてもらふのはきらいてすから毎朝一人て廂に結びます。

## ○我髮

福井縣　山田小濱

私の髮は縮髮の上に赤味を帶びて居ますので其れが一番悲しいの、毎朝鏡て兄さんや妹のは至つて黑々艷々して居るのに私のだけこんな髮を下さつたの……と口にこそ出されど愚痴を零して父母を恨んてます。醫者は勿論藥は十幾種も服用し、時には廣告を見て註文してだまされたり。新聞や雜誌の病氣顧問ても質問もし、人から聞いて呪も試たり。或時は髮を切つても見たり。又毛髮に關した書物は大抵讀んて相應の衛生はしてますが、些少の功能も無いのてもう之迄と諦めてゐます。

## ○僅に二日

麴町　香田苦樂子

女は髮形とよく母が云ふのてす、そして妾には日本髮が似合ふからとて、御自分て結ふ時はいつも髮結に話しておられるので、妾はそつと遊びに行つて終ひます、此の間知らないて歸つたら丁度髮結が居たのてす、もう逃げる道がないので、仕方なしに小言云ひ通した結果、妾の大事な〳〵廂髮は牛玉風の唐人髷になつてしまつた、然し廂は相變らず出した、母樣は大よろこび、逢ふ人毎にまあお毛がよいからなんてもお似合てすれと云ふ、之れても似合うのか知らんと、思ひましたが、枕と仲のわるい妾は、二日ともたないて又元の廂髮になつて終つた。

## ○あてにならぬ

佐世保　鈴木結子

私はいつも母上より自分の物て、あてにならぬは、髮と着物と聞きましたが、今初めて思ひあたりました、着物は七月三日に、盜人にとられてしまい、友達にも羨まれた髮は、重き熱病のためにぬけて、今はつぎし事もなき、かもじを入れる身となりました、おもえば夢の樣な、私はしみ〳〵と母の教訓が身に感じました。

## ○七夕の朝

讃岐　女

七夕さんの日に朝早く日の出ない前に髮を洗ふとよくおちると申します其時大勢の人が髮をあらつて多く水をつかいますから雨が降つて天乃川の水が減り牽手と織女とが無事にあふ事が出來ます其れて七夕の日に髮を洗ふと洗粉も何にも用ゐないても水のみて能くおちると祖母からきゝました。

## ○姉上の述懐

攝津　中西つゆ子

私の娘の時分には唐人髷が流行て、肩揚のとれる迄は緋や桃色の手柄をかけて結ひ通しました夫からお嫁にくる迄島田、今は丸髷、束髮は好

きません、お前なぞはお下げから花月卷、つぎはマガレツト、婚禮には無論島田でせうが、花の盛りをまあ惜しいねえ、此髪はいくつになつても差支ないが、桃割やしまだは年をとつてから結ひたくても駄目ですよ、

○姉　茨城縣　大久保愛花子

私しが髪を結ひ初めたのは、小學校へ通ひ初めた時でした、私しには一人の姉さんがあります、妾の髮亂するのを御怒りになりながら、いつも結て下さいました、其の頃妾の村には未だりボンなど云ふ流行はありませんて、只赤いはれもてを無上の飾りとしました。十三歳の時でした、妾は一人で髪を結ふ事を覺えました、それからは髪を結ふ事が心地よくて、毎朝結ひ更へました、それから遂に妾の癖となり今ては朝の務の一つとなりました。

○品性　本郷　小澤ゑい子

髪の種類を申ますと、お下げ。三輪。しやこま。おたぼこぼん。お稚見髷。桃割。天人髷。唐人髷。島田。島田くずし。銀杏返。銀杏くずし。ながいこま。ぐろ起し。丸髷。ひつめ。又束髪と申してもS卷。マガレツト。二〇三高地などて、まだ學校内て名稱を附けたのもあります。けれども髪と單に申せば皆様が年齢に相應して お結なさいますから女子の品性を表示する物と申して お差支は無てせう。

○寫眞を見て　北陸　俊子

生れて百日目、父上に抱れてゐた時は母上の手製の頭巾を冠つて、三才の時のは愛想氣もなう



渡船　水戸　中川しづゑ

お皿にそりまわされて、六才の時のは振分髪の肩までゆらりとかゝつて、十四の時のは無格好な廂にリボンをかざしてすまし込んで、つい吹き出さずにはゐられません。そして此節に寫したのはもう規定に外れますから御判斷におまかせしますよ。

○私の髪の今昔　大阪　伊達よし子

今は流行の廂髪にしてゐるから色も光澤もない洗ひ髪が首の邊りにばらついてゐるが、其昔振分け髪の時は眞個に美しい髪だつた。或はお母さんにねだつて可愛らしお煙い草盆に結つてもらつた、眞黒の房々した髪に赤い鹿の子がよく似合つて、額の道具を引立たせる位。この髪で高髷にでもしたらと人も云へば自分も思つた。けれど今は……嗚今一度昔の様になりたい。

○心の中　後志　清子

私の友が昨年私一人へ秘密に話て聞せたのはこうてす髪は女の生命てす自分は髪が少ないから情なくて髪の多いお方を見る度に羨しく自分の髪の少ないのをかこちて人知れず泣て居ます何卒貴女私の心中お察し下さいなと私の手を取て兩眼より涙をほろりとこぼすのてす。

○小さき廂　宮城　枌重女

私は小學校の高等三年頃から髪は自分で結ふやうになりましたの、前髪をとらない束髪にばかりてす、だんだんに廂髪がこちらに流行してきて友達の多くはそれにばかり結はれるやうになりましたけど私はどうも恥づかしくつて結へなかつたのです、母様は「一束に結つてると男の

やうてみつともないから前髪を出してお結」つて何度も仰いましたけど……やうやう去年の春頃からしれない程出して結び今では普通に出してますの。

○おたばこ　福井縣　池上　小芳

何でも私が七八つの時大坂から來た小間物店の娘がおたばこに結び水色の鹿の子をかけて居るのが羨しくて「私にも」と下女に結つてもらつて得意で居たら母が見て非常に怒られた事があつた。その後年を經て廂に結ふ樣になつて、始めて下品な髪だと云ふ事が解つてたまたま小娘のを見ると昔を思ひ出しておかしい。

○髪を結ふ時　長岡市　久子

私は髪を結ふ時には何となしに愉快な心持が致します。そして、何日も今日は日本髪に仕樣かしら、それとも、束髪は似合ふと友達が御仰つたから、どつちがいゝだらう等と考へた末には、大抵日本髪にする。そして合せ鏡をする時に、前髪が工合よくふつくりと出た時は、云ひ知れずほこりの色が、ありありと、鏡にうつゝて居ります。

○人の髪　北蒲島　辰女

月に三回位洗ふ人の　さばさばした髪をツーとこう上の方へきちんとあまりまわりを出さずふつくりと言てリボンや花をまるて花飯に花束を入た樣にしないのが好いと思ひます。

# 小説談（課題）

## 人

### ○同化　三河　宮野加那子

私は上手な小説を讀むと、自分自がその作中で最も好きな人になつてしまつた樣な氣がして、其人の盛衰、浮沈は自分の身に現在ふりかゝつて居る事の樣に思はれます。此心持は、憧憬でもありません、又「チャーム」されたのでもありません、其等よりもう一歩進んだ、美學ていふ所の美的假象の中に投入せられたとでもいふのでせう、て讀てしまつた後でも、其人の動作や事件やが幻の樣に記憶に遺つてどうしても忘られません。是と反對に下手な小説を讀むと、其作中の人物に同情も起らなければ、記憶にも決して遺りません。

○不如歸の人物　熊本市　近野　春子

皆樣が不如歸不如歸と仰しやるので昨日初めて讀みました。讀む程と、讀み行く儘に惑に堪へませんでした、第一嫌なのが千々岩、惡くらしい未亡人、卑しい山木、馬鹿なお豐、恐ろしい病氣。夫れに引きかへ、中將の慈愛、大好な加藤夫人や千鶴子樣憐れな幾、武夫樣と浪子樣とは云はずもがな、讀めば讀む程涙ばかり。殊に妾の病養ふ逗子に、片破月を踏んでの別れ、歸京する浪子の心情、病院内の夫を慰むる品々、不動祠前の述懷。もう浪子の臨終青山墓所の條に至つては、幾度か書をおほい、幾度か熱ひ涙を拭ひました。

○泣顔　常陸　くら子

例もお友達から不如歸は一度讀て置いていゝと申されますので、讀たい讀たいと思ふて居ます内幸に、御隣の幸子さんが、友達に借りたのですが、明日中に讀めばと申しますので嬉んで拜借致し半ば程讀んで行きましたがもう堪らなくなつて泣き伏した時、奥で母樣が御呼びなさるので慌てゝ涙を拭ひ出て行けば、母樣は不思議そうに私の顔を凝と見て居ましたが、何か悲しくて泣いて居たのだらう、其な弱虫では後に兩親の膝を離れて外へ嫁つた時に何するのですと云つて、母樣は私の心もしら御小言を下すつた。

○本が好き　青森市　姫百合

女は妄に小説を見ては惡いと云ひますが、私は

さう許りとも思ひません、如何したものか私は本が好きて、生意氣にも十の時に早やおさち酉女お藤飛梁太郎など讀んで居りました、お陰て小說などの善い惡いを識別する事が出來て一寸見てあゝ斯樣なものとわかる樣になりました、又知らず〳〵の中に字を覺えてまだ習はない字を讀める時もあります、それて私は思ひますには小說が惡いのてはなくて讀む人の意志に依るのだと思ひます。

## ○讀書記臆帳

名古屋市　吉田ろか子

欠伸が廻ひ退屈になつて机の前に座つた處が迚も手が就かまいと想ふ時縋いて小說の趣味を得ます、讀み懸けて他のへ遷る、所謂不如歸で卅頁紅葉全集て四十頁と幾册かのを讀し宛覗く事が大嫌いて詠み始めたのは一途に讀み完らなくてはお腹の虫が承知しない、而して默讀しなくては快くない、と斯うした性て、小說本一册を讀み畢る毎に讀書記臆帳へ作者の名と題名とを記して後日の紀念に致します。

## ○てはかつた

岩代　淺野一枝子

私は生れてから小說が好きて〳〵御飯よりも好きてちよつとのひまても小說を讀むのてす、學校の先生が今つから小說を讀むものてはない今より小說を讀むと氣がくさつてしまうとやかましく生徒の小說を讀むのを叱られました、しかし私は好きてすから先生に見つけられんように讀んて居りました、がつい見つけられて先生の事務室に呼び出されました、私は心をしづめて普の人の哀れな話や迷つて哀れな有樣となつたこと等を讀んて自分をいましめ身を治むるために讀むんてすていつたら一百二言いはれたのですんだのよ、始めどんなことといはれることかと思つてアノ時のこはかつたこと。

## ○裁縫の時

岩代　すみれ

私は草深い片田舍に生れ世間の事も知りません只小說をよむのが第一のたのしみてす裁縫をする時もかたはらをはなしません小說中の人物がこれからどうなるだらうと思つては裁縫も手につきません私はいつまてもミスて小說を友として浮世の事は白菊と暮したいと思つて居ります

## ○卒業後

德島縣　野　菫

妾の村て本屋と云つては小學校の敎科書を賣つてゐるのみてすから小說雜誌等に興味を持つ筈はありませんてした、妾は十六才の時或學校に在學中友が如何にも離したくないと云ふ樣に讀んてゐました不如歸の口繪を見せて頂きまして浪子の物思ひに沈んてゐるといとしい姿を見ましてから一時に讀み度樣な氣がしました、けれども餘りにふけつてはと氣付きまして名だけ記臆してゐました、去年の卒業後なつかしい不如歸をとう〳〵讀みました、それからは興味づいて乳姉妹、日の出島、釣道樂、逗子、金色夜叉等讀みました。

## ○從兄

播磨　山本鈴子

十五の時てした、妾は叔母の内から學校へ通うてゐました。内には從兄が一人きりて同地の小學校の敎師をしてゐて隨分と親切にしてくれました、書齋には机を二つ並べて、自分は復習をする、從兄は新刊物を讀むのが常て、非常に小說を好んてその讀み古しは堆高く積まれて私も折々其中から選り讀みしましたが、自然感化されましてお友達にも女子文壇などを借りて讀むやうになりました。其後從兄は椿さんといふ若い先生と結婚せられたので、夜分机に向つても何となく寂しい心細い樣な氣がしてますます小說を嗜み、唯一の樂みとなりました。

## ○母の傍

釜谷　西野秋子

浪子さんの事を想ひ出すと、今ても熱い泪が落ちます、私の小さい胸にも、この小說ほど善良な感化を與へたものはありません、他の小說て見る樣な不自然な點は一つもなく、少しも不快の念を與へないのは、第一の特長かと思はれます、五六回は確かに讀みましたから、よい所は暗記してる位て御座います、何時もお母さんがお針をしてるお側て讀みますと、非常に同情を寄せらるゝのが、何より嬉しいので御座、ます、さうして何時ても、兄さんにお嫁を貰つた時に、大へん私の敎訓になると、いふてはシミ〴〵と物語られます。

# 果實（課題）

## 人

### ○果物賣

松山　瑩子

忙しい劇しい門司の海岸の町通りに白い日覆をした果物の露店があつた。バナヽ、桃、梨、林檎、パインアップルなど熱帯めいた懐かしい色と香のたゞよふ中に、店番をしてゐたのがまだ十六七の、眉の奇麗な眼のぱつちりした美しい少女でした。そして妾が前へ立つたとき、讀んでゐた本をあいたまゝ俯伏せたのが、女子文壇だつたので、妾はなつかしくつて堪らなかつた。（旅行日誌の一節）

好い感じがする

---

### ○美しい果實

岡山市　今東　小鶴

果實の内で一番美しいのは、赤く熟して眞砂の中に光り輝やく珊瑚の玉の様なスモモ、春の暮の空の様なザクロ、天長節の式日に空の青々とした中に、紫の天幕の長く連つて、房々として下つた様なブドウ、一寸見て美しくない、味のよい滋養になるのは梨子。

### ○桃の實生

武州　近藤とく子

果實の中で私は桃を一番好みますの、何時もめづらしいのを頂くと、私は其種子をていれいに地下に埋めて置きます。そして幾日かの後に其處へ行つて十も二十も埋めた中から漸く一本か二本芽を生じたのを見付けた時は實に嬉しう御座います。

### ○好める果物

愛知縣　白　萩　子

私の好める果物は、あの赤く熟したる艶麗なる香を有する林檎、ジヤムでも製りたい様な黄色に實る杏子、紫色に房々と組をなしてなる葡萄、夏蜜柑の気高き、白き能い香すバナヽ、さくろの艶々と見るから酢い様な實、草苺の可愛き、藤柿の柔かく綿の如くみのりたる、又栗の裂ぜるのも待つて居ます、此れ皆時節〴〵に廣き花畑の中に多く實ります。

### ○紀念の桃

鶴島　藤井かよ子

私の父母が結婚致しました時植付ました紀念の桃の木があります、百花咲き競ふ春の頃には他の花にもおとらぬ美しき花咲き、四面みどりもておほはる夏の此頃となれば、澤山の實が紅くうるはしく熟します、と、食後に一同打揃うて、結婚當時のお話承りつゝ賞味致します。

### ○果實店

相模　濱田　結子

うて栗は一山三錢と札がかかつてばん臺の裏に十山ばかり積んである、店の中程につるしてある竹には柿が橙色をしてつる下つて居る、それにも一つるし二錢五厘と札がつゐて居る、柿のつるしてある下には梨が十箇計り列んでゐるそれも五厘から二錢位迄の札がついて居る、それより一段高い所に水蜜桃が五箇計りいとも美しく列んで居て今にも味い汁がこぼれ出はせぬかとあやしまれる、それも其のはづ一個ゝ錢と札がついて居た、それと列んで葡萄が二籠リンゴが三箇計どれも皆うまそうである、が其の内でも水蜜桃が一番うれる五箇はたちまちの内になくなつた、これはとある果實店の店前の有様であります。

### ○葡萄のおもひて

越後　幽　草　女

無花果が熟した、風に吹かれると、青葉蔭から紫色の頭が隠れんぼをする二人の手の届く小枝にも直さうて有る、熟したのを採つて、赤さんに遣らふと臺所へ行く。赤さんの顔は桃の様だと思つた。私が八つ弟が五つの秋。翌々年葡萄棚の下。舟の中で一房すゝつて居ると、赤さんが大變だと迎が來る、赤さんの林檎の様な頬が白く成つて、皆様の目が赤くなつた。乳母が今日から赤さんが無くなりましたと、云つたので、私達はわつと、泣き出したつけ。それから十年、るり色の房を見る毎に、此世に獨りの亡き姪を思ひ出します。

# 「常夏」を讀む

立田鄉

與謝野晶子の歌集『常夏』は同夫人の『夢の華』以後の作を集めたものです、歌の數は三百七十四首、一首每に味ひがあつて、一集出る度に歌壇の重鎭たるは感服の外ありません。夫人が最初の集『みだれ髮』時代の歌に比べると、大いなる變化が見えます、けれども其變化は時代かぶれをした變化ではなく、夫人自らの心の調子が移つて來たので、時代とか、思潮とか周圍のものに動かされた跡は殆んど見えないのです、依然として晶子は晶子の歌を歌うて居るので、其藝術的態度の確立して居ることは作家の中でも珍しいのです。

娘から妻となり、妻から母になつてゆく心持は其作る歌の上にも表はれてゐます、若い時のやうな向ふ見ずな、花やかな感情を歌うて居ないから、一寸寂しいやうに見えますが、それて又今作つてゐる歌の價値がついて來るのです。

ふと思ふ十とせの昔海見れば足のよろめく少女なりし日

十年の昔は海を見ると足が蹌踉して、恐ろしいやうに思はれた、脆弱い少女であつた、ふと何かの機會にそんなことも追懷して見る、海見れば足のよろめくと云ふ處に少女の情も妻も能く表はれてゐます、而して其十年間に自分が何んなに強くなり、確かになつたらうかと云ふことも聯想されるのです、女性の追懷として最も適切しい感じてす。

古女君とその世の相聞の歌もて足れるあめつちに居ぬ

相聞は問答の歌で多くは戀歌を指しました、古女は古女房です、其上問答したやうな歌を作つてそれて滿足してゐる、當時には歌だけでは滿足しなかつたけれど、今は詩歌の天地に安住して居ると云ふ意味です。

白き花紅にまじりぬ逢ひそめてしら寢しにける日のかずばかり

しら寢と云ふ言葉は珍しい好い言葉です、多分獨寢と云ふやうな意味てせう、此歌は聯想の奇警な歌です、紅い花の中に白い花が四つ五つ咲いて居るが、恰當戀人に逢ひ初めてから其數ほど獨寢をしたと云ふので、澤山の中に僅かと云ふ數を現はすのに、思ひ切つて變つた例を擧げて來た比喩の巧妙は獨得のものです。

かたゐらはしたり顏して錢よみぬ少女の名をばあまた云ふ君

序に比喩の巧妙な歌を今一つ擧げて見ませう、此れは好んで女のことを言ひたがる男で、しかも澤山に彼方の女のことや、此方の女のことを云ふ人は乞食が貰つて來た錢をうれしさうに一つ一つ數へてゐるやうなもので、賤しいと云ふのです、下の句が主題て、上の句が比喩です、飛離れては居るが情は能く似通ふたところを捉えて居ます。

七人の男の中を黑髮の裾さはらかに去にける君

此君は女です、男が澤山集つてゐる中を、いさ歸るとて、裾さばきも取りつくろはず、髮もはら〳〵と亂したまゝ去つて了つたと云ふので男に怯ぢない女の態が出て居ます。

とある人思しきさすとさびしくも心よく讀む用なきこころ

或る人が或る人を戀初てゐると私の心には能く讀めて居る、分つた處てそれが何でもないやうに思はれて、好奇心も動かず、自分の心はそれだけ寂しくなつたやうだ、用なき心は暇な心て、そんなことを思つたりする暇な心もあると云ふのです、此等は若い人には無い詩歌の境地だらうと思ひます。



# 滑稽談

編輯局選



女子文壇定期增刊　滑稽讀

十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は丙種。

## 地

○郵便箱　　澁谷やなぎ

宅に年老た庭掃除の翁が居ります、或日その翁に「手紙を郵便箱へほうりこんでおいて」といひつけました、一寸の間にかへつてきました。後て出かけ樣と思つて門口まで參りますと、内の郵便受取口の中に先きの手紙がちやんと立てかけてありました。

## 人

○お日樣　　若狭國小濱町　田中貞子

島國人「お日樣は海から出て海へ御入りになるのてすね」

山國人「否え、山から出て山へ御入りになるのてすよ」

○僧　　青森縣　花代

或田舎の僧『お釋迦樣つて偉いお方てごあすな……』

學生『なにしろ世界三聖人……』

僧『……お陰樣て私の樣なものでも食つてゆける』

○盗人　　横濱　宮部みち

湯やの主人『もし〳〵お召が違ひます、貴客のは是てせう、』

客『あゝ然うでした、道理てゆきが短かいと思つた、』

主人『何、ゆきが短かいのてはなく貴客のお手が長いのてす、』

○鳴らぬ　　豐後　君江

母「八重ちやん今は何時なの」

八「ハー先つきは八時てしたが今は分りません」

母「何故れ！」

八「ても未だ鳴りませんもの！」

○表紙が似て居る　　常陸　塙はな子

兄さんは小說がお好きなので、父より偶々諫められる、或る日朝から書部屋に入つて何か讀んて居る樣だから、妾がそつと入つて、後から覗いて見ると頻りに戀愛小說に耽つて居た、おら又小說を見て入らつしやるの、兄は驚いて後を見、國語の本と表紙が似て居るから一寸間違ていかぬ。

○財布の名薬　　鹿兒島　池田さり子

妾の財布は月末になつていつも痩せます。食物をやつても頭を振りどんな名醫も治することは出來ません。心配しておとう樣の許に知らせまするとおとう樣の許から藥を送つて來ます。財布はそれを飲むと突然肥えて來ます。其名藥は何てせう。

○弟のいたづら　　筑後　柴田百枝

學校から歸ると待つてた、露さんからのお玉章が來てる、麗はしい自筆のばらの繪はがきに「妾十二日に韓國へ行く」と意外の文、びつくりしたが、もう駄目十日の菊、今日は船出だ、落膽りしてると、弟がクスクス！ 鬱だと、よく見れば、卅九年の古切手が貼つてあつた。

○むじや氣　　江野さち子

祖母「孃や、御祖母ちやんはかみの毛が眞白になつてしまつたから少し見てをくれ。」

孃「御祖母さん白い毛ばかりてはない黑い毛も赤もある……」

○加減　　大阪　紅女

太郎「叔母樣、母樣が是れを上げるつて」と一ツの林檎を渡す。

叔母「をや、有難う。おいしさうね」

太郎「そらうまいよ、もう一ツ有たんだけれど、僕途中て加減見たんだよ」

# 女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○脣の乾割れ。　私は四月頃から十月頃まで脣が乾き且上脣が腫れ上り二個所ばかり乾割れて三ツ口の樣になります、如何にすれば癒りますか。（信濃、養蠶女）

『答』　每年氣節に依りて起る病氣なれば海邊に轉地なさる事が出來る御身分なれば來年は三月頃より實行なされたなら、大いに効能があらふと思はれます。

○強き光線に。　十九才の女、強き日光に當るとその夜より頭、手などがかゆくつて、かけばかく程はれて困ります、何うすればよいてしやうか。（落磐）

『答』　血行不循環にして皮膚の營養惡しく光線の截刺に抵抗力鈍きが爲めに來るものです故に營養分を攝取し每朝每夕食鹽水にて皮膚を強く摩擦なさるべし、然る時は漸時皮膚強壯になり隨つて光線の刺戟に打勝つ樣になります。

○おもくさ　私事顔中におもくさ生じ誠に人樣にはづかしくてなりません、何卒〳〵療法をお敎へ下さい（下關、はつ子）

『答』　おもくさとは多分にきびの事ならん之も已に前數回掲げましたから夫を御讀みなされ。

○便秘　私事常々通じが惡くつて困ります、心持ちよく通ぢのつく法はありませんか。

『答』　これも前にいく度かお答へしましたからごく簡單にお答へいたしましやう、每朝々飯前に「コップ」一杯の水に食鹽半匙程いれて飲用あれ漸次便通よくなるべし。

○頭のシラミ　頭にいゝシラミが居て困ります何うしたら宜しいてしやうか（北品川、愛子）

『答』　いゝシラミは多く不潔より來るものてあります、故に其の豫防法としては、毛髮を清潔に保つは勿論、每朝髮を梳り、一ケ月二回は必ず洗髮なさるべし、此如實行さるゝも尙發生を防ぐ事出來ざれば二十倍の石炭酸水を頭部の全體に塗りつけらるべし、さすればシラミも卵も盡く斃れます。

○月經、鼻汁。　四月に初めて月經がありましたなり五月六月は少しも見ません、そして時々眩暈が致します、又、濃い鼻汁が始終出て、顔に吹出ものが出來て困ります、療法をお敎へ下さい。

『答』　初めて月經を見てより後は、半ケ年間位休止するは、別に差支ありません。鼻汁が出るのは、鼻科の醫師に治療をお受けなされさすれば眩暈もふきて物も療りませう。

○鼾聲　私は二三年この方、高鼾をして、女だてらに恥しくてなりません、何か良い療法はありませんか（無名女）

『答』　鼾聲は多く、肥厚性鼻炎と云ふ病氣か、又は慢性扁桃腺炎と稱する病氣のある人に多く來るものです、故に其療法は專門醫にかゝる必要があります。

## 質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて奏効もあり亦害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險てすそれ故此の欄ては絶對的に藥液療法は申上げぬことにしてありますから諸孃も其お積りて質問を願ひます。



# 讀友倶樂部

## 若きうちに學べ



### 開き封

**○習字の交り** 誌友の御姉上樣達のおうちて習字にお志のある方と御交際いたしたうございます私は字は極下手てすけれどお手紙くださりますれば懷かしき水莖の跡を慕ひ御返事は習つていたします（備前國赤磐郡周匝村大字周匝堤美子）

**○琴の譜** 皆樣の内に山田流の御琴習ひになつて居らつしやる方はどうか想夫戀のうたと譜と又六段にても可なり歌と譜と御おくり下さいませんか御禮には私の知つて居る琴の譜を敎へませう。（陸奥八戸町八幡丁西村みや子）

**○編物を覺えたい** 皆樣私は何も知らぬ田舍者てすが女學生さんたちが栞だの、ひじつきなどを御上手にこしらへられたのを展覽會て拜見致しまして、非常にほしく、どうかしておぼへたいと思て居ます、どうか賢明の皆樣よ、御情がありましたら、こしらへ方を敎へて頂戴な、お禮ハ舶來の繪はがきて致しますから。（府下北豐島郡板橋町高桑辰子）



**○東北地方の方に** 私信濃、鎌倉、銚子、日光、東北地方の諸姉樣と萬事狀況の御交換が致たう御座います、而最正直に末長く欺かれない樣な御方が望ましく御座います。私も田舍育ちですから决して僞りは申しませんよ、飽まで親密に力の限り御通信申しますよ、繪葉書圖書雜誌縣地圖のは交換も致しましやう。（山口縣熊毛郡田布施村、松根靜枝）

**○わが身の上** 諸姉上樣方妾の身の上をお聞き下さい、世の中に妾し程たよりないものが有ませうか父には早く死に別れ妹と親子三人暮してしたが又間もなくたよりと思ふ妹には死に別れほんとにむれのやるせは有ませんよいつもやさしき妹が姉さん〲と云つてくれた事を思ひ出せば袖のかはく間は有ません今では母樣と只二人淋しく月日を送り又女子文壇を見て氣をなぐさめて居るのよ妾をふびんと思召て下さるお方は玉章やエハガキの交際を松の緑り末長くして下さいお願ひ致しますよ（大分縣豐後國東國東郡四安岐村小川岸上勝子）

**○新詩の趣味** たかき理想の陰、私はとこしへなる趣味の友を得たいと存じます、久遠の趣味、果たしてどんなものが左樣でございませうか、勿論人その人によりまして違ふてはございませうが、私は新詩に深き〲趣味を有して居るのでございます、然し下手な横好きであるといふことを自白いたしますと共に私はいつはり飾つた新詩は大の厭ひてあるといふことをお斷りいたしておきます、それでもし私と同じ趣味を有してゐらつしやるお方がございまするならば、何卒私の詩友となつてつたなさ此上もない私の作と交換して下さらむことを切に〲お願ひいたします。（越後關川大石厚子）

### 諸嬢と記者

記者樣は此頃を如何にしてゐられますか私は記者樣方の御すがたとは早うから誌上てお目みえしてゐましたが投書いたしますのは今度が始めてどすから夫てかんにんして下さいどうぞ投書について用紙なんか私共の學校て十九字詰を使ひますから夫てかんにんして下さいどうぞ投書について違則いたしましたところがありましたらお小言を願ひます（鶴子）（記者曰、よろしい）○記者樣妾は家の都合て學校にはいる事も出來ず一人自然を友にして居りましたがこの月に初めて女子文壇を拜見いたしました同時に皆樣の御作が羨ましうてなりません妾もこれからつとめて投書いたしますから何卒御導き下さい御れがいてす（大坂府三島郡谷川百合子）（記者曰、自然も友とし、女子文壇も友として下さい）○私は十月號小說「驛夫」て男だと申された笹波井上滿壽子てございます。名の通り私は女てすから敢て辯解する必要もありません。材料が男性を帶びたものてしたからさう誤解されたんてせう。微力ながらも益々努力したい考へてすからどうぞ笹波女の名を御見知り置きを願ひます。何れ寫眞を送りました上て誌友諸姉の誤解もときたいと思つて居ります（記者曰、お作はいつも紙上て拜

見してゐます、正銘の女子てあるとのこと、勿論てせう）○記者様初號よりの讀者てございますが日々愛讀者の多くなるのには驚いて居りますと共に何だか肩身が廣い樣てす今度始めて投書致しましたから宜しく御覽下さいませ倘文壇餘興の外は毎月十五日迄に投書致しまするのですか一寸御伺ひ致します（大坂にて喜美子）（記者曰、全く皆樣の御ひいきは大したものてす、大阪の方ても然うてございませう、おたづれのことは其通り）○埼玉、岡本みどり子樣に、寫眞は出ましたらお返しいたします。○神奈川縣田所カトさんに、御相談の事は本誌の希望廣告に出して見ては何うてす○埋れ原女さんに、アイヌ風俗の寫眞拜見の上て載せます○土佐、重子。長野縣、柳澤敎子。一少女。羽後、ちさ子。弘前、長尾きよ子。みち子。丹後、吉田せき子。京橋、伊東とく。長門、松浦ゆき子。橫濱、加藤いそ子。越後、小枝子。羽前、村井とく子、橋本いつ子。筑後、柴田百枝。神戸、櫻井露の玉。武藏、ゐなか娘子。以上の皆さんの御申越は一々拜見、承知いたしました。

## 寫眞編物交換

○愛讀者諸姉さま方よ妾は常陸の國の水戸市の近邊に住む不束ものて御座いますが妾は寫眞が大好よ皆さまの中て御寫眞を御持ちの方は送つて頂戴な必ず繪葉書て返禮致します（常陸東茨城郡綠岡村見川七〇飯島方江幡治子）○諸姉樣私は片田舍に淋しく暮して居る者て御座います何卒御交際を願ひますそれから私は編物が大好なの！編物の御手本御送り下さいな、送つて下さつた御方樣には岡山公園の繪葉書て御禮致しますわどうぞれ！（岡山縣都窪郡豐洲村五日市織田智子）○文壇の諸姉樣妾は編物が大好よめづらしき編物又編物の書いてある本おもちてしたら交換をなるべく妾と同年の十六歲の御方に玉章の交換も宜しく御願申升（丹後國峰山町字吳服吉田せき子）○御寫眞送つて下さい、な妾よりは月々愛讀致して居る婦人世界を實業の日本社より先着一名樣へ御禮として一ヶ年だけ送るように致します、決してうそは申ませむよ（茨城縣新治郡牛渡村佐賀逸子）○みなさんの中に絹糸のシオリと、寫眞掛けと臂突きとを送て下さる御方に、小說男一疋に、エハガキ五枚添へて御禮します（能登國輪島町字鳳至住谷松太郎方花榮）○各自の御寫眞御送り下された方へは天下名代の相馬野馬追繪葉書差上ます編物類てもよいのですよ（福島縣相馬郡太田村山田秀子）○諸嬢樣よ何卒寫眞の御交換を御願ひ申します（千葉縣山武郡山邊村餅木松戶武逸方みつを子）○女子文壇の御姉樣方私は名所繪葉書名所寫眞編物各種ありますから何卒御玉章か繪葉書て申込んて下さい又私しの寫眞も差し上げますから御姉樣方の寫眞も送て頂だい（佐賀縣佐賀市外諸富小林良輔方たつ子）○御愛讀の諸孃樣方私は見にくい寫眞や慈がな手て作りましたあみものが澤山たまつて居ますから寫眞やあみもの送つて下さつた姉樣には、一々鄕の名所繪葉書も添へて返禮しますからどうか交換を願ひます。（筑前飯塚町菰田岩木方正木冬子）○誌友姉君よ御地方の風景寫眞繪葉書の御交換を願ひます、（岩代安達郡本町鈴木千代子）○私は毎月寫眞の交換を致します最早誌友の御寫眞も九枚集りました私はすみれ館て寫す事が丁度九回てすこれから倘諸孃樣と益々交換を願ひます（牛込區山吹町二二高橋方見松芳枝）○御惠深き誌友の諸姉樣よ花の樣な御寫眞や葉を御惠み下さい御禮は南總海岸繪葉書に女學世界か文章世界を添へて乾度いたします（南總千町村萩原渡邊皎月子）○何卒皆樣玉章や繪葉書及び寫眞の交換を切に希望致します（群馬縣多野郡美土里村大字下大塚平柳とよじ子）○愛讀の諸孃樣以後寫眞繪葉書玉章等の御交換を御願いたします但し寫眞の部は御先着六名限りよりあげられません（横須賀市稻岡町四六小澤喜太郞方宮川武香）○愛讀諸孃樣地方名所繪はがき御寫眞やレース絲の編物を下さいな必ず私も上げますよ（北海道余市郡余市町大字澤町若林てい）○天下の諸姉樣何卒お寫眞繪葉書をお送り下さい必ずお返事はいたします（大阪浦江五四三熊谷しぜん子）○誌友の諸姉樣御寫眞の交換を願ひます、又郵便切手御送り被下し方へは恥しながら妾の寫眞を送ります（石川縣石川郡鶴來尋常高等小學校內守部たけ）○誌友の皆樣繪葉書や御寫眞の交換を致して下さい倘親密に封書て御交を願います。（千葉縣東葛飾郡福田村大字上三ヶ尾四百十二番地荒卷げん子）○肉筆の繪葉書か御寫眞かハンカチーフか編物かを送つて下さる御方はありませんか妾も自筆繪葉書にて御禮申上ます（豐後國北海部郡四浦村字狩床佐藤しげ）

## 圖書換讀

○私の許に、少年世界○日本少年○少女世界○少女之友○

婦人世界○女學世界 ○新文林○ハガキ文學○少女界○婦人衞生○中學世界○文藝倶樂部 等が澤山有りますから若し御入用 のお方が有ましたなら申込み下さい (栃木縣下野國足利町榮町柳田幸吉方白つゆ) ○誌友皆樣私の手元に四つの集「花袋集」「風葉集」「有明集」「御風詩集」其外 色々な文學雜誌がありますから 何卒皆樣方の「生」と(一冊にてもよろし)御交換下さいませんか、又お手紙の交換は一時のお方は 御免永久の方と交際を願ます.(京橋區大鋸町野口方富士子) ○妾の手許に(椿說弓張月)(可憐娘)(戀の妻)(後の不如歸)(女優殺し)(緣不緣)(筆子)(夏子)(快男兒)(自然と人生)(駿台雜話)(雨月物語) 等其他雜誌が澤山有りますから、(コブシ)(女夫波)(小猫)(俳句獨習)(白砂靑松)(肉彈)(魔風戀風) 等と御交換下さいませ (靜岡縣磐田郡上阿多古村落合田口津多子) ○妾の手許に、 筆子、 眞人の自白、 少女世界、 靑春、 緣不緣、 花守、 白羊宮、 櫻の御所、 新文林、 妾の寫眞、 其他種々の本がありますから、 皆樣の魔風戀風、 女學世界文藝倶樂部、 中學世界、 婦人の戀愛、 ハイカラ田舍娘、 其の他リボン、 繪葉書、 造花寫眞、 等と御交換をねがひます (上總山武郡白里村四天木局區内字南四野宮愛) ○兵庫杉山俊樣、 與雅井濟涙樣、 香川のゆたか樣ことに失禮致しました、 紅葉全集、 金色夜叉、 は先着の御方に御送り致しましたので お送りする事が 出來ませんでした御許し下さい、 又愛知の加藤わさ子樣靑春もあの時になかつたの ですから何卒れ！ 御手紙に妾泣きましたわ、 けれど皆樣また『筆子』『自然主義』『己が罪』『月魂』 がありますから御交換下さいませ(岡山市内山下七二平井みどり) ○皆樣の内に衣袋かゞみ。 化粧かゞみ八月號。 婦人世界。 婦人消息文。 貴族婦報。 化粧のをしへ。 婦人の寶。 日本料理法。 御持合の方は少しの間おかし下さい必ず相當な御禮致します。 尙私に女學生訓。 朝ばれ。 女子養生訓。 女禮式大全。 家庭料理法等不用になつて居ますから 思召御座いましたらお送いたします。 住所は故ありて明記する事できませんから 誌上て一寸お知らせ下さい(もみじ子) ○諸嬢樣方の言海、 辭林、 博文館の文學雜著、 新體詩、 小說、 歷史、 地理と私の讀書作文辭典、 明治時代文範、 論說記事文範、 日本新地理、 日本小歷史、 四書解義、 白蓮白菊、 斷腸絕壁、 算術敎授過案、 新撰近體文、 勅語衍義、 新撰明治玉露、 國文問答、 學事顧問、 王羲三十七帖、 古今和歌集註釋入、 皇朝精華集、 秀才、 早稻田文學と御交換下さい。(隱岐國西郷西町吉岡方吉田きく子) ○皆樣おかはりなくて、 私の手許に、 裁縫と造花、 美文の資料、 女學世界、 少女世界などがありますから編物、 詩文などの本と換へて下さいませ (石見那賀郡濱田町大字海岸通り渡邊瀧子) ○皆樣よ私の處に暮笛集、 明治新體詩集、 中學文法、 作文敎科書、 時間活用法、 作文秘訣、 其他不用書籍あり。 絹采、 肱突、 寫眞掛、 腦力養成法、 養氣法等と交換したし先着者にはスケッチ 六葉(金二十錢)を進呈すべし(新潟縣下村上鹽町、 石栗彌次平方花聲) ○編物全書、 婦人の修養、 醉人の妻、 相思怨、 町の仙女、 乳姉妹、 靑春、 不如歸、 花袋集、 乙女の操、 女學生、 思出の記、 婦嬰等不用書ありますから、 片戀、 虛榮、 子規書簡集、 歸鄉記、 娘に興へたる母の書簡、 結婚後の十年間、 手紙雜誌等て御申込下さい、 到着次第早速お望みのを御送致します (備後尾道吉和村一〇五藤田方にて朝江) ○親愛なる誌友の皆樣、 私女子文壇の古いのが四十冊ばかりありますから、 何雜誌にても宜しいです御交換御ねがひ申ます (岩代福島市會根田四番地高野よね子) ○皆樣の中に藤村詩集が御不用の方が ございますればお禮は屹度いたしますから送つて下さいまし。(廣島縣豐田郡戸野村賀川水繪) ○壇友諸姉私は生ひ立ちの記、 草合、 新潮、 太郎の敎師を持つて居ますがどなたか御交換下さいませんか、 又姉えさんが風葉集、 女性の心理、 沈鐘、 紅涙、 嫁が淵前後編が不用になつてますから 何かためになる本とかへていたゞきたいといつて 參りましたが何かと換へてやつては下さいませんか (岡山市内山下長鹽とき子) ○皆樣の内で一、 金色夜叉(合本) 二、 靑春御持ちの方は、 妾の花袋集。 名倉山。 梢。 新譯水滸傳。 富と愛(前篇) 何れとか交換して下さい、 一は二册、 二は三册御送下さい、 尙手元に有明集。 その前夜。 萬朝報短歌集。 不如歸。 自然と人生。 筆子。 國の風。 巖窟王。 (一三四、 二なし)美文大觀。 新粧。 其他種々あります。 破戒、 運命の如き物と交換して下さい。 (岩代國北會津郡一箕村大字八幡進道濟子) ○誌友諸兄姉樣の内にて太平記、 徒然草、 方丈記、 源氏物語、 平家物語、 黃菊白菊、 竹取物語、 土佐日記、 小說眞人の自白等御持ちの方は何卒左記の書と御交換被下ませんか、 日本諸禮式。 小說戀の行末。 勉學と處世。 家政案內。 總攻擊及

新雑誌九種着次第送本致ます、雑誌なれば幾冊にても（大阪市南區西新瓦屋町六番地昌津濱川子）○皆樣私方は女子文壇、少女界、少女の友、文藝倶樂部まだ他に多くもつてゐますからさうとうの雑誌と交換して頂戴（和歌山市茶屋町二十四志賀楠子）○私の所に五、六、七、八九月號の新小説がありますから面白い小説とでも御交換下さいませんか（新潟縣三島郡塚山大槻としを）○皆さん小説美人像、心の影、怨みの片袖、操あがり松、玄鶯姫、其他數冊ありますが、諸姉樣の中に文學史、文學研究法、文章辭典、明治一萬句、情的大革命、朝晴、玉蟲、懸賞文集、連句名作、乙女の操、幻影、獨逸童話集、草もみぢ、俳諧活潮、プラトーン全集、沙翁全集、其他不用の雑誌お惠みの方へは米國人マエンレ孃より送られし一大紀念額面、外給葉書、編物にて返禮致ますわ、（岩代若松市中六日町一二一青葉三史）○御姉上樣妾れ女學世界、少女世界、文藝倶樂部、俳句の栞、新體詩白氏の詩、青年傑作集、新不如歸、重れ種等の不要書が出來ましたから、どうぞ皆樣の御讀飽きの小説と交換して頂戴な、（近江柳ヶ瀬局區内東野八九操よしえ）○妾は此羽田の片田舍に淋しく暮して居るものです皆樣の内に不如歸其外をもしろい小説を御もちの方は御惠み下さい御禮には川俣名産の絹ハンカチーフにてきつと致します（福島縣伊達郡福田村大字羽田字清水三〇佐藤梅子）○諸姉上の内に孝女白菊大奥女中をお持ちの方は妾にお貸し下さいなお禮にはエハガキ五枚、婦人世界、少女界、いろ／＼どれなり共さし上げ升（東京四谷區傳馬町小田切喜代子）



○皆樣の中で（A）をお持の方は私の（B）とお交換下さい。（A）秀才文壇、文章世界、婦人世界、（B）新文林、女子文壇、女學世界、（相模國高座郡大和村下鶴間山本文子）○皆樣の内に嗚呼無情、名情多恨御持の方は私の梅花郎、女學世界、姫百合、韓國寫眞帖、少女と自然等と御交換下さいませんか。女子文壇少女界も有ます（宮城縣刈田郡福岡村藏本一三三齋藤きくの）○皆樣方の内で紅葉、風葉、天外、水蔭、漱石、春雨、撫汀、涙香、柳浪、春葉、白鳥、吊花、眉山、秋聲、諸先生方の著しになつた新書が不用でしたら何とぞ御送り下さいな御禮は右諸先生の著て致します（佐賀縣小城郡小城町蛭子町田尻ときく子）○皆樣の中で、アラビヤンナイトか、ふた昔、（文藝倶樂部の増刊）其他お持ちの方は、今年四月より本月までの女子文壇思出の記、女學世界、純正哲學、新詩文、炬火等と御交換下さいましな（下總古河町横山町若杉とり子）○皆樣の内で和歌入門か中學作文要訣お持ちの方は妾の作文獨習書、文章新辭典、新選記事文範、新體詩入門、作文の資料、乳姉妹の歌、婦人世界、秀才文壇、女子文壇、新文林、中學文壇等と御交換下さい（大阪府三島郡茨木町西外楳浪春枝）○私のライブラリーに不用書『新詩辭典』『新派和歌辭典』『俳諧提要』『藻かり舟』『銀鈴』『戀衣』『七つ星』『古今和歌集』『狂歌集』『明治小説文粹』『發句一萬集』『日本文學小史』『駿臺雜話』『不如歸』『英文不如歸』『俳諧繼の栞上、下』『あられ酒』『みだれ箱』『大絃小絃』『我が文章』『美辭學前篇後篇』等がありますから皆樣の内で、テニソンの詩、沙翁物語集、富村郎のクリスマス、銀行盗賊、ロビンソン漂流記、沙翁全集の内各篇其他和、英の文學書と御交換なすつて下さりませぬか（東京、王子新道池田太吉方山脇數子）○諸姉樣の内で歌集わがおもひ、わかき日、常夏、美感新論、枕草子、春曙抄、徒然草、文段抄、少女の戀、花袋集、獨歩集、今第二、思出の記、俳風やなぎ樽、お持ちの方は私の歌集迦具土、小扇、小詩國、俳句作法、俳句小史、古句新註、文法正誤法、俳句界四年間俳句問答、新俳句類纂、近代三十六文豪の内で交換して下さいませんか（兵庫西宮内町杉山春翠）○誌友の皆樣私は古物が大好て此度古錢か集めたいと思ひます御持合せの方は左記の書物と交換して下さい己が罪、破戒、秋芙蓉ホトヽギス、夏子、コブシ、乳姉妹、金色夜叉、文藝倶樂部其他諸雑誌類又は繪葉書（房州舘山町新井浦宮本清子）

## 讀孃の交際

○最愛の諸姉樣方よ、編物繪葉書、御地の果物等の御交換を願ひます（陸奥三戸郡八戸村下組町杉浦方阿部すゑ子）○あみ物や玉章しをりの交換をして下さい但しはがきには俳句を認めて送つて下さい（群馬縣碓氷郡九十九村大字小日向村臼田小板橋琴子）○誌友の皆樣繪ハガキの交換を願ます、書面には和歌か俳句の外は御染筆なき樣御願申します（大阪高麗橋局區内新瓦屋町文叢堂方高津小波）○「わすれな草」及パイオレツト種子分與す、望の御方は寫し畵に姓名記入の上申込あれ着順に送る（靜岡市大里村下馬淵森本十才樣方杉山征舟）○妾も今月から文壇愛讀

者と成りました諸姉上樣宜しく交際を願ひます（磐城國石城郡內郷村入山糧食部佐藤勝代）○立秋と聞いた許りてゝ何となく詩興の動く樣な心地がする昨今わが詩友諸孃は如何に御消光成されて居りますか其の後俗務に追はれ久しく御無沙汰致しましたが近頃漸く閑になりましたから又駄作を投じます賢明なる諸孃よ御見捨てなく御交際を願ひます（茨城縣猿島郡古河大工町作枝）○妾は女子文壇第一號よりの愛讀者て御座いますが玉章や繪ハガキの交換を願ひます（栃木縣芳賀郡大內村京泉大塚溪流子）○妾は昨年のくれに當地へまいりまして淋しく暮して居りますの何うぞ玉章や繪葉書の交換を末長くして下さい御返禮は當地名所の繪ハガキてすぐ致します（清國柳樹屯西街松井助三郎方中川喜久子）○誌友の諸姉樣よ美くしき御文を頂きありがたく御禮申上ます以後も御手紙や繪はがきの交換を願ひます（茨城縣筑波郡小野川村大字小野崎中山けい子）○山口の石田きよ子樣繪はがき難有う、てすが住所不明に付返書しなかつたの悪からず又初ての方は文意住所わかりやすく願ます（呉市二川町西本通一〇二碓井濤浪）○親愛なる御姉上樣よ繪葉書に歌を書いて交換をして下さい着次第和歌浦八景の繪葉書を以て必ず御返歌します（和歌山縣海草郡紀伊村島居德崴方邦子）○誌友の姉君樣よ妾も本年よりの愛讀者て御座いますが此の後御見捨なく御交際を願ます御繪葉書や玉章の交換も（宮城縣登米郡石越村小野寺りよ子）○誌友の君達か又は御知人ても和歌の添削をして下さる方は御座いませんてしやうか會の情ある方にすがりましてお教へ願ひたいので御座います（上毛赤城根にて貴しき愛讀女）○私は女子文壇と、外種々の本を見て居りますが何卒此後玉章の交換を永久に願ます（上總山武郡千代田村川津場長谷川幾枝）○京都の郡鳥樣先日より雜誌新聞お送り下さいまして有難う存じます又小說本や雜誌は何ても宜う御座います其時必ず御住所をくはしく明記して下さいませ（岡山市櫻町七六石橋登野）○妾は先々月から女子文壇を讀む事と致しました、皆樣方の懸とした文章を見まして妾などは莫耻かしい心地が致しますが、どうか此の後とも宜敷又濟き御交際をも致したいと思ひます（函館鶴岡町六〇久保田方湯田きん子）○私は先月より女子文壇愛讀者となりましたから繪葉書や玉章の交換を願ひます（熊本縣玉名郡小天村字上有所無名女）○在外の方に、大洋の波濤を蹴破て、遠き異國に文學を御奮勉なさるゝお孃樣方！私は美濃の山奥につれなく淋しく暮してる不束者てすが何卒御玉章なり、繪葉書なり、或は御地の異風の御狀況をお知らせ下さいまし。（岐阜縣可兒郡廣見村淵ノ上中屋敷庭內第一號室加納如月子）○誌友の諸姉樣よ妾は此度上京して女子商業へ入學しましたのよだけど御友達がなくて淋しうてなりませんから御情ある御方は何卒繪はがき玉章にて御交際下さい（牛込區市谷本村町六番地小林方秋月千鶴子）○誌友の皆樣よ、ローマ字雜誌、お持のお方はどうぞ惠んで下さいませ御又、婦人世界、女學世界、其他何雜誌にても返禮は川俣風景繪葉書か圖書を以て必ず致します。（福島縣伊達郡福田村羽田字三郷齋藤勝江子）○本誌が日を追ふて隆盛になるのは何より嬉しい、而し誌友倶樂部は圖書交換と繪葉書交換の記事てもちきりあまり面白味が無い、人數計りふへて千篇一律の文句それよりも土地の事情を紹介したり、異事をお知らせしたりするのが倶樂部の本意てはありますまいか（熊本市新屋敷町三七六峽よし子）○亡友龍子の君に代りて明石中の町の濟子樣に申しあげます、女子文壇お貸し下さいましてありがたう、お禮として差あげました少女世界二册御親切にお返し下さいまして何とも恐縮の外は御座いません、確に受取ましたから御安心を、尙拜借致しました女子文壇と粗末な文藝倶樂部一册お受取下さいましたてしやうれ、噫濟子樣薄幸な我友龍子の君の水塋のあとに一滴の涙を注いて上げて下さい（在阪松子）○妾は某女學校の化學生なのてすが皆樣の爲め有機及無機の化學、或はその他どんな日用の化學や物理、數學其他不束ながら出來るだけ親切にお答申さうと存じますどし〳〵御照會下さい（攝津國川邊郡尼ヶ崎町字デヤシキ中川米次郎方村山茜子）○妾は東洋リオンと謂はるゝ羽二重の產地川俣の程近き所の者てす玉章繪端書を送り下さい私の手織りの絹ハンケチ及玉章繪はがきて御禮致ます。（福島縣伊達郡福田村大字羽田菅野ヤイ子）○十五名のお方樣、美人草お送り下さいまして、御厚志の程は厚う御禮申上ます、どうぞ、以後お心安うお交なして下さいな、又エハガキ、シナリ、ヒウツキ、お寫眞掛、お寫眞などの交換もして下さいな、お禮はきつと致します。男山の名物て（山城つゞき郡八幡町七九七入田文子）○皆樣の內て孚女白菊の歌、ホトヽギスの歌、想夫戀の歌、慰出

の記、詩集花守、ハイ子の詩、等をお持ちの御方は誠にすみませんが御送り下さい 右の內一册づゝでもかまいません御禮には私のハイカラ合讓、コアシ前、中、女學生、あらひ髮、二枚給の內御好みのを差し上げます（神奈川縣橘樹郡生見尾村熊澤みき）○北多摩の中島きく子樣、島田なか子樣、承れば貴孃樣方にも本誌を御愛讀遊して被居る由斯く近き邊りに誌友の君の在しますかと思ばいとゞお懷しく陰ながらお慕ひ申て居ります何卒御交際下さいませ（西多摩郡霞生村森田なか子同しま子）○本誌愛讀の皆樣よ各地方の風景風俗の寫眞 繪葉書又はまのあたりの珍事奇談和歌文章 其他一寸した品物の御交換や雜誌書籍の御換讀など願ます。（茨城縣行方郡麻生町新莊樣方津方雪江）○皆さんお文や繪葉書の交換を願ますよ！ 妾も乾度 御返ししますから（豊後國西安岐村植田隆子）○愛讀諸姉樣方妾も讀者に成りましたから 末長がく御敎導を願ます猶玉章の交通も願ます （千葉縣長生郡日吉村鴇谷區今關げん子）○御情のこもる御玉章を下されし方々の中に 東京某女學校生名無草とか仰せらるゝ方何卒親しく 御本名御住所を御知らせ下さいまし幾重にも お願申します妾は貴孃樣を母上樣とも姉上樣とも 乍陰御慕申します。（根室キナト石高橋文子）○誌友の貴孃樣宜しく私もお仲間に入れ下さいませんか 何とぞ玉章のお交際を願ます御寺の 御孃さんなら進んで御願致しますよ（秋田縣平鹿郡橫手町谷口孝子）○記者樣はじめ愛讀の諸姉樣私は 今迄少しも投書しませんでしたが 以後どし〳〵投書致しますからどうか御交際を願ひます、 それから私れ英語のバイブルを持つて居ますから御望の御方は風景繪葉書で御申込になればすぐ御送り申します但一部で御座いますから 先着の御方に御ゆづり致します（岡山縣都窪郡豐州村五日市織田哲子）○記者樣私は本誌の愛讀者ですが 此度初めて思ひ切つて記者樣はじめ 愛讀者諸姉に御敎導御交際を願ひます （鹿兒島市高麗町百三十二番戸谷山さえ）○周防の松根靜枝樣、外五六名の方々から美しい御繪葉書給はり 誠に〳〵有難く拜見致しましたが丁度母が少し 病氣なので冬の縫物等一人で忙しく遂失禮乍ら 一々御返しも致しませんでしたから何卒々々あしからず。 紙上で厚く御禮申上ます。 それから男子の方々から御葉書に亂暴な事を書いて下さるのは誠に父や母に對しても困りますから 失禮ですが今後御ことはり致します。（羽後酒田寺町菊池りう子）○紙上の諸姉樣よ何か珍らしき繪葉書を送つて被下なきつと美人繪葉書で御返事出します（京都市東洞院通佛光寺上ル下村萬次郎方山本末子）○皆樣私は片田舍の女敎師でございます、 どうぞ御志があつたら御手紙か、 編物かを御送り下さい、私はそれが何より樂しみです必ず御禮はします（尾張知多郡八幡村中鄉しつ子）○皆樣が交際して下すつて實に嬉しかつたわ、 だけれど男子の多いのには驚きましたわ、 而してお手紙下すつた方があんまり多いので 返事が出しきれませんでした皆樣あしからず。 妾子今度下記の處に轉宅しましたから一寸お知らせします（四谷區船町六九岡崎方桝崎さき子）○御なつかしき姉上樣方よ妾は只だ一人の友もなく 淋しく暮す者ですが妹と思召し永久に 御玉章御めぐみ下さいな一日千秋の思ひでまつて居りますわ（府下北多摩郡東村山停車場前大賀みつ子）○皆樣御機嫌よう、 妾は八月號からの新參者ですのに九月十日から三十日迄に四十八枚 の繪端書を戴きました、 何んとも御禮の言葉もムいません、 並に重れて御禮申上ます（下野石橋局草方華子）○お懷しき姉樣方よ妾はいろ〳〵な エハカキを合して二千枚程所持して居ります、 御同好の方々は御交換を願ひます （大阪東區內平野町二丁目石川松友館內松子）○諸孃の皆樣妾のような不束者でも何卒繪葉書の交際を願ふ（常州龍ケ崎町馴馬齋藤きよ子）○玉章や、 編物、 繪葉書等御惠下すつた御方には成田山名所の 繪葉書で碑に酬て御答へ致しますからどうぞ（千葉縣印旛郡佐倉町渡邊勝方石川芳子）○愛讀の諸姉樣田舍者でございますが 宜しく御交際を御願ひ申ます（筑前八幡茂倉榮町二丁目吉田筱子）○生來始めて文章の投書をした不束な田舍者ですが 何卒御交際を願ひ上ます殊に 同鄕の方々に御願ひ申上ます（青森市柳原野口金助方野口りせ子）○御情ある諸姉樣方よ繪葉書玉章の 交換を御願申上ます （福島縣伊達郡川俣町遠藤とき子）○なつかしい誌友の姉樣方ゝどうぞ 御交際して頂戴な御返事はきつと差上ます私は 今高等女學校の四年生なのなるべく同じくらひのお方に願ひます（日本橋箔屋町五番地黑田梅子）○私本年一月より女子文壇を愛讀して おりまする不束な者ですが以後御親しく御交り下さい 亦繪葉書やお玉章お送り下さいな御返しはきつといたします（芝濱松町四ノ三川上しげ子）○誌友の皆樣私は十四歲の時戀しい〳〵母に別れてから淋しく悲し

く片山里に日を送つて居ましたが 先頃から本誌を愛讀する樣に成りました、 何卒哀れと思し召して永久にお交わり下さい 寫眞玉章の交換もどうぞれ お願ひ致します（熊本縣菊池郡旭野村出口みつろ）○姉君達よ世事に暗き片田舍の者てすが以後文壇の御厄介になりますから何卒よろしく御交りの程御願申ます（福岡縣朝倉郡松末村星丸熊谷つれよ）○諸姉樣私は高等小學校を卒業したばかりの者てすが 何とぞ交際をして下さい今妾の見苦しき寫眞三組ありますから先着八名の方に一枚宛送ります（千葉縣市原郡市東村東國吉石井ゑつ子）○私は昨年より女子文壇を愛讀してゐる者てすが誌友の 諸孃よ何卒永久に繪葉書やレターの交換を願ひます（熊本縣飽託郡白坪村中山すゑ子）○おなつかしき誌友の姉君よ私も皆さんの お仲間に入れて頂戴なお手紙やその他ゑはがきなどの 御交換もれお返事はすぐ出します（紀伊粉河町高野英子）○私は至つて不束者てすがお玉章 お惠み下さい必ず御返事致します（北海道旭川町二條十瀧音艶子）○御情け深い天下の諸姉樣 御玉章を御交換して頂戴な（東京市神田區岩本町八番地 齋藤方岩瀬のぶ子）○皆さん繪葉書の交換を願ひます只一葉て宜しう御座いますそして可成 遠國の御方のを望みます（長野縣下水内郡飯山町弓削こよう）○皆さん寫眞や繪はがきや玉章の 御交換をして下さい。（千葉縣印旛郡佐倉町飯野渡邊源造方雪枝女）○北米ニューヨーク市在住の 小川樣先日はなつかしきお便り有難く拜見してよ 妾早速御返事差上げたかつたのてすがお所が 不明てしたからつい失禮したのよ許して頂戴な 誠にすみませんがどうか又お手紙下さいましな 今度は早速御返事いたしますからねさようなら（東京府下瀧野川村大字瀧の川七十一番地淺香みとり）○姉君方よ永久に繪葉書及び 御玉章の御交換をお願ひ申上げます殊に宮城岩代栃木 此の三縣の姉樣には手製のしをり編物さし上げます（茨城縣筑波郡北條町坂入芳子）○諸姉樣よ繪葉書を交換して下さいな自筆ならなほい丶のよ 先着十名にはきつと妾の見苦しい寫眞を御送り致します（茨城縣龍ケ崎町馴馬齋藤清子）○私は當地に參りましてから友達がなく只毎月 發行の女子文壇を愛讀して居りますが何よりか樂みてす 今後は益々御交際を御願いたします折々内地の 情況御知らせ下さるか珍らしい物を送りて 被下末永く交際するろ人に露西亞及獨逸佛國の繪はがき 其他おもしろい者を送ります（長春東第三ノ十八住田）

## 問合せ

○齋藤やす子先生　橫濱のお方におれがひします御地に英語の教鞭を執つて居られる齋藤やす子先生の現御住所御存知の方は是非お知らせ下さい（沼津上土町八代美代子）

○小林さい子樣　昨年十一月頃まで本誌に見えた方です、栃木縣とありましたが今何處に御出てすか御存知の方は紙上てお知らせ下さい。（神奈川青木町五三六芙蓉子）

○米良きよ子樣　札幌の米良きよ子樣と申す方の只今の御すまゐ御存知の方は何卒御知らせ下され度御禮は必ず致し候（小倉市船頭町井上つれ子）

○田中要子樣　佐賀の田中要子樣の御住所御存じの方がございましたら お教へ下さいませ。（下關市本町四丁目吉見山下九三九 重松英太內、辻本愛子）

○丸山鶴子樣　今から七年前に私は親友の丸山鶴子さんにお別れしましたがいくら探しても日本にはお出てにならぬやうてす 若し御存知の方がありましたらどうぞ紙上て……おとしは十八位（北海道、秋子）

○下野女子文壇愛讀女　として私に下野新聞を御めぐみ下さいました御方、どうぞ御本名住所御しらせ下さいませ（信濃東筑摩郡廣丘村太田喜志子）

○篠崎千歲子樣　小倉の女學校か女子大學に居られる筈てす、御存じの方は誌上てお報知をねがひます（京都、さよ子）

## ▲寫眞を求む▼

**誌友諸孃の寫眞**　本誌讀者諸孃の御寫眞は毎號揭出して居りますが猶ほ盛んにお送りを願ひます

**家族の寫眞**　誌友諸孃の家族皆樣とお撮りになつた寫眞、或はお子樣方の寫眞、何かの紀念にお寫しになつた寫眞などを歡迎いたします

**風景の寫眞**　諸國の風景、或は風俗、山岳、河流、市街、野外など餘り有り觸れないのをお送り下さい

**小集の寫眞**　譬へ二三人でも又は多人數でも誌友小集などを催ふされた時の寫眞は必ず揭載いたしますから御寄送下さい

**返送と報酬**　寫眞は御希望に依り用濟次第に御返しいたします、又寫眞に依りまして本社で是は好いと認めた場合には相當の報酬を差上げますから右記載の寫眞を試みにお送り下さい、茲に改めてお勸めいたします

到る處に吹聽せらるべき

# 女子文壇の大發展

## 新年號より面目一新

**驚くべきは雜誌の感化なり！見よ本誌を**

▲明治四十二年一月一日には本誌創刊第五年第一號を出すことになります、吾等は輝かしき希望を以て革新せる本誌を愛讀諸君の前に勸めたいと思ひます、其體裁は如何、其内容は如何。

▲第一に紙數を增加して紙面大擴張の實を擧げます、廣き場所に於ては何事も自由です、諸孃の投稿も、本欄の記事も、多々益々其範圍をひろめて行くことが出來ます。

▲誰が讀んでも分る文學雜誌として本誌の特色は日本唯一ですが、記者はます〱其特色を發揮したいと思ひます、女子の品位を高め感情を修養する點に於て他に類なき若き婦人の好機關としたい。

▲當代名流の小說詩歌の新作、評論、評釋を初め、苟くも文學に稗益する材料は、先んじて之を載せ、一般の婦人が心得となる先輩の重要なる談話と相俟つて、愈々記事の精選を計ります。

▲而かも定價は原色版、寫眞版の美麗、紙數の多大なるに比較して此種雜誌中の最も廉なるものです。（改正定價表は次頁を見よ）

**女子の覺醒すべき時代は來れり！見よ本誌を**

## 雜報

### ○新年御題

新年御題は「雪中松」と仰出されました、詠進期限は一月十日までゞ書式其他は例年の通り。

### ○陸軍大演習

本月上旬奈良縣下に於て陸軍大演習あり、陛下親しく之をみそなはす爲に鳳輦を關西にすゝめさせらろ、續いて神戸には大觀艦式あり、其等の爲め關西地方の殷盛は一方ならずと云ふことです。

### ○盛んなる書評

本年の美術展覽會は物議も多かつたが批評も盛んでした、各新聞雜誌擧つて畫評を掲げ出したのは美術思想發展の上に喜ばしいことです。

▲注意　新年號投稿十一月十五日締切

## 女子文壇改正定價

《四十二年一月發行分より》

▼定期發行分▼（毎月一回一日定期發行）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一冊（一回分） | 定價金拾五錢 | 郵税一錢五厘 | 合計金拾六錢五厘 |
| 三冊（三月分） | 同前金四拾三錢五厘 | 同四錢五厘 | 合計金四拾八錢 |
| 六冊（半年分） | 同前金八拾四錢 | 同九錢 | 合計金九拾三錢 |
| 十二冊（壹年分） | 同前金壹圓五拾六錢 | 同拾八錢 | 合計金壹圓七拾四錢 |

▼臨時增刊分▼（年四回（二月、五月、八月、十一月）臨時增刊）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一冊（一回分） | 定價金貳拾錢 | 郵税一錢五厘 | 合計金貳拾一錢五厘 |
| 二冊（半年分） | 同前金三拾八錢 | 同三錢 | 合計金四拾壹錢 |
| 四冊（壹年分） | 同前金七拾貳錢 | 同六錢 | 合計金七拾八錢 |

▼定期發行及び臨時增刊▼（全部一ヶ年十六回）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 四冊（三月分） | 定價前金六拾三錢五厘 | 郵税六錢 | 合計金六拾九錢五厘 |
| 八冊（半年分） | 同前金壹圓二拾二錢 | 同拾貳錢 | 合計金壹圓三拾四錢 |
| 十六冊（壹年分） | 同前金貳圓二拾八錢 | 同二拾四錢 | 合計金貳圓五拾二錢 |

明年初刊分より右の如く定價改正致します從來の定價にて前金拂込の方は此改正表を御覽の上不足分と繼續前金をお早く御拂込願ふと存じます

## 懸賞贈額

▲甲種（短篇小説・美文）
天賞：金參圓
地賞：金壹圓五拾錢
人賞：金七拾錢

▲乙種（お伽噺・日記文・新論文・賞用文・新體詩）
天賞：金貳圓
地賞：金八拾錢
人賞：金四拾錢

▲丙種（和歌・俳句・短文・圖書・餘興・滑稽・歌謠・學校生活）
天賞：金壹圓
地賞：金五拾錢
人賞：金貳拾錢

○各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

## 定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外定期增刊四回發行（三、五、七、十一月十五日）臨時增刊貳回發行（四月十月例號二倍）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一冊（定期百頁） | 前金拾錢 | 郵税共 | 計金拾壹錢 |
| 九冊（增刊トモ半ヶ年分） | 前金九拾五錢 | 同 | 計金壹圓○五錢 |
| 十八冊（增刊トモ一ヶ年分） | 前金壹圓八拾錢 | 同 | 計金貳圓 |
| 六冊（增刊ナシ半ヶ年分） | 前金五拾七錢 | 同 | 計金六拾三錢 |
| 十二冊（增刊ナシ一ヶ年分） | 前金壹圓○八錢 | 同 | 計金壹圓貳拾錢 |

〔備考〕
○定期及增刊は各拾錢郵税壹錢
○臨時增刊は金貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢増すと
郵便切手代用壹割增○收入印紙謝絕

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は――第壹七貳九番

明治四十一年十一月十二日印刷
明治四十一年十一月十五日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社
特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



【東京秀英舍印刷】